

序

我が帝國ハ一度び征清膺懲の師を起し東洋の平和を永遠ニ企圖するが爲め足を朔北の寒風に凍らし身を臺南の炎熱に爛らし百戰百勝の勢を以て此大目的を貫徹し遂に清國をして和を本邦に求るの已を得ざるに至らしめたる所以ハ一ニ上の大元帥陛下の御威徳により下の將校下士卒諸氏が盡忠の致す處たり然して此戰勝の結果として帝國が領有したるは東亞南方の要島たる臺灣及び之に附屬する澎湖群島たり然り爾來此島嶼が帝國の領土となり我が王化は浴せしむるに至りてハ古今未曾有の慶事として國民ある者抃舞其所を知らず書肆今古堂本巻を發行す其所載たるや臺灣本島及び附屬島嶼か如何なる狀況に在りて如何なる人情風俗に存し如何なる言語教育の下に如何なる農工商業に生活し如何なる地味土質に

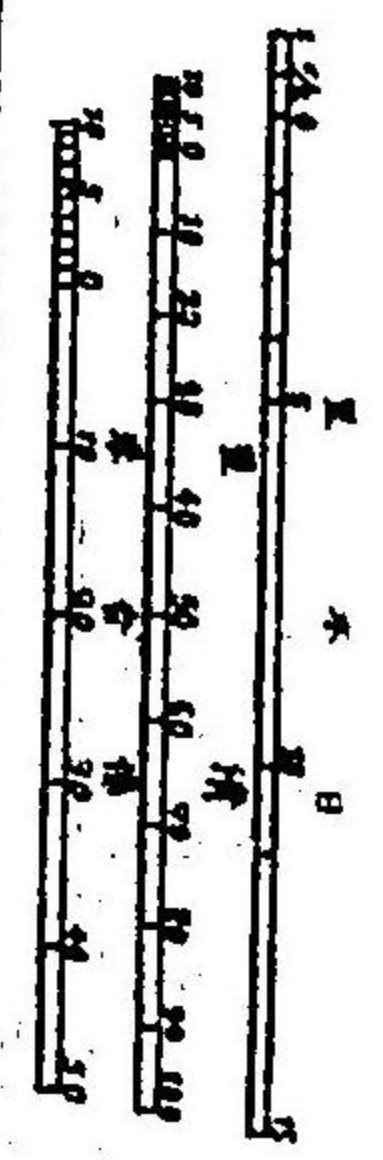
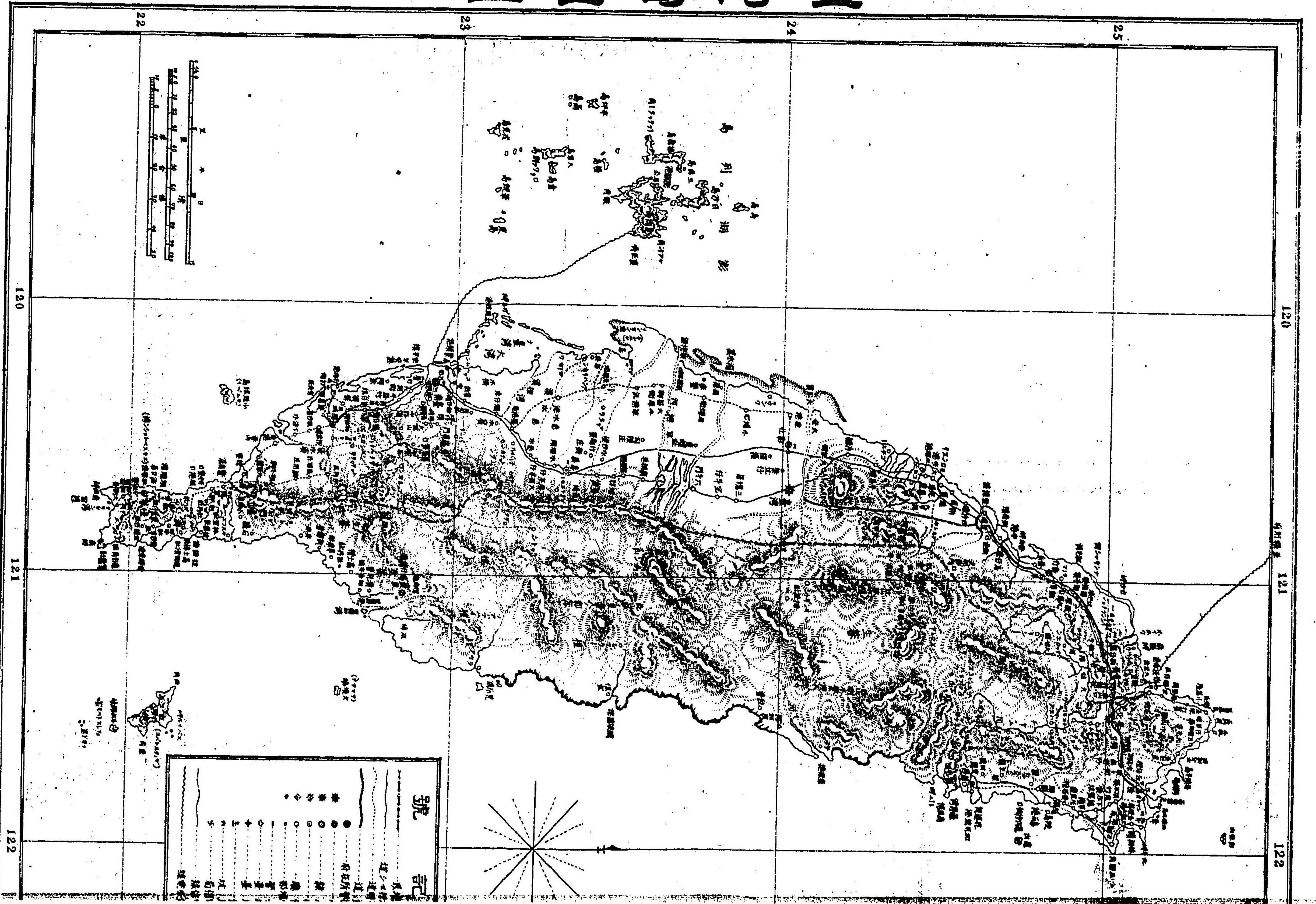
如何ある生産貨殖を勉め如何ある法令制度の下に如何なる權義自由を有するやを詳述して餘すなし此有望なる新領土を愛し往いて拓地牧民に任する者農工商業に従事する者均しく一讀して可かり余も本書を繙ひて始めて新領地の形勢を了知し欣喜堪へず燕辭を贅して本書の發刊を祝す

明治乙未の夏凱旋軍隊販京の日

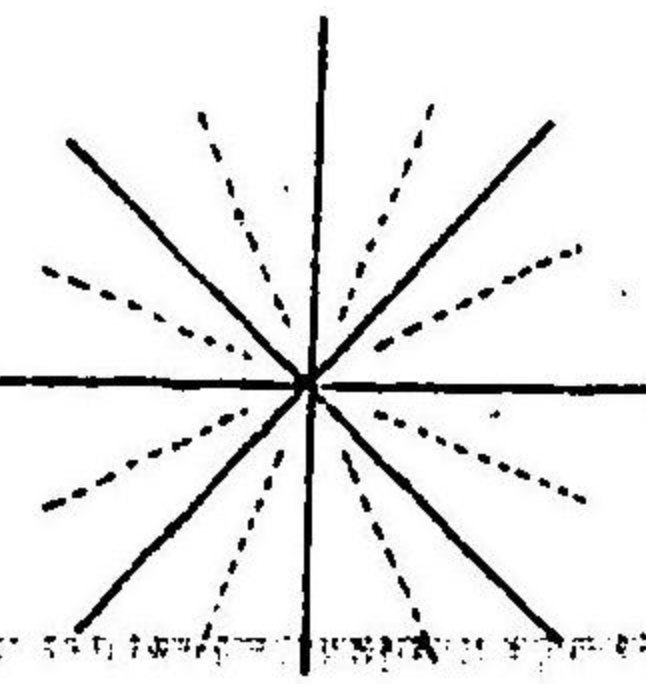
悟堂散士識



# 臺灣全圖



記號	
●	府縣所屬
○	鎮
◐	鄉
◑	村
+	山
+	坑
+	橋
+	堤
+	海
+	島
+	湖
+	河
+	溝
+	路
+	鐵路
+	電報



120

121

122

120

121

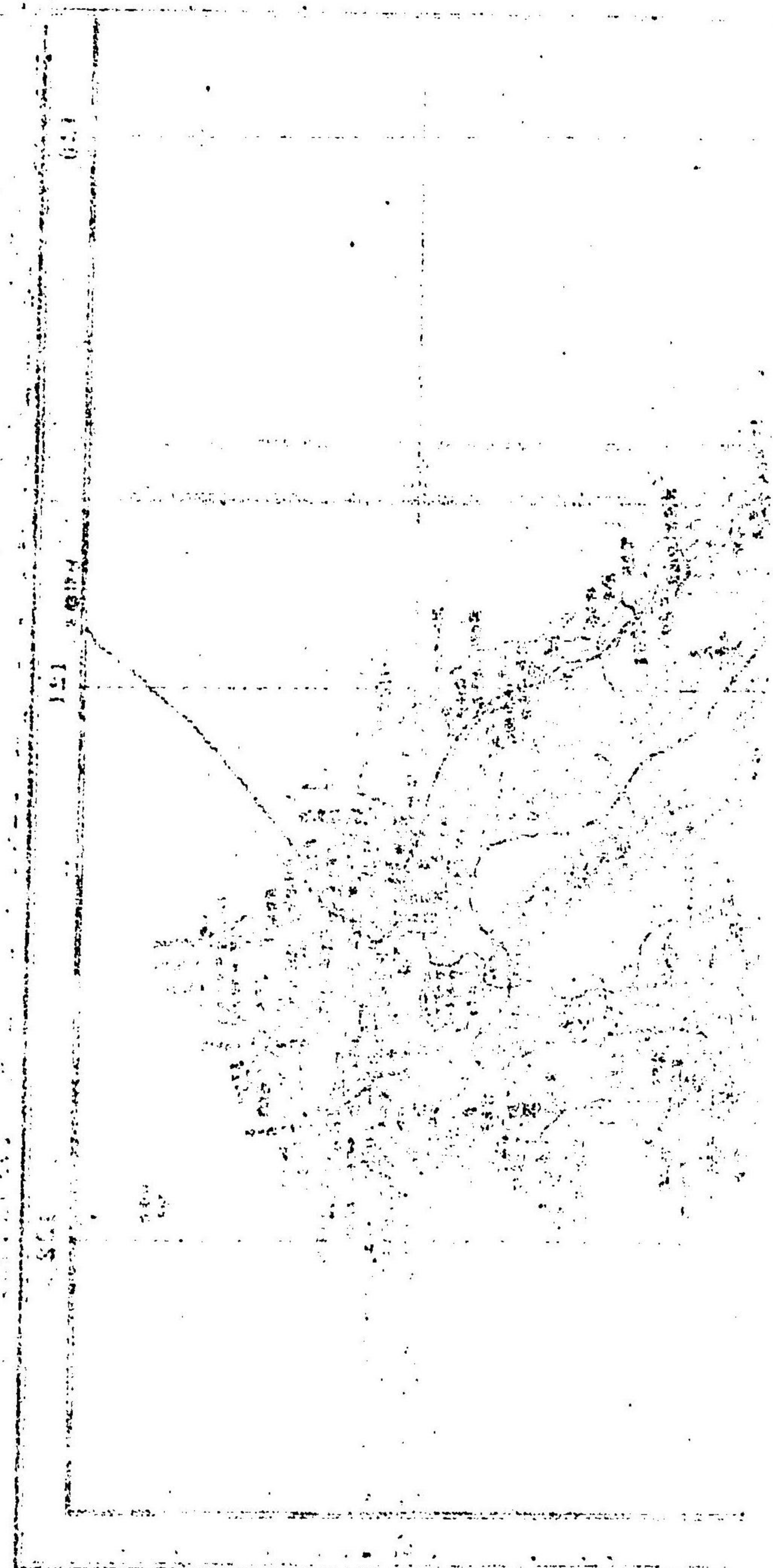
122



# 新領地臺灣島

## 目次

○形勢	位置、廣袤、面積、及び人口	一	丁
○山脈		二	丁
○地質		三	丁
○河湖		五	丁
○港灣		六	丁
	基隆港	八	丁
	淡水港	十	丁
	安平港	十一	丁
	打狗港	十二	丁
○附屬島嶼		十三	丁
	澎湖列島	十三	丁
	紅頭嶼	十六	丁



火燒嶼	十七丁
○氣候	十八丁
○動物	二十丁
○植物	二十二丁
○礦物	二十四丁
○鐵道	二十六丁
○電線	二十九丁
○政治區畫	三十丁
臺南府	三十二丁
安平縣	三十四丁
鳳山縣	三十四丁
恒春縣	三十七丁
嘉義縣	三十九丁
彰化縣	四十一丁
新竹縣	四十三丁
臺北府	四十三丁

淡水縣	五十三丁
基隆廳	五十四丁
宜蘭縣	五十六丁
○道路	五十八丁
淡水港より基隆を経て臺北府に至る沿道の概況	
基隆より宜蘭縣を経て蘇澳に至る沿道の概況	
臺北府より臺南府を経て打狗に至る沿道の概況	
○沿革及び現時の事態	九十二丁
○風俗及び言語	百十丁
○日用臺灣土語	百十五丁
○物産	百三十一丁
○商況及び物價	百四十五丁
○番地貿易	百六十丁

○生番事情……………百六十九丁  
 ○生番地紀行……………百八十五丁

目次終

新領地臺灣島

◎位置廣袤面積及び人口

臺灣本島は西洋人之を稱して「フオアモサ島」と云ひ、雖然支那東海の表に屹立し、北緯二十一度五十三分より二十五度十六分、南至東經百二十度十五分より百二十二度四分、至るの間、位す北は沖繩諸島、西は臺灣海峡「フオアモサ、サナンチル」を隔て、清國福建省と對し、其間相距ること凡そ一百英里、東南は渺茫たる海、西面す地形北より起りて蜿蜒南に奔り、其長さ凡そ二百三十英里、東西幅員の最も廣き處七十乃至八十英里、よして全島の面積一萬四千九百八十二方英里と爲す、現今之に住する支那人及び熟番人を合せ、人口大凡そ三百萬人を算ふ。

◎形勢

●位置廣袤面積及び人口

島内峻山高嶺峨々として其大部分は聳え就中其高きは往々一萬尺の上に出づるものあり殊に東半部は山嶽重疊起伏して未開の地を爲し専ら番族の棲住する所と爲ると雖も西半部の地勢平坦肥沃にして能く粗耕に適し隨て耕地大に開け其南方に至ては沃野四十英里に達するものあり

◎山脈

本島山脈は北より起りて南に奔り蜿蜒起伏して終るモリソンシルバ川の二山に達す此二山の生番地方の中央に屹立し水面を抜くこと各一萬二千尺にして天氣朗晴あるに當り遠く海面より望むとさし二山の高峯峻峭として雲際を聳ゆるを見るべし實に臺灣島中の最大高山とす

臺北府管内にも亦數條の山脈あり概ね火山質を帶ふるものにして其

最も著名あるを紗帽山と云ふ千八百八十一年淡水海關の測量に據ると其高さ三千六百五十尺にして凡そ三千百尺の處に至れり處々硫瀾を噴出す此邊六個所の温泉あり其大に發出するときは響き數里の外に聞ゆ斯の如くにして淡水河岸の地の一帯は火熔石質を爲せり此邊一帯は地震多し曩に千八百六十七年冬季に於るが如き淡水と基隆との間の一激震あり此時基隆港内の海水俄然激動して外海に退き其洩瀆に在りし金包里と云へる一村落は爲め掃蕩し去られたりと云ふ

◎地質

今日臺北府所在の地の一帯は平地を爲せるも昔時在ては一大沼湖たりしを疑はざるの徴証あり想ふに今日南山北山と稱する二高峰の間を管て一條の高隆地ありて之を連接せしむ當時偶水壓の爲め



壊崩せられ其土塊湖中に入りて之を填め水を溜し以て一大平原を現  
 出するに至りしものあらん嘗て此地に於て井を穿ちしは二百尺の深  
 さに達するに迨び粘土砂細石等と會し二百六十尺の深さまで迨び貝殻  
 及び朽木等を混じたる青色粘土と會せりと云ふ  
 本島の西岸一帯に泥濘として又淺游を有するを通例とす蓋し本島の河川  
 の皆西に向て奔流し雨水常と土沙を混流して海面を填むるに因るも  
 のからん斯の如く西岸に漸次填游して陸地を爲すの状勢は居るも東  
 岸に則ち然らず斷崖峭立し水底深く激浪澎湃として終歲靜穩の日亦  
 く船を寄するに其だ難し其極南に位する一帯の海岸に概ね珊瑚石灰  
 質を帶ぶ此珊瑚質は多く二千尺の高山に達する處に於て發見するこ  
 とあり而して右極南の海岸に粘土砂石珊瑚質の三者を混合したるも  
 のより成りて其表面の銳利なる宛も刀刃の如く常に鋸齒形を爲し殊

其險阻ある獸類と雖も容易に通行する能はざるものあり土番等出  
 獵の爲め此を通行するに常と野猪の皮二三枚を合せ作りたる靴を  
 穿つと云ふ

◎河 湖

臺灣本島の其地形上より之を觀察するも曾て大河の通すべき形勢を  
 存せず故に島中一も運輸に便良ある大河あり但北方基隆より淡水の  
 滬尾に至るまで一條の河線流下するあり土民等依て以て運輸の便を  
 得ること少からず然れども此河も亦臺北府の艦艚に達するまでの淺  
 瀬急湍處々を存するを以て常と平底の小舟を用ふるに非ざれば通航  
 する能はず爲め其利便に於て大に欠く所なきに非ざれども既と艦  
 艚を過るときは小漁船を用ひ滬尾に至るまで自在に通航するを得  
 るあり

本島の西部の土地低く平原開け曠野漠々として海濱より數十里の内  
地を擴り其間中央諸山より流出する小川細流縱横を貫通し處として  
灌溉の便は欠くものあるを見ず故に甘蔗米作の如き最も此地に適當  
ありと爲す

本島内部の湖水點々として各處に散在す其最も大なるものを水社  
湖と云ふ本島の中央に在りて土番其周圍に棲居す故に支那人此等の  
土番を稱して水番と云ふ

◎ 港 灣

本島は港灣の數甚だ多し北に基隆あり西に打狗あり其他東港、笨港、  
布袋、嘴港、麥寮港、鹿港等の小港ありて其西岸各處に散在す且雖も就中  
巨船大舶を繫泊すべき良港と爲すは基隆、打狗の二港にして餘は皆支  
那船の碇泊に便するのみ但し今日の現状よりするときは基隆の水深

くして數隻の船舶之を繫泊するを得べしと雖も打狗の吃水淺き船舶  
をあらざれば之を入ること能はず然れども地形上より之を云ふとき  
は打狗の自然の便を備へたる良港として一朝浚渫の工事を施さん  
の數十隻の船舶も安全容易之を繫泊するを得べく實は臺灣第一の  
良港と爲るべし又小港中に在ても鹿港と稱するは本島の中央に位す  
る彰化縣の要港として嘗て清佛戰爭の際佛艦臺灣の諸港を封鎖した  
るに當り支那人等支那本部と通信を爲すに大抵此鹿港よりしたりと  
云ふ又恒春縣の琅璠灣其他極南岬(一名灯塔)と南西岬との間に連る諸  
灣の總て東北定期風の間之を碇泊場と爲すを得べし然れ共西南定  
期風の激甚するに當りて本島の諸港の皆甚だ危険にして特に基隆の  
如き良港と雖も波浪激高して船舶の安全を保すること能はず又東北  
一帯の海岸に西南風と東北風とを拘へらす波浪常々激高して終歲殆

んど静穩の日あく爲め船舶の寄繋又便するの港灣ありし  
本島の港灣中從來清國に在て特に防備を爲せしもの四あり基隆一名  
鷄籠淡水一名滬尾安平打狗是れあり皆本島首要の港に係るを以て左  
よ之を掲記すべし

### 基隆港

基隆港は一名鷄籠と云ひ本島の北岸に在りて我が長崎を距る六百三  
十七海里清國上海を距る三百七十六海里福州府を距る百五十海里廈  
門を距る二百三十五海里の處に位す三面に山を負ひ僅か一港口を  
北方に開き以て海に通ず故に此港西南風は之を避くるに便あるも東  
北風は之を防ぐに適せず加之潮流極めて急激あるが故に小体の船舶  
に在ては仮令風浪あきも來往頗る困難あるを免れず本港沿岸の諸山  
は系脈極めて錯雜にして數條の平行線を爲し表に斷崖絶壁を呈し特

に防禦に利あるに似たり曩に清佛交戦の際佛軍之を陥落するに極め  
て困難を感じたるは職として其地勢の然らしめたるに由らざるはあ  
りし港の南端に基隆街あり人口未だ詳あらざるも凡そ七萬と稱し頗る  
繁華の状あり菜穀は豊饒ならずと雖も大に石炭の産量に富み年々海  
外に輸出して外國貿易の主品と爲す故に此港は別な良港を以て稱す  
べからざるも地位の緊要あると石炭の産出地あると鐵道電線の設置  
あるとの點よりするときは一朝有事の日に當り本島の防禦地とし艦  
隊の集合地として極めて重要の一港たるべし  
本港防禦は曩に清佛交戦の際一旦佛人の爲め破壊せられたるも爾  
後海關東方の山上及び港口の東方ある西樓山島一名椰子島の二ヶ所  
に砲臺を築設せりと云ふ然れども未だ其詳あるを知らず今日清交戦  
前より於る本港の駐防兵を聞くに歩兵二營(人員一千〇十八人)砲臺砲兵

一營(人員四百三十二人)ありしと云ふ

### 淡水港

淡水港は一名滬尾と云ひ本島の北岸に於て基隆を南に距る日本里程直徑六里にして淡水河口を溯る凡そ二千米突の右岸に在り而して清國福州府を距る百三十七海里廈門を距る二百〇三海里とす港内水淺くして巨大の船舶之に入るを得ず滬尾街は淡水河北岸の砂洲を距る日本里程太約一里の處に在りて人口未だ詳からざるも凡そ十萬と稱す本港は千八百五十八年始めて貿易港と爲せしも未だ繁昌の域に達せず物産は茶樟腦の類を主とし千八百九十一年の調査に據れば輸出総額八百十六萬三千餘圓に達す亦以て望を將來に期すべきの一港と爲すべし

本港砲臺は唯一ヶ所のみ其位置は水雷局の北方高地に在りて露天砲

座四個を有す備砲は千八百八十五年の製作に係る「クルップ」式鋼砲二門にして此砲臺より水雷局に至るの間は掩護したる交通路を設け又此砲臺に連接して明治十七年の築設に係る長連系堡あり此地は實に本港の鎖鑰と稱すべく明治十七年清佛交戦の際佛將クールベール艦隊を率めて之を砲撃したるも竟に之を抜くこと能はずして止みたり今日清交戦前より於る本港の駐防兵を聞くも歩兵二營(人員八百十六人)ありしと云ふ

### 安平港

安平港は臺南府(舊臺灣府)の西方に當り日本里程太約一里の處に在る貿易港にして我が長崎を距る凡そ八百七十海里清國上海を距る六百五十海里香港を距る三百海里厦門を距る百八十海里とす別は繁昌ありる港と爲すも非ざるも臺南府に出入する貨物は一切此に之を揚載す

聖泊地は海岸を距る日本里程凡そ一里の處に在りて又港内より臺南府城に通ずる一條の運河あり以て大に運輸の便を助く然れども港内砂洲多く波浪常々激高し西南定時風の間は殊に船舶の聖泊に安全をらす

本港は戸數三百、人口凡そ千五百あり輸出品の首たるものは砂糖、米、樟腦、茯苓、芝蔴、海産物の類にして千八百九十一年の調査に據れば輸出の總額四百八十二萬二千餘圓に達せり

本港は港口防禦の爲め三坐の砲臺を設くと雖も未だ其詳細を得ず今日清交戰前より於る臺南府及び其附近の駐防兵を聞くに歩兵四營二起（人員一千七百十九人）砲臺砲兵一營（人員三百五十人）水師一營（人員五百四十四人）ありと云ふ

打狗港

打狗港は一名旗復と云ひ臺南府の南方に當り日本里程大約十五里の處に在り本港は天然の良港とも稱すべき貿易港なれども現時に在ては錨地淺きが爲め中体以上の船舶は之に寄泊するを得ず近年漸く衰頽し赴くの勢あり實に惜むべきあり

本港防禦の爲めは港口兩岸の丘上に各一坐の砲臺を設くと云ふも未だ其詳細を得ず今日清交戰前より於る打狗及び鳳山縣附近の駐防兵を聞くに歩兵三營（人員一千五百二十五人）砲臺砲兵一營（人員四百三十八人）ありしと云ふ

◎ 附屬島嶼

本島に附屬する島嶼其數少からずと雖も今其重なるものを掲ぐれば左の如し

澎湖列島

澎湖列島は西洋人之を稱してビスカドリアスと云ふ支那本部と臺灣本島との中間に在りて北緯二十三度十二分より二十三度四十七分に至り東經百十九度十九分より百十九度四十一分に至り其臺南府を距る百七十五清里厦門を距る凡そ三百清里とす

此列島は昔より三十六島ありと稱すれども實際の調査を據れば特有名稱の記すべきもの五十五島を過ぎず其中人民の居住するものは約二十餘島のみにして總列島の人口凡そ八萬と稱し概ね厦門地方より移住せしものを係ると云ふ列島中最も大なるものは澎湖島にして土人之を大山島と稱す英國海軍大佐コーンソンの測量を據るに其周圍四十八英里を爲し之を次ぐものは凡そ三英里を隔てたる漁翁島即ち西洋人の所謂フィッシャー島にして支那人之を西嶼と稱し周圍十八英里を爲せりと云ふ此二大島と北海島即ち一名白沙島の一島相抱

合して内部に三十餘隻の艦船を容れ尙ほ餘あるの良港を形造り地位は南洋の要衝に當り臺灣の咽喉を扼し實に支那南部に於る自然の最良軍港を爲せり左れば曩に清佛交戦の際佛軍先づ之を占領して根據地と爲し今回又我が征南軍も最先に之を占領せしもの故なきも非ざるあり澎湖島廳の在る處を媽宮港と云ひ人家凡そ七八百戸を有す數島環列の間別に一澳を開き風波靜穩にして潮水の干満如何も拘はらず船舶の寄泊も最も便あり左れば夏秋の交臺灣海峡の風浪最も烈しき季節に當ては支那の蓬船皆此に寄泊すと云ふ澳の外部に漁翁島あり内部に新城龜山蛇山等ありて互に相對峙せり

此列島は山と稱すべきものなく概ね平坦にして一望際なく土地は赤土にして一樹の生殖するものなく隨て降雨稀れ又飲水乏しくして且つ惡質あるは實に一大欠點と謂ふべし然れども樹木も之を栽培せ

ば多年を費さずして枝葉繁茂し綠蒼々たるを見るに至らん居民は農事を勉めず米穀を産せず僅か高梁西瓜南瓜其他の野菜類を栽培するも斷えて肥料を施さざるもの、如く作物の勢ひ甚はだ微弱かり而して土民等常々鹽魚落花豚豕鶏及び鵝卵の類を臺灣に齎らし之を米穀甘藷菓物其他の必需品と交易して本土に持歸るを例とす

澎湖島又は元と媽宮港と測天島と舊和蘭砲臺の三處に砲臺ありしが明治十七年佛軍の始めに破壊せられ爾後又補修新築する所ありしも今回我が征南軍の爲め再び悉く破壊せられたり今日清交戰前より於る列島の駐防兵を聞くに歩兵四營(人員二千三十六人)砲臺砲兵一營(人員五百三十八人)水師一營(人員五百〇九人)ありしと云ふ

### 紅頭嶼

紅頭嶼は西洋人之をポテルトバゴー島と稱し臺灣本島の東南二十六

海里の處に在りて凡そ七英里の間を延長す此島又は番族多く棲住し総て六七社を爲し四ヶ所を散在し男女合せて一千人を算ふ此等の番人は毫も耕種の事を知らず専ら漁業と牧畜とを以て生計と爲す島に樹木あり椰子多く動物は羊豕鶏の外此に産するものあり居民は臺灣の生番と毫も外貌を異なせざれども其性質に至ては稍馴良にして風俗は頗る阿眉番人より類似するものあり羊を山に飼ふときは各其耳を切り以て互ひの所有を分別す此島は一種皮毛の甚だ美麗なる山羊あり土民等之を名けて「カクリー」と云ふ「カクリー」とは葡萄牙の語にして一説に據れば此山羊は曩昔葡萄牙人臺灣に來り貿易せしに當り之を土民に與へ今尙は繁殖して此に存するものあらんと云ふ支那人の此島に來り貿易するものは皆護身の爲め小銃を携ふ

### 火燒島

火燒島は西洋人之をサマサナ島と稱すホテルドバゴ一島の北三十四英里の處に在り臺灣の寶藏番地を東に距る十五英里にして人口凡そ五百餘を有す此島の住民は元と琉球の漁人にして此に漂流せしものありと云ひ或は福建南部より移住せしものありと云ひ未だ其孰れか信あるを知らず

◎氣候

臺灣の氣候は温熱にして周歲寒を覺えず夏季は殊に炎熱ありと雖も斷えず諸山より吹き下す涼風の爲め大に暑氣を減殺するが故に敢て健康を害するに至らず屋内或は樹陰の如きの晝間と雖も華氏九十度より昇ること稀れにして夜中の約ね八十五六度の間を昇降し殊に露氣清涼あるを以て大に爽快を覺ゆ冬季の往々五十度以下ることあるも尙は一綿衣を以て過すべく壯年の輩は一夾衣を以て送るものあり要

するも春夏の候に降雨少くして旱魃多く秋冬の候に至れば霖雨濛濛として時々至り乍ら來り乍ち收り一日の間陰霽數回及ぶを常とす又或は連日滂沱して歇まざることあり一雨あるときも濕氣空に満ち屋内の被服物件皆濕氣を含むこと本邦梅雨の候と異ならず概して氣候の順良ありと謂ふべし

天氣の快晴の日多しと雖も時々東北風起りて砂塵を卷き屋内爲め塵埃に埋めらるゝことあり殊に東岸一帶の地の東北の定期風常々暴威を逞らし之が爲め與南の平原及び附近の溪間を除くの外斷えて耕作に従事するものなきに至る

左に掲ぐる所の明治二十年より同二十四年に至る五ヶ年の間臺灣本島に於る毎月の最高低温度并に平均雨量を示す所の實驗表を係る



平均	明治二十二年 (千八百八十七年)		同二十一年 (千八百八十八年)		同二十年 (千八百八十九年)		同十九年 (千八百九十年)		同十八年 (千八百九十一年)		同十七年 (千八百九十二年)		最高	最低
	南	北	南	北	南	北	南	北	南	北	南	北		
二・五七	〇・五六	六七	三七	三三	一〇・七六	一〇・七六	三七	三四	四七	〇・五	七・七	七・七	六六	六六
二・五四	六六	九七	七七	九四	一九八	一九八	七七	九四	一七	一四・〇	五・三	五・三	六六	六六
五七	六六	二四	六七	〇八	五・四	五・四	〇八	五・四	八七	八七	三・八	三・八	五・二	五・二
五四	二二・六	八四	四八	五五	二・五	二・五	四八	五五	三三	三三	五・八	五・八	五・七	五・七
九・七七	三・三	四八	七八	七八	七・七	七・七	七八	七八	六八	六八	八・八	八・八	五・五	五・五
四・六四	三・三	八八	七八	九八	七・八	七・八	九八	九八	八五	八五	四・五	四・五	八四	八四
一・六八	一・三	〇六	三六	三六	一・一	一・一	三六	三六	九八	九八	七・〇	七・〇	六八	六八
四・一五	一・三	七六	九六	九六	四・一	四・一	九六	九六	〇・六	〇・六	三・九	三・九	五・六	五・六
八・八八	一・三	五・六	四九	四九	七・四	七・四	四九	四九	五九	五九	一・一	一・一	八九	八九
六・〇六	一・一	四七	二七	二七	三・七	三・七	二七	二七	六四	六四	一・七	一・七	六九	六九
九・二九	一・一	四九	二九	二九	五・九	五・九	二九	二九	九八	九八	〇・〇	〇・〇	三九	三九
二・六六	一・一	四九	二七	二七	五・九	五・九	二七	二七	七六	七六	三・七	三・七	二六	二六
七・六九	五・三	七四	五九	五九	〇・五	〇・五	五九	五九	五九	五九	一・二	一・二	八・一	八・一
四・二七	七・四	四九	二七	二七	三・七	三・七	二七	二七	九八	九八	一・七	一・七	〇・〇	〇・〇
八・六九	七・四	三九	二九	二九	四・九	四・九	二九	二九	九八	九八	〇・八	〇・八	五九	五九
四・一七	一・七	八六	六六	六六	四・九	四・九	六六	六六	七六	七六	五・九	五・九	二七	二七
八・三九	一・七	二九	〇九	〇九	一・〇	一・〇	〇九	〇九	四九	四九	〇・八	〇・八	三九	三九
四・八六	一・三	四六	四九	四九	二・〇	二・〇	四九	四九	五九	五九	四・二	四・二	二六	二六
〇九	一・三	七八	二八	二八	二・〇	二・〇	二八	二八	〇八	〇八	〇・八	〇・八	三九	三九
五・九五	四・六	六五	四九	四九	四・一	四・一	四九	四九	六五	六五	九・三	九・三	一八	一八
二八	四・六	一八	一八	一八	四・一	四・一	一八	一八	六五	六五	〇・八	〇・八	六五	六五
三・六七	一・五	一八	一八	一八	四・一	四・一	一八	一八	六五	六五	二・七	二・七	六五	六五
六・九四	二・三	一八	一八	一八	四・一	四・一	一八	一八	六五	六五	一・七	一・七	二四	二四

動物

本島の動物中獸類にて鹿を重なるものばす其他猿、兎、栗鼠、野猪、臭猫等の類あり深山に入るときは豹、熊、狼等の猛獸も亦之に居り山猫の如きも往々處を因りて棲住し現に臺南府に在ては洋銀四五十仙を投すれば巨大なる山猫の皮を得るゝ難からずといふ

鳥類にては鷓鴣、鴉、鴉、山鵪、其他夏鶏の類甚だ多く殊に野雞の如き類頗る其種類又富めり又冬季に至れば小鴨、鳧の類多く各處の池中に游泳す其他禽獸蟲類として別々甚だ異なるものあるを見ず唯、異とすべしは本島に於て鴉を見ざるの一事に在り

家畜にては水牛、驢、馬、豚等を重なるものばす即ち水牛の農事と役するが爲め各處に之を飼養し驢、馬の旅客を乗するが爲め豚の食用と供するが爲め之を飼養す

又魚類に北部に在ては鰻、尾及ひ基隆に多く臺北府に重なる供給を此に

地又仰ぎ以て之を鱸舸大稻埕の市場に上ばすと雖も品潤澤あらざるが爲め價貴し其種類に松魚鱈鱈の類にして其他泥鰌鯉鮑鱈等の河魚われども多からず蓋し臺北府近傍の人民に多く魚肉を嗜まず其食用は供するに専ら豕と鹿とに在りて牛肉は支那内地の人民と均しく一般之を食せず唯、滬尾は於て西洋人の食用に供する爲め時々之を屠殺することあるのみ又鳥類に重し鴨鵝を以て食用とし一羽の價凡そ三四十錢ありと云ふ

◎植物

現今臺南臺北の兩部内は在て特し米穀甘蔗茶葉等の栽培稻耕は充つる平原曠野の部分を除くの外全島到處深林鬱蒼として頗る良材美果に富めり今之を詳記せん臺灣の一大物産たる樟樹は殊に北部の地も多く中央部より杉樹の類茂く森立し又處々山岳の半腹より巨大

の松樹繁茂し其他野生の無花果樹榕樹烏樹等の深林を爲すもの各處より少からず又露兜樹(臺灣にては林投と云ふ)の如きは全島到處に繁生し海岸より又番石榴の類多く其他桃李橘を始め種々甘味ある果實の類少からず實に臺灣の植物家の爲めは新奇材料を得せしむべき一大園圃にして又熱帯地方に於る物産の調査に取ら頗る有益ある處とす

臺北府より東部と連る諸山よりマンゴ番と稱する種族多く之に據り支那移民と往々争鬪を醸すことあり此等の諸山の深林鬱蒼として樟樹檳榔小楠樹楓樹(重し船材に用ふる硬木)の類多く殊に有名なる臺灣産の藤は皆此山中より出づ

本島の植物菜菓等の同緯度の支那本部に見るべからずして却て遙かより南方より距る熱帯地方に認むべきもの甚だ多し抑も藤は本島の東部

又産し年々淡水港を経て多く海外へ輸出するものあるが此類の藤の馬來地方又産するも支那内地又産せず唯獨り海南島と本島のみ之を産するに蓋し海流の爲め又傳播し來りし又因るものからん歟檳榔樹の如きも亦然りと爲す其他本島又産する種生の植物果物として往々南方諸島又産するものと相同じきもの多きに恐らくは南西の大風又際し小禽飛鳥の類風渦の中又捲込まれ遠く空中を飛來する又當り其腹中より傳播せし又因るものからん歟斯の如きは大風中心の通過するるとき往々あり易き事實とす嘗て一漁船あり日本と臺灣との間又在て偶々大風中心を過ぎりし小禽飛鳥の類生きながら夥しく甲板の上又落ち來りしと云ふ

◎礦物

本島又在ては西部又於る沿岸一帯の平原を除くの外少しく内部又入

れば土地頗る凸凹又して山岳溪谷多く之を農事上より論すれば實又價值亦きもの屬すと雖も礦物の点より見るときは大望を屬すべきものあり此等の地方は處として炭脈を有せざるもの亦く殊又或る地方の如き一種可燃質又富める最良の石炭を含有し土民等徒ら又其炭塊を取て火把又代用すと云ふ又北部の各地又於ては硫黃山甚だ多し

中央部又於る高山の間又在ては往々銅鑛を發見せしものあり其他金銀鑛及び寶石の類も亦多く此又含有せり現又外國宣教師某の語る所を聞く又或る土人の如きは嘗て紅水晶を發見したりと云へり又海邊又ては往々粗質の琥珀を發見せしことあり  
打狗及びオールの近傍又ては嘗て石油坑を發見し支那人之が採取又從ひしも未だ好結果を得ずして止みぬ又燃焼瓦斯を噴出するの地

處々多しと云ふ

◎鐵道

本島鐵道は曩より明治二十年即ち清國光緒十三年三月を以て當時の臺灣巡撫劉銘傳建議する所あり始めて之を敷設するに至れり  
 今其計畫の概要を聞くに線路の單線にして軌鐵の鋼製三十六「ポンド」軌鐵の間隔は三呎六吋、最小半徑は五鎖、最大傾斜は三十分ありと云ふ  
 此計畫より從ひ既より臺北府と基隆の間二十哩及び臺北府より南方十二哩即ち合せて三十二哩の疾く之を竣功し今尙ほ南方より向て工事を進運せり

抑も此臺灣鐵道の初め之を英米獨三國の商社より於て入札せしが終り獨の商社より落れし明治二十一年即ち清國光緒十四年を以て業を臺北府より起し漸次北方より延き以て基隆に至り又南方より新庄を経て卑角より

及ぼし明治廿四年一月を以て營業を開始し爾來毎日三回の往復を爲せるが道路の建設橋梁の構造甚だ粗悪なるのみならず軌道の兩側の田地と相平準して全く高低あきが故に一朝雨天に際するが如きは甚だ危険多きを免れず

臺北より基隆に至るの間は在て停車場を設けたる位地の臺北府錫口南港水返脚八堵猴仔口にして又南方の大稻埕橋新庄卑角の各處とす  
 嵌仔口より基隆に至るの間は獅球嶺と稱する高山ありて其嶺下は二百五十「ヤード」の隧道を穿ち以て基隆を通ず

南北兩線路を使用する機關車の總て四輛を備へ客車は十四輛を備ふと雖も各回の列車は僅かに二輛許し止りて北線の乗客は平均六七十分名より過ぐることをあし又停車場の切符賣出所の如きも其構造簡單を旨とし一時の小屋掛を類するものを以て事務を辨し居る有様あれば今

日の現状より評するときの單に模型の鐵道と云ふを當れりと爲すべし  
 初め劉銘傳の此鐵道を企畫するや其目的とする所臺灣西岸の全地を通  
 じて東北岸に至り以て基隆と連絡せしむるに在りたり然れども故  
 ありて清國政府之を許さざりしを以て事遂に成らず半途にして息  
 たり劉は許多の事業を試み随つて其費す所も非常な多かりしが邵友  
 濂替つて巡撫と爲るに迫り百事節減を旨とし劉の此鐵道の爲めは備  
 聘せる外國人の如きも悉く之を解雇して僅かに機關師一人を留め工  
 事の甚だ遅慢あるも拘はらず尙ほ其鐵道を南方に延長するに從事  
 せしめたり蓋し此南方線に於る鐵道の利益の之を東北線に比して大  
 な優るものあるに似たり曩に南方線の未だ敷設あらざるに當てり小  
 農等茶其他の貨物を艋舺市場に輸送するに必ず人肩に藉らざるを

得ざりしも今の鐵道に依り之を運輸するを得るのみならず乗客切符  
 を所持する者の多少の貨物を手荷物とし無賃に之を積込むことを許  
 され大に便を得るに至れり早晚又別な貨物列車を往復せしむるの時  
 機に達せんとす今運賃の概略を掲ぐるに左の如し

乗車賃 臺北府より基隆に至る二十哩間 金拾貳錢  
 運賃 一哩に付一噸金拾三錢より拾八錢

但し石炭の四錢とす

◎電線

本島内の清國福州府との間を通ずる海底電線ありて淡水港より福州  
 府連江縣の芭蕉山に達す其距離凡そ一百一十一英里にして明治二十年  
 (光緒十三年)十月より通信を開始せり又別な安平港より澎湖島に通  
 ずる一條の海底電線ありて之と連絡す今臺灣所管内に在る電信局を

設くるの位地の基隆港淡水港(滬尾)臺北府臺南府安平港打狗港澎湖島の各處とす

◎政治區畫

臺灣の政治區畫の變は明治二十年即ち清國光緒十三年を以て劉銘傳等の奏議する所あり逐次新設改稱せしもの多し而して現今の區畫を表掲するよ左の如し

改設	府州縣廳名	位地	備考
新設	臺灣府	彰化縣の橋孜圖	臺灣府の昆舎は在り位地未詳
新設	臺灣縣	水沙	
	鳳山縣	半屏	
	嘉義縣	武巒	
	彰化縣	黃溪	

新設	改稱	改稱	改稱	新設	新設	新設	新設
恒春縣	埔里社廳	臺南府	安平縣	雲林縣	苗栗縣	澎湖廳	臺北府
琅璵	南投街	南甯	赤嵌	六斗	落溪	稻埕	淡水縣
							新竹縣
							基隆廳
							宜蘭縣
							臺東直隸州

彰化縣の東南四十清里	舊臺灣府	舊臺灣縣	嘉義縣の東、彰化縣の南は在りて即ち濁水溪より姑石圭溪に至る	新竹縣の西南	明治廿七年七月(即ち光緒廿年六月)臺灣府の地理不便なるが爲此府を以て省會とせり	舊瑪瑙廳	水尾の位地未詳
------------	------	------	-------------------------------	--------	---	------	---------

計 府三 直隸州一 縣十一 廳三

上表に據れば臺灣の政治區畫は三府一州十一縣三廳より成を見るべし今此等の各區畫を就き建治地理、風土、人口、盛衰等を記述せんと欲するも其新設に係るものに至りて未だ區域等の明詳を知らざるものあり因て姑らく舊制の區畫を基き先づ舊首府たる臺南府より筆を起し漸次南方及び及ぼし次て北方を溯り以て之を記述せんとす即ち先づ臺南府より之を始めん

### 臺南府

臺南府の本島の西南の部に在りて元と臺灣府と稱し本島の首府たりしが明治二十年(光緒十三年)省城即ち臺灣府を彰化縣附近に新設せしを以て爾來改めて之を臺南府と稱するに至れり

府城の石を以て之を造り高さ六米突より七米突に至り厚さ四米突より

して壁上處々銃眼を穿ち周圍は八個の樓門を開く各門概ね二重を之を設け城の内外處々古壘あり傳へ云ふ往昔和蘭人此地を占據せし時築造せしものありと此等の土壘は皆千六百三十年の築造に係り大約方六十米突あり牆壁は小磚石を以て之を造り頗る厚けれども今の全く廢頽せり市街の石を鋪き列ね稍清潔の觀あり人口は大約十三万五千と稱す

臺南府の西南は海を控へ東南北の三面は共に沙地多くして沃土乏し殊に其地勢狹隘にして彼の彰化縣、嘉義縣等の田畝平衍にして土地廣沃あるものと比較するを得ず然れども其沙土は又却て甘蔗の爲め甚だ適合せり本府より北の方嘉義縣を通するもの柴頭港庄より木柵庄を経て曾文溪に至るを順路とし南の方鳳山縣に達するもの大橋頭より大林庄營盤口を歴て二層行溪と出づるを本道とす

### 安平縣

安平縣の臺南府の負郭として同府城より西の方十清里の海岸に在り打狗と均しく貿易港の一として此は海關あり人口の凡そ千五百と稱す港内波高く殊に夏秋の候に至れば風最も烈しくして船舶を繫泊するに危し故に西南の風烈しき季節は際すれば漁船帆船の別なく大抵澎湖島又の打狗港に寄泊して難を避くるを常とす本縣の三鯤身と云へる地は洋式の一砲臺あり明治七年我邦より番地征討の師を出せるに當り築造せし所ありと云ふ此他本縣の海岸は一も港灣あり

### 鳳山縣

鳳山縣の臺南府城を南に距る八十清里にして打狗港の東北凡そ二十清里の處に在り今を去る百餘年前即ち千七百八十八年(乾隆五十三年)臺灣林爽文の乱後直ち此置縣の舉あり其當時に在りて氣候甚だ不

順にして移住民類は瘴癘熱を罹りしを以て此は渡來する者甚だ稀ありしが今日に在りては廣東汕頭等より移住する者日一日よりも多し縣城の土を以て之を造り牆壁の高さ凡そ二米突五十厚さ凡そ一米突にして處々射眼を穿ち周圍に城門五個を設く人口の五千と稱すれども市街甚だ繁華ならず

縣城より囊は劉銘傳の開拓に着手せる卑南の地に達するもの二條の新道あり一は縣城より下淡水に出射紫紅泥嘴立里社大島萬溪口大猫裏等を経て卑南に入るものにて其里程凡そ二百十清里とす又一は縣城より均しく下淡水に出赤山崑崙大石巖大猫裏等を経て卑南に入るものにて上の道路より更に近く其里程凡そ百七十清里とす  
下淡水は縣城より東の方二十清里の處に在りて其水源を大潭機と發し西南諸山より發源する旂尾瀾萬丹等の諸流と合し南に流れて海



入る其下流の海に達する處に良港あり東港と云ふ此港の打拘港を南に距る二十英里の處に在りて有名なる米穀の産地に居り南部貿易の要衝に當るを以て自から一小繁華市街を爲し別は又北方臺南府の界内に通する一の河流ありて大に運輸の便を助く其港口は満潮の時深さ一丈餘に達し退潮の時も尙ほ七八尺を下らざるを以て大に支那商船の出入に便あり

下淡水より下れば曹公圳あり水利大に宜しく以て三萬畝の田地に灌漑するに足ると云ふ

縣城より南の方六十清里の海上に東港と相對したる一孤島あり西洋人之をラムゼイツランドと云ふ輿地圖に小琉球島と識せるものは是れあり周圍凡そ二十清里にして人家百四十餘戸人口二千餘を有す島内米穀を産せず居民は魚を捕へ又は雜穀を殖して生を送ると云ふ

縣城より北の方臺南府に達するものに楠梓杭街より橋仔頭街河公店街大湖街等を経て二層行溪に outputs を本道とす又南の方恒春縣に到るものに東門より山仔頂庄東港街埤尾枋寮を経て率芒溪に output して恒春縣界に入るとす

恒春縣

恒春縣の本島の極南に位し東西南の三面に海に瀕し北に率芒溪を境として鳳山縣に接す縣城の西十五清里の處に車城と稱する地あり此より炎山檳榔刺人脚枋嶺鹿塘を経て鳳山縣の境ある率芒溪に達す其里程凡そ六十清里とす又縣城より東の方射寮裏社萬里得社高士佛社八窟灣等を通すれば凡そ七十清里にして牡丹灣に達し此より二十七清里を進めば阿郎臺溪に至り百〇八清里を進めば卑南兎に達すべし卑南社の周圍數十清里の番社にして既に數十年前より清國に歸

化し彼の朱一貫の叛乱を平らげし時の如き此番社の酋長大に與つて功ありしと云ふ卑南社に入るの道路の三四あるも其中恒春縣より射蘇裏に出づるものを以て順路とす番社の元と上十八社下十八社の區分ありしが現今に至ては總じて凡そ五十八社あり又卑南番社の四十六社ありて廣東福建の人民多く之を雜居すと云ふ

縣内より別な港灣と稱すべきものなし唯天氣靜穩あるに當り大沙灣大坂埤の後海射茶楓港等の類一時漁帆船の寄泊便するのみ其他沿岸に在る各溪の皆水淺くして小艇を非ざれば之の出入するを得ず又山後より在る各溪の重なるもの猪勝東八窟灣牡丹灣等にして之を達するより極南より突出したる蘇魯鼻(サウスケープ)を回航せざるを得ず然るに此邊一帶の海中の暗礁多く爲め西洋船の過失遭難少からざ

りしより臺灣海關の曩より洋式の燈明臺を設け以て航海者の便を供せり然るに又蘇魯鼻より楓港に至るの間は常山風強く之が爲め往々船舶の覆没するもの多し支那人之を稱して落山風と云ふ然れども既に楓港を通過し了れば全く此患おしと云ふ

縣内より山多くして田野少なきが爲め居民の生計甚だ困難に屬すれども近傍の諸山に又大茶葉棉花雜穀等の栽培に適するものあり加之縣内元と水利乏しかりしも近來城西より射蘇裏に至るの地は坡塘を築き水を蓄へ溝渠を通せしを以て大に灌溉の便を得るに至れりと云ふ

嘉義縣

嘉義縣の臺南府城を東北に距る一百浬の處に在りて本島の南北を通する要衝に當り人口凡そ一萬五千と稱す縣城の石を以て基礎とし

其上又煉瓦を疊み以て之を築き高さ六米突より七米突に至り周圍又城門四個を設け城壁の外部は幅凡そ十米突の壕を繞らせり

本縣より西南岸は數個の小港あり其最も南に在るを井仔脚港とす次て鹽水港布袋嘴港猴樹港笨港等あり就中布袋嘴港の深さ一丈二尺猴樹港の一丈笨港の一丈八尺にして笨港最も良港に居り一名下湖口と稱すれども北風強きとき港内は碇泊するを得ず急な船を象苓湖に寄せ以て難を避くると云ふ

縣城の東南は火山ありて四時火焰を噴騰す火山の東は河里山と稱する瀾大の山彙あり此邊に住する歸化の生番頗る温馴なりと云ふ

縣内又曾水急水牛稠虎尾等の諸流ありて源を東山即ち生番地と發し全縣を貫流して海に入る夏秋の交降雨甚しきとき河水漲溢して往來甚だ難し又縣城の東北は溝渠多くして頗る水利は富み灌漑至ら

ざる所あり縣内土地豊饒にして南より北に至る百餘清里の間縱横又田畝を開き沃野漠々一望際なきの有様は彰化縣と類す物産は米穀其他果實を首めとし凡そ人類の生活上に利用すべきもの竹筍藟藟檳榔藤芋等にして其種類極めて少からず

彰化縣

彰化縣の臺南府城を距る二百十清里の處に在りて人口凡そ二萬と稱す南は虎尾溪を隔て嘉義縣と接し北は大甲溪を限りて新竹縣と界す土地平坦にして耕作は便あり縣城は煉瓦を以て之を造り高さ十米突より十一米突に至り厚さ六米突にして周圍は城門四個を設く

縣城より南の方抱竹庄東螺を経て刺桐卷に至るものを嘉義縣街道とし又北の方大肚街沙轆塘寓龍菁埔乾等の諸邑市を歴て大甲又出づるものを新竹縣街道とす是れ臺北府の淡水縣と通ずる本道たり又縣城

より東南の方四十清里の處より南投街と云へる一地方あり埔里番六社  
 又通ずるの順路として近時此は埔里社廟を置けり又縣城より東北の  
 方二十清里の處より犁頭店街と稱する一地方あり其附近の沃野數十里  
 又渉り極めて豊饒の區たり

縣内溪流の著しきものを虎尾寮斗大肚大甲と云ふ其源を東山の生  
 番地より發し全縣を貫流して海に入る就中大甲溪の冬春季に際すれ  
 ば水溜れて容易に徒渉するを得べしと雖も夏秋の候に至れば全河漲  
 溢して水勢猛烈を極む此他海口より麥寮港控鹿港梧棲等の小港あれ  
 ども水淺くして巨船の繫泊に便ならず然れども鹿港の清國福建省泉  
 州府の蚶江に相對し支那本部に達すべき海程最も近きを以て清商の  
 類此は輻輳し貿易頗る繁昌を極む本縣の水利至便にして物産極めて  
 豊饒あり

新竹縣

新竹縣の元は淡水縣の所轄に屬せしが明治八年(光緒元年)新に置縣の  
 議起り同十一年(光緒四年)に至り始めて之を新設し人口凡そ四千五百  
 と稱す縣城の石と煉瓦を以て之を造り高さ十米突より十一米突に至  
 り周圍は城門四個を設く

本縣南に大甲溪を隔て、彰化縣に接し北に頭重溪土牛溝を限りて淡  
 水縣に界す背後は大山を負ひ前面海に臨み土地肥沃にして溪港多し  
 此等の溪港中最も長途を流るゝもの香霧後壠中港香山諸港の溪流  
 とす然れども此等の諸港の水淺くして巨船を繫泊するに便ならず故  
 に本縣の物産の概ね之を基隆滬尾等と陸送す

臺北府

臺北府の四面は山を繞らし淡水河其間を通じ府城の南方日本里一

里許の處を流れ府城を傍ひ繞つて城西數丁の處を北に向つて過ぐ抑も此淡水河の源を中央の山間を發し北を流れて基隆に至り轉じて又西を流れ再び山間を出波して本府に入り更北流して滬尾港を出て終り海に入る

本縣地質の粘土にして山地平野共に樹木を乏し山地に乱草と灌木とを交へ間雜木及び松樹の類を見るも皆矮小にして大樹なし山の最も高さもの府城の東北に在りて其高さ二千尺の餘に及ぶものあり距離も亦甚だ近くして日本里程僅か一二里の間を接す又南方の諸山の距離漸く遠かりて三四里日本里程を隔り西方の諸山に又更隔りて五六里(日本里程)に及べり此四山の中間に土地平坦にして水田多く又到る處は孟宗竹の藪を爲せり

府城の近年の新築は係り石を以て之を疊み周圍は高さ三間餘厚さ二

間の城壁を繞らし壁の上部に支那一般の築城法に従ひ之を凹凸形と爲し以て射彈を便し城門の南方に二門東西北の三方に各一門を設けり城壁は傍ひ西南の方淡水河に臨て一大市街あり艦艀と云ふ舊來の瑪口として即ち淡水縣所在地あり戸數凡そ二千許ありて商店櫛比し頗る熱鬧を極むと雖も街衢の陋穢ある支那市街の眞面目を表せり

府城の北門外五丁許の處に又一市街あり大稻埕と云ふ河に臨て人家千五百許あり商店軒を並へ頗る繁昌せり此二市と府城内とを合せ人家凡そ四千戸に滿つ是れ即ち臺北府の市街たり明治廿七年七月(光緒二十年六月)臺灣府の地理不便あるが爲め此府を特り定めて省會と爲せり

府城内には臺北府淡水縣等の衙門あり又文廟武廟天后宮の三大廟ありて何れも壯觀を極む殊に市街は規模廣大にして一般支那市街の比

を脱し大街は幅六間ありて其狭きもの雖も尙ほ二間を下らず然れども新開の地たるを以て城内悉く市街を以て敷き列ぬるに至らず今尙ほ三分の一の水田を存すと雖も早晚數年を出でずして城内水田の跡を絶つに至るべし家屋の概ね二階造りとして彼の支那風の汚穢あるも似ず就中官より於て建築し人民より貸與する家屋あり皆長屋造りにして猶ほ我が東京銀座通のごとく之を人民より貸與するもの中等の家屋として一ヶ月凡そ四弗位ありと云ふ夜の八個の電氣燈ありて滿城を照らし道路の數多の乗合馬車人力車ありて自在市中を通行するを得べく其盛況稍、上海の居留地より彷彿たるものあり

商業の大抵清國福建人の手より之を占め皆大資本を有して目的を將來より期するもの、如く土人よりして大店を有するもの極めて寥々たり商店の雜貨舖、乾物店の類最も多く特一物一品を商ふの店舖少し以て

商業の未だ甚だ盛大からざるを知るは足るべし

城内は私立郵便局二三ありて支那十八省中處として信書の送るべからざるものなく例へば清國上海宛て信書一封を郵送せんと欲すれば價凡そ十錢を投すれば則ち之を得へし然れども遞送の不便あると配達不行届あるが爲め往々數多の日子を費すを免れず例へば上海に至る信書の如き早くも十日遅きは一ヶ月を要すと云ふ

大稻埕も亦艋舺に於るが如く舊來の碼頭として廣東福建等の人多く來住して土人と相半ばす殊に此地は茶の製出盛あるが爲め數年前より西洋人も亦此に來住するもの多く現淡水河岸に於ては盛に洋館を建築し居れり實に茶況の甚だ盛大にして現今西洋人の開店も係る茶商洋行既七軒に迫り又廣東人の開店せるものも十數軒ありて此等の支那茶商の自から數里外の鄉村に行き茶葉を買集め之を製造し

て箱も收め以て外商も賣込む其箱詰の方、一箱半担宛にして二箱即ち一担の價通例八弗内外ありと云ふ又産地たる鄉村も於て製造し此地も持來りて取引するもありて各製茶行の日々數十名の男女を集め揀茶を爲さしめ毎一人も就き一日百餘錢の賃銀を拂ふと云ふ茶樹の甚だ矮小にして復た我邦の茶樹の如くならず茶葉も亦赤色にして味甚だ美ならずと雖も人の嗜好の種々異なるものにして西洋人等却つて此茶を嗜みて我邦の茶を好まず一小臺灣島も於る一年間の輸出高の大は我全國の輸出高も超過するの奇觀を呈す豈驚かざらんや此地の支那形の中小各船常も數十艘碇泊し此も水閘(水閘とい支那舊來の税關)として外國との關係を支那内地も於ても運河楊子江等皆開の設ありて税を徵收すと云ふを設け出入品税を徵收すること艦艇と異ならず而して艦艇開の此地の分局とす此邊も於る河幅の凡そ三四丁

よして深さ六七尺も過ぎずと雖も若し夫れ大船巨船を進むべき河幅水深あらんよの商業上非常の利便を得繁昌今も百倍するものあるべし此地と滬尾港との間も三艘の小船ありて日々淡水河を通じ數回往復を爲す其船賃一人も就き五十文ありと云ふ此地の電信局ありて滬尾基隆上海福建廈門の各處も通じ郵政局ありて官書を遞送し製造局ありて鐵道も關する諸器械を製造し總て此地の洋商等の往來頗る頻繁あるが故も客館の洋式を以て之を造り商店も西洋品を商ふもの多く且つ店も亦大にして此等の概ね廣東人の開く所とす臺北府の城内も在ての飲用水も河水を用ふる處も非ざれども大抵の河遠きが爲め井水を用ふる然るも井の深さ僅か五六尺にして石を登り桶輪も代へ水四面の溜水より來るを以て汚濁にして飲むべからず殊も其水量少く毎朝之を汲む者多きが爲め午後に至れば水皆涸

る人民の概ね此水を砂よて漚し更に明礬を化して之を澄し以て飲用  
 又供す嘗て此地は日本の井工を備ひ府城の中央より一井を掘りし深  
 さ十五丈の餘に及んで終に清良ある水を噴出せりと云ふ蓋し住民の  
 一幸福を發見せりと謂ふべし大稻埕及び艋舺の概ね河水を用ふ其清  
 澄あること我邦の河水より異ならず

此邊の一般に地味肥沃にして平原多く溪水其間を環流して西方の海  
 口に向ひ凡そ三十清里にして八里坌滬尾の兩港に達す本府の西岸に  
 中壠茄冬南崁磺溪八里坌等の諸小港あれども唯支那小船の繫泊に  
 便するのみ滬尾の府城の北三十清里の處に在り又東六十清里の處に  
 基隆あり滬尾の滿潮の時深さ凡そ十一丈五六尺に及ぶ基隆の凡そ  
 三四丈餘に達するに過ぎず基隆を東に距る十二清里の處に八斗と稱  
 するの地あり炭坑の所在地を以て有名あり又金包里冷水窟大礮山北

投等の地の硫黄の産地とす基隆より宜蘭縣の東面を流船よて航過す  
 れば凡そ六時間にして後山番地の花蓮港に達すべし是れ後山番界に  
 入るの最大便路とす花蓮港の水甚だ深くして十餘丈に達し巨艦大船  
 を繫泊するに足る此地の物産は茶葉を以て重なるものとし石炭之に  
 亞ぎ又靛青樟腦甘蔗の類あり聞くが如くんば臺北府の茶は同治元年  
 (千八百六十二年)此地の人民始めて種殖の事を傳授せりと云ふ

滬尾港の臺北府を距る日本里程凡そ五里にして淡水河の海に入る處  
 に在り家數凡そ千戸ありて河の東岸に連り背に重疊たる山脈を負ひ  
 前は清鮮ある河流を控へ岸を隔て、凹凸たる山骨を眺め北に向つて  
 渺茫たる外洋を望む河口は廣さ凡そ十七八丁ありて常は三四の漁船  
 と數十の支那船此に碇繫す然れども港内水淺きを以て船舶の皆中央  
 に碇繫し常は三板船を以て揚陸を行ふ此地税關の設けありて船舶の



出入する毎に直ち官吏を派して之を檢す此等の税關官吏は皆西洋人を用ふ其他三四の洋行及び汽船會社支店の類并に電信分局海防府等の設けありて市街の光景概ね艋舺大稻埕と異なるよし此地の岩山崎巖したる山麓に在るを以て自から清泉の湧出するあきよ非ざれども水量極めて多からず之を汲む者の常は桶を列ね泉口を置き以て其溜るを待てり東岸の山脈海に没する處は一砲臺あり滬尾砲臺と云ふ凡そ臺北府に向ふ大船は此港に至れば復た進む能はざるを以て旅客及び貨物の悉く此に揚陸し更之を小汽船に移載し以て大稻埕に到るを常とす此等の小汽船も亦滿潮の時非ざれば河流通きを以て進むこと能はず河口より溯ること廿餘丁の處に至れば河流通り二三丁に狭まりて其東岸一小砲臺を見る此を過ぐれば河幅又少しく廣まるも總じて此河の最も淺き處に人肩及ばすと云ふ

淡水縣

淡水縣は臺北府の負郭にして北部三縣の一に居り即ち艋舺の地是れあり東の三貂溪を隔て、宜蘭縣と接し南の頭重溪土牛溪を限りて新竹縣と界し西北の海を面す艋舺の淡水河の上流臺北府の郭外に在る舊市として商業頗る繁昌を極め土人として巨商富買たるもの最も多く廣東福建人等も亦多く此に店舗を有す其商ふ所のもの固より諸種の需用品に非ざるのあしと雖も就中最も多き藥材店西洋小間物店にして此二種の商店に他の諸商店に比し幾んど三倍の多きを居れり河瀕に常は支那形の中小諸船數十艘碇泊して此地の物産を地方に輸出し又の外來品を他と轉送分配する等の諸事と執掌す此地水閘の設けありて出入品税を徵収す又此河瀕に竹細工の店舗多く其爲す所の竹を曲げて椅子を作り又竹を編みて諸器具を製する等の類

して此地の近傍に在て、此等の器具を以て諸木器に代用する者多しと云ふ。此地に一佛寺あり、頗る壯觀を極む。

基隆廳

基隆廳の臺北府を距る日本里程凡そ九里、滬尾港を距る海路凡そ二十五里の處に在りて、本島東北の盡頭に位し、東南の二面の巖々たる山を繞らし、北方の一部に遠く開けて、外洋に接す港の廣さ凡そ二十餘丁にして、其灣入すること日本里程凡そ二里に渉り、港の南端に人家凡そ七八百戸あり、是即ち基隆の市街とす。輒近此地に廳を置くに、此地山の峻峭として、秀靈の氣を含み、海に蒼茫として、碧波を漾はし、其勝景極まる。さし殊に外洋より寄せ来る巨濤の澎湃として、港口の兩岸に轟立したる岩石に打ち碎けて、雪霰と爲るの狀實に壯觀ありと謂ふべし。市街の支那一般の風にして、復た艦舳大稻埕の如く、熱鬧繁華を尠らず、隨つて西

洋品を商ふの家も亦少く、唯二三の外國商館と税關あるのみ。港内より常々三四の漁船と數十の支那船此に繫泊す。此港の別は港灣の形を爲さず、唯、河口の形を爲すを以て、東西南の三面より吹来る風、山巒の爲め、之を遮蔽すれども、北風烈しきとき、頗る繫泊に不便ありと云ふ。港の東岸に二座の砲臺を設け、一座は港の中央に位し、一座は陸地の海に入る處にあり、此等の砲臺は曩は清佛交戦の際、一旦佛艦の爲め、擊破せられしも、爾後新に修理を加へ、今尚ほ此に存せり。土人の多く漁業と鑛業とに従事す。此地八斗と稱するに、石炭坑の所在地を以て有名あり。本港を距る日本里程凡そ二里の處に在りて、機械を備へ、鐵道を設けて、盛に之を採掘し、英人某を聘して、其事務を統理せしむ。其石炭は平常重に造船局器械局等に於て之を使用し、又入港の船舶に於て之を購買せんと欲すれば、輒く其需に應じて之を賣渡し、每一噸の價凡そ十二三

弗を通例とす其他近傍處々小炭坑あり支那式を以て之を採掘し居れり

### 宜蘭縣

宜蘭縣ハ舊噶瑪蘭廳の地にして臺北府城を距る一百九十清里の處ニ在り土地極めて肥沃あり此地以前ハ番地ありしが清曆乾隆年間ニ當り福建漳州の人ニ吳沙と稱するものあり此地ニ渡航して土地を開墾し土番を制して自から酋長と爲る其勢ハ最も盛んとして來り服するもの甚だ多し爾後嘉慶十五年即ち千八百十年ニ至り始めて之を清國の版圖ニ入れ此ニ噶瑪蘭廳を置き之を管理せしが明治七年即ち同治十三年我が征番の舉ありしより清廷頗る生番開拓の必要を感じ廳を廢して新ニ宜蘭縣を置けり人口ハ凡そ六千と稱し縣内熟番人多し縣城ハ土壁を繞らし之ニ竹を植ゑ以て稠密ある籓と爲し其外部ニ狹

き壕を繞らし周圍ニ城門四個を設くと雖も別ニ門制なく土人等自由ニ其城門を出入し土壁の内外を通行すと云ふ

縣城の西ハ山を負ひ東南ハ海ニ臨み南ハ蘇澳ニ界し北ハ三貂溪ニ接す三貂溪の遠望坑より草嶺の西北ニ至れば山路崎嶇深林鬱蒼として頗る險あり此嶺を過ぐれば大里蘭ニ出づ此より東の方海面を一望すれば逆浪岸を打て澎湃たるを見るべし

縣城の東北隅より海程三十清里の處ニ龜山と稱する一島あり人民之ニ住し且つ常ニ屯兵を置く草嶺より東ハ山岳峻峭峩々として重疊し東北の海濱ハ巨巖累々として矗立す此ニ一關あり北關と云ふ又蘇澳港ハ人口凡そ六百を有し港内水深くして四五丈餘ニ及び漁船を繫泊するニ便あり

縣城より臺北城ニ至るニは先ツ頭圍より大坪林を経て梹尾街ニ出づ

るを便路とす  
 生番の居住は大抵西南の諸山に在り此地より向き二十ヶ餘所を築柵を設け以て其來襲を備ふ元來蘇澳五里亭以南の地の後山番地に入るの本道たりしが其行路頗る險艱あるを以て爾後海路より直ち花蓮港に至り上陸することゝ爲せり

縣内海口の重なるものは三貂溪草嶺脚溪鳥石港溪獨木溪馬賽溪大東溪漢溪等として皆源を山中に發し流れて海に入る

◎道路

本島道路は各方に通ずと雖も特に淡水港より基隆を経て臺北府に至るもの基隆より宜蘭縣を経て蘇澳に至るもの臺北府より臺南府を経て打狗港に至るもの等を以て最も重なるものとす故に今此等の道路を就き沿道各驛に當る市邑を擧げ其概況を記し以て讀者に示さんと

す其記する所前條各政治區畫の記と往々重複し渉るの嫌なきも非ざれども讀者前條の記と併せ考察すれば大に本島全体の地理情況を明かするに足るものあらん

淡水港(滬尾)より基隆を経て臺北府に至る沿道の概況

滬尾街(一名淡水港) 戶數三百、人口五千

此地の海港として背に山を負ひ前に河を臨み人家櫛を連ね東西凡そ二千米突南北凡そ五百米突として其西方に英國領事館海關等あり市中に海防府電報局あり市街の東方凡そ一千米突の處に米國領事館あり又其西方一千米突の處に砲臺及び水雷局あり本港家屋の構造は生煉瓦及び木造のもの多く人民の一般に農商及び漁業を營み風俗野鄙なれども稍温厚あり淡水河の幅凡そ八百米突ありて水浅く流緩として吃水浅き諸船の

往來又便し此地より臺北府の間より毎日四回往復を爲す小涼船あり  
 地質の一般は粘土と砂石より成り滬尾街より淡水河の右岸に沿ひ  
 臺北府に至るの道路は甚だ不良にして又海岸を經基隆に至るもの  
 殊に險惡ありとす

圭燦山村 戸數十五滬尾より道程五百米突

本村の丘陵の上は在り此より灰磘仔庄に至るの道路の幅凡そ一米  
 突として砂礫中へ間尺大の石あり且つ橋梁粗惡にして歩行は難く  
 又車輛を通ずるを得ず單に馬匹を通行せしむるも十分の修繕を  
 要するものあり道路の兩側は概ね田畝開濶せり  
 本村の北方凡そ千二百米突の處に一の長堡壘あり明治十七年清佛  
 交戦の際之を築きたりと云ふ

灰磘仔庄 戸數五圭燦山村より道程二千五百米突

此地より小机口に至るまで道路は砂土にして歩行頗る困難あり

南勢崗 戸數十五灰磘仔庄より道程二千五百米突

此地記すべきものあり

小雞籠 戸數五南勢崗より道程五千五百米突

此地海岸の小形の支那船多く碇泊せり

正門村 戸數三十小雞籠より道程二十清里

此地記すべきものあり

小机口 戸數五正門村より道程六清里

此地より金包里に至るまでの地質巖石にして道路を稱すべきもの  
 亦く専ら海岸に散點せる尺大の石上を通行せざるべからず

仔哩唎 戸數十小机口より道程四清里

萬里加都 戸數八、仔里略より道程十清里

以上二地又就ての記すべきものあり

金包里 戸數四百、人口千五百、萬里加都より道程五清里

此地の人家檐を連ね商店あり西南に向つて廣濶ある田畑あり又竹木ある村落處々散在し南方は幅凡そ三十米突の河流あり平水の時に徒渉するを得べし

新只頌村 戸數五、金包里より道程八清里半

此地記すべきものあり

馬鎖嶺 戸數三、新只頌村より道程二清里半

馬鎖港 戸數八、馬鎖嶺より道程七清里

馬鎖嶺の直徑凡そ三百米突ありて土地の傾斜極めて急あり其東を馬瑣港とす南方は幅凡そ二十米突の小河あるも徒渉し便ならず是

より以南の山地にして大母嶺と云ふ

大母嶺 戸數二、馬鎖港より道程十清里

此地の山地にして其最も高點の海面より四百米突を抜き竹木之も繁茂し坂路の甚た峻急にして五十八度の角度を爲すものあり此地と基隆の間は幾んど山頂に至るまで開墾し多く茶樹を栽培し且つ石炭坑及び石炭の小貯蓄場あり又路傍の小河の通ずるありて舟楫の便を有す

基隆(一名雞籠) 戸數二千、大母嶺より道程十七清里

此地市街の基隆港の南に在りて人家檐を連ね多くの煉瓦を以て之を造り街路の幅凡そ六米突あり市内の電報局、煤務局、基隆鑛務局、海關等あり市街の東北凡そ二百米突の處に一の砲臺を設け又西南凡そ一千米突の處にも一の砲臺と十餘棟の兵營ありを設く

此地東西南の三面の山岳峻々として相連り傾斜峻急にして竹及び小松の類多く繁茂し低地の概ね之を米田といふ爲せり此又小河三條あるも皆深くして徒渉を許さず基隆の東凡そ二里の地有名なる石炭坑あり此地海岸又總鐵局を官設し以て多額の石炭を貯藏せり蓋し此附近の處として石炭を産せざるの地ありと云ふ

江仔裡 戸數五基隆より道程四清里半

此地南方又小河ありて常又數十艘の小舟之を碇泊す河幅凡そ八米突として是より水路を經臺北府に至るを得べし

七肚 戸數二十江仔裡より道程六清里

此地記すべものあり

六肚 戸數十七肚より道程五清里

五肚 戸數未詳六肚より道程五清里

六肚に至れり前小河の河幅大に擴まりて凡そ五十米突と爲り兩岸の高さ凡そ十米突を爲し流勢頗る緩にして此又數艘の河舟あり又五肚の渡場より十數艘の小舟を繋ぎ渡場の西方凡そ一十米突の高地又長堡壘の跡あり是れ清佛交戦の際築造せしものあらん

水返脚 戸數五百、人口二千五百、五肚より道程三清里

此地の人家櫛を連ね稍富裕の趣あり其西南凡そ一十米突の高地又長堡壘の跡あり頗る要衝の地たり

南江仔 戸數十五、水返脚より道程八清里

錫口街 戸數一千、南江仔より道程六清里

南江仔以西の田畑大に開け殊に錫口街附近に至れり頗る廣漠たる平地と爲り地味最も肥沃あり錫口街の北方凡そ三百米突の處又雞籠河あり數艘の船舶之を繫泊し又街の南方又鐵道を通ず

錫口街より以西の道路全く平坦と爲り道幅も亦擴まりて凡そ二米突より五米突を爲し地質の粘土なり途中別な溝渠の大あるものあるも非ざるも總じて之を架するの橋梁薄弱と失す道路の左右より農家點々として竹林の處々散見す

臺北府 戶數一萬二千、人口三萬、錫口街より遣程十二浬

本府々城の曩も明治十五年(光緒八年)支那古式を以て新築せし所にして凡そ方八千米突の廣さを有する平坦開潤ある水田の間と在り其南北凡そ八百米突にして東西更に稍狭く幾んど四角形を爲し周圍五門開き外坊は通じ内は諸官衙を設く城壁は厚さ凡そ四米突高さ凡そ五米突にして皆石を以て之を造れり西北二門外を除くの外四五千米突の距離内に在て一も森林丘陵等の存するを見ず唯孟宗竹繁茂して藪を爲せる小村落の處々散點するあるの

み南面の城壁と接し人家及び小林あり又數多の小溝渠ありて橋梁も依らざれば通行する能はざる處多し府城の内外と設けたる新道は車馬の通行自在なれども舊道は全く然らず

西門外も市街を爲すものを艫舳街と云ふシンチャム河の右岸と在りて人家凡そ一千五百を有し海岸は支那船多く碇泊す又此門外も市街を爲すものを大道成街と云ふ淡水河の右岸と在りてシンチャムトコナム二河の合流點と位し製茶の最も盛ある地あり河岸は小漁船の假埠頭ありて此等の小漁船はトコナム河を溯り海山口と往復す河岸の地質は泥沙より成り平水の時岸の高さは凡そ二米突として河幅凡そ四百米突あり

基隆より宜蘭縣を経て蘇澳に至る沿道の概況

基隆(一名雞籠)前記より詳かあり



金皎蔣 基隆より道程二十一清里

基隆より此地に至る道幅は凡そ一米突より三米突にして路傍凡そ二百米突より三百米突を隔て、田畑あり又凡そ三清里にして丘陵を上下すること三清里間を渉る此地の西南より一河あり幅七十米突にして兩岸の高さ三米突より四米突に至り深さ一米突あり水底沙磧として架橋あり

双頭嶺 金皎蔣より道程十清里

此地は傾斜凡そ四十度にして上下すること凡そ十清里間を渉り上双溪の五清里前より土地平坦と爲る

嶺下 双頭嶺より道程十清里

此地記すべきものあり

上双溪 戸數一百嶺下より道程十五清里

此地は山間僅か開けたる平坦地にして人家檐を連ね市街の道幅基隆と相同じきも一小貧村にして総て貨物は之を基隆に仰ぐと云ふ驛の西北より南を繞る一河流あり水源を双頭嶺の山間を發し幅凡そ三十米突深さ一米突にして水勢頗る緩あり其西岸の高さは五米突より六米突に至り水底は沙磧より成りて驛の東南端に木橋を架す其幅凡そ三米突にして柱は石を以て之を築く其他上流は一も架橋あり此河又驛の南に於て西方より來る一河流と相合す其河流は幅凡そ二十米突にして深さ二尺を過ぎず水底及び兩岸の形状は峯前河と同一にして又一の木橋を架す

魚行 戸數五十上双溪より道程五清里

此地記すべきものあり

下双溪 戸數七十魚行より道程六清里

此地凡そ一清里を行けば一河又逢ふ其幅凡そ七十米突よして兩岸の高さ二米突より三米突よ至り此又渡舟一艘あり上双溪より此地に至るの路傍は田野開け左又山脈を望み右又一河を見る

遠望坑 戸數六下双溪より道程七清里

此地記すべきものあり

草嶺 戸數三遠望坑より道程四清里

此地海面を抜くこと凡そ四百米突よして峻急あらず

大里蘭 草嶺より道程七清里

草嶺を下りて此地又一の河流あり路傍は竹樹繁茂す此より頭圍に至るまで右の山脈を望み左の海濱又接す海上一小島の孤立するあり之を龜島と云ふ

番茹樓 大里蘭より道程六清里半

此地記すべきものあり

大溪 番茹樓より道程十二清里

此地又一の溪流あり深さ二尺よして徒渉又便あり

要砦 大溪より道程五清里

此地宜蘭縣より兵を派し之に駐屯せしむ

頭圍 戸數一千五百要砦より道程十一清里

此地の北部の一大市街たり地勢平坦よして海に沿ひ人家稠密よして櫓を連ぬと雖も別々繁華あらず土人の専ら商工漁業よ從事す米穀の唯土人の需用を満たすよ過ぎず之よ反して豕雞家鴨魚類野菜等の類の甚だ多きも唯薪よ乏し

此地西方凡そ四千米突より六千米突餘の處よ一帯の山脈あり是れ生番地境とす此より海岸よ至れば沿道砂地よして南の方四圍よ至

るまで平坦あり路傍の田野開け且つ水田中處々温泉を噴出す此地の河流の宜蘭縣の北門外に至りて海入る此河は三十石以上の河船四十艘三間以上の河船五十艘あり

二園 戸數一百五十、頭園より道程四清里半

此地記すべきものあり

三園 戸數一百、二園より道程十五清里

四園 三園より道程十二清里

三園より南の方凡そ三清里にして一の河流あり此は渡舟を備ふ又四園より向きは至れば熟番人の居村を認むべし

宜蘭縣 戸數二千、人口六千、四園より道程三清里半

頭園より此地に至るの間道路平坦にして地質は沙土より成り路傍は開潤したる田圃を眺め西方二千米突を隔て、山脈を望む

此地縣城の平坦の地は之を設け周圍に土壁を築き之を繞りて狭き外壕を穿ち四個の城門を開く城内の縣衙門媽祖宮學院及び文武の諸衙門あり三園四園を發し此地は來れば熟番人多く其風俗を見るは男子は土人の服を着するも女子は肩より腰は沙りて大幅の布を引廻し頭髮を辯で後垂れ額を文するもの多し言語は異なれども概ね土語を以て通すべし

此は縣城の西より來る一の河流あり二派に分れて縣城を繞り其一派は頭園に至りて海入る此河縣城の北門外は在て、兩岸の高さは三米突より四米突あり深さは七八尺ありて水底は沙土より成る此は渡舟二三艘を備へ河舟凡そ百艘を繋げり

此より凡そ一清里にして一の河流あり幅凡そ二百米突にして西岸の高さは二米突より四米突に至り水多くして深さは四米突も餘り流勢

殊こと又また緩ゆるあり此こゝ又また渡わた舟ふね二艘ふたふねあり每艘まいふね二十人にじゅうにんを容ゆるるべし

**加禮遠** 戸數こどすう四百よっぴやう人口じんこう七百しちひゃく宜蘭縣いらんけんより道程だうぢやう三十清里さんじゆしゆり

此地こゝの人家じんか處々じよじよ又また散點さんてんして市街しけいと稱なづする又また足たらず此こゝ又また一の河流いのかりを渡わたる幅はた凡およそ二十米にじゅうまい突つとして一艘いっさうの渡舟わたふねあり又また此こゝより三清里さんじゆしゆりを行なき一の河流いのかりを越こゆ水淺みづあさくして徒涉とど又また便べんあり

**蘇澳** 戸數こどすう二百にひゃく人口じんこう六百ろくひゃく加禮遠かれんより道程だうぢやう十五清里じゆしゆり

宜蘭いらんより此地こゝ又また至いたるの間のま路傍ろぼう廣濶くわくとして田野てんや開ひらけ右みぎ又また遠とほく山脈さんみやくを望のぞみ左ひだり又また近ちかく洋海やうかいを瞰みる既すでにして漸おそく此地こゝ又また近ちかづくや山脈さんみやく亦また流ながれて海岸かいがん又また接つす即すなはち此こゝ又また蘇澳そあくの港みなとあり

此港こゝの本島ほんしやう東北とうほくの海岸かいがん又また位くらする一澳いっおく又またして番人ばんじんと支那人しやなじんとの交易かうぎ場ばたり故ゆゑ又また山頭さんとう又または常じやう又また哨所せうしよを設たけ之これ又また支那兵しやなへいを置おき以もつて生番せいばんの來襲らいしゆ又また備そなへ此こゝ地ち武官ぶくわんの營所えいしよ及および鹽稅關えんぜいかんあり附近ふじんの産物さんぶつの木材もくざい鹿皮しかひ

藤等ふじとう又またして陸路りくろ不ふ便べんなるが爲ためめ皆みな水路すいろ又また依よて輸しゆ出しゆつす

**臺北府** 前記ぜんき又また詳しやうかあり

府城ふじやうを發はつし三清里さんじゆしゆりを行なけばシンチャム河しんぢやうが又また達たつす河幅がは凡およそ三百米さんひゃくまい突つあり又また七清里しちじゆしゆりを行なけば大姑陷河たいこげんが又また達たつす河幅がは凡およそ三百米さんひゃくまい突つとして兩岸りやうがんの高たかさ二米にまい突つより五米ごまい突つ又また至いたり深ふかさ六尺ろくせき又また餘あまる皆みな淡水河たんすいがの上流じやうりゆう又またして二河にが共ども又また三十人さんじゆにんを載のすべき渡舟わたふねを備そなへ

**海山口** 戸數こどすう五千ごせん人口じんこう二萬にまん臺北府たいぺいふより道程だうぢやう十清里じゆしゆり

此地こゝの大姑陷河たいこげんがの左岸さがん又また瀕ひんする一市街いちけい又またして頗すこる富裕ふぎゆの趣おもむあり近ちか傍そば諸村落しよそらくわくより種々しゆしゆの物産ぶつさんを持も持も出し賣買ばいばい頗すこる繁昌はんぢやうせり

**龜崙** 戸數こどすう三十さんじゆ海山口かいざんこうより道程だうぢやう五清里ごじゆしゆり

此地こゝの丘岡脈きうかうみやく凡およそ五六清里ごろくじゆしゆりの間のま又また涉わたり其傾斜けいしやく極ごくめて緩ゆる又またして急きふ

あらず

嶺塘 戸數七十、龜崙より道程五清里

桃仔園 戸數一千五百、人口六千、嶺塘より道程七清里

以上二地は就ての記すべきものあり

下桃仔 戸數五十、桃仔園より道程六清里

此地より凡そ十一清里を行けば一の河流は達す河幅凡そ七千米突

まして兩岸の高さ二米突より三米突に至り此は石橋を架す

坑仔甫 戸數四百、下桃仔より道程十一清里

此地の一大村落にして周圍は石壁を繞らす

中歴 戸數四百、人口二千、坑仔甫より道程二清里

坑仔甫より此に至るの間は路傍田畑多く地質は砂礫にして路幅甚だ狭く二人相並行せんと欲するも能はず村の西端は一の河流あり

頭亭溪 戸數五十、中歴より道程十三清里

此地は一小河あり

楊梅堰 頭亭溪より道程五清里

崩坡 楊梅堰より道程五清里

以上二地は就ては記すべきものあり

大湖口 崩坡より道程十清里

頭亭溪より此地に至るの間は路傍開け田畑多くして北は丘岡脈を眺め南は遠く山脈を望む

新車 大湖口より道程十三清里

此の地は一の河流あり幅五十米突餘にして兩岸の高さ五米突より七米突に至り深さ二尺に餘り此は渡舟一艘を備ふ此より新竹縣に至るの間は道路凸凹にして水田畑地等多し

古車 新車より道程三清里  
蘭紅 古車より道程一清里

以上二地も就ては記すべきものなし

新竹縣 戸數二千、人口一万、蘭紅より道程五清里

此地縣城は平地も之を設け石と煉瓦を以て築きたる城壁を繞らす  
城内もは縣廳其他の官衙あり又北門内もは練兵場及び兵舎あり城  
の内外も通ずる道幅は凡そ二米突より三米突もして處々も敷石を  
設けり城外は一面も田畑開け栽植至らざるなし

香山 戸數二百、新竹縣より道程十清里

此地記すべきものなし

中港 戸數六百、香山より道程十三清里

此地は大なる村落されども別も繁昌ならず

烏仔港 戸數五十、中港より道程二清里

此地も一の入江ありて渡船一艘を備ふ船稍大もして凡そ百人を乗  
すべし

到州頭 烏仔港より道程四清里

此地記すべきものなし

後隴 戸數五百、人口一千五百、到州頭より道程十清里

新竹縣より此地も至るの間は土地稍平坦されども路幅僅か二米  
突許も過ぎずして單も山砲をも通ずるも難し路傍も總て田畑の地  
あり

此驛の南も一の河流あり幅凡そ百五十米突もして兩岸の高さ一米  
突より二米突も至り水の深さ二尺ありて此も一艘の渡舟を備ふ此  
溪流の源を生番地方も發し二千米突もして海も入る其河口を後隴

港と稱す人家有餘戸ありて皆漁業を營む

白沙敦 戸數一千、後隴より道程十五清里

此地の海岸の漁村にして漁舟凡そ五十艘あり

新浦 戸數七十、白沙敦より道程三清里

此地記すべきものなし

通霄 新浦より道程十二清里

此邊の道路皆沙土にして其道幅一米突ふ過ぎす村の南端より一の河  
流あり幅凡そ二百米突ふして兩岸の高さ三米突ふより四米突ふ至り  
深さ一丈餘にして水勢頗る急あり

宛里 通霄より道程八清里

此地より一の河流あり水淺くして徒渉するも易し

房里 宛里より道程二清里

此地の稍、市街の体を爲し諸品を賣買する店あり此邊道路の廣潤さ  
る沙磧地にして之を行くよの處を溪流を徒渉せざるを得ず行路頗  
る艱あり

大甲司 戸數八百、人口四千五百、房里より道程二十清里

此地の平坦ある地位より市街を爲し其周圍を繞らす石壁を以てし  
土人の概ね其壁内に居住し壁外の一面向田畑を以て充たせり然れ  
ども地質沙土を混合するを以て頗る耕穡に適せず

此地は數條の河線あり源を東の方生番界に發し流れて海に入る皆  
水勢急にして徒渉し便ならず此地又大甲司其他の衙門あり衙門前  
に兵營ありて戍兵三百許之を屯せり此地の臺灣藩即ち所謂「アンペ  
ラ」の産地たり

牛馬頭 戸數五百、大甲司より道程五清里

此地の東の丘岡脈を帯び西の廣闊なる田野開け土民稍富裕の觀ありて日用品乏しからず

沙轆 戸數六百、牛馬頭より道程五清里

此地の一大村落あるも別の記事あり

大肚街 沙轆より道程十清里

此地の一小市街にして飲食店等あり此より凡そ七清里にして一の河流あり幅凡そ一公里突として流水常々河床の二分は満たず深さ凡そ五尺にして流勢頗る急あり此は渡船を備ふ

彰化縣 戸數二千、人口一万五千、大肚街より道程十五清里

此地縣城の平坦の地は在り城壁の煉瓦を以て之を築き高さ三間より三間半又渉り厚さ二間にして其頂上は數百個の射眼を穿ち又各處は砲臺を設く其數十二個あり城の四方は櫓を設け其下は東西南

北の四門を開く城内は縣廳及び學院あり南門外は練兵場及び兵舎ありて凡そ三百餘の兵之を屯す城の内外は於る形状及び路幅等の畧、新竹縣と同じ東門外凡そ五百米突の處は丘岡脈あり地質の沙土にして城外の西北は總て田畑あり

住民は概ね農商を以て業とす飲用水は常々井水を用ふ水質純良ありと雖も其量少し此地薪炭木材布等の類少く又別は輸出品と稱すべきものありと雖も特々米穀の産額は富み又竹蓐等の類多し此地より南方の地は諸物を運搬するは常々牛車を用ふ

三槐居 彰化縣より道程十八清里

寶斗仔 三槐居より道程十清里

以上の二地は就ては記すべきものあり

六斗門 戸數五千、人口二万、寶斗仔より道程十三清里



此地は平坦の地位に在りて北より南に流る、大河の南端に市街を爲し人口稠密あり此地赤糖及び落花生油を製造し其額頗る多きを以て常々水利に藉り之を刺桐巻に輸出す

刺桐巻 道程未詳

此地も亦平坦の地位に市街を爲し別盛あるに非ずと雖も客舎四五戸を有す此邊道路一般に平坦あり

他里務 戸數五百、人口二千五百、刺桐巻より道程十二清里

此地は錯雑ある一市街あり

大埔林 戸數五百他里務より道程八清里

此地も亦一市街を爲せり

三壘溪 戸數四百、人口一千五百、大埔林より道程十清里

此地も亦一小市街を爲せり此邊の道幅は二米突より三四米突とし

て路傍に沼澤或は叢原あり

嘉義縣 戸數二千五百、人口一万五千、三壘溪より道程十五清里

此地縣城は平坦の地位に之を設け城壁は石を以て造り頂上は煉瓦を用ひ數百個の銃眼を穿ち周圍に三個の砲臺を置く其城壁の高さは六米突より七米突にして厚さ四米突を爲し東西南北に四個の城門を設け之を二重と爲し其内部の門上には皆櫓を附し其下を通路と爲す北部の各地より此地を通過する者は北門より入り城内を貫通して西門へ出づるを本街道とす其他城壁外は幅凡そ三米突より十米突に至る外壕を繞らし城の内外に於る形状及び道路の畧、新竹縣と同じ縣廳及び各衙門の皆城内に在り此地輸出入品少く客舎の如き唯五六あるのみ城外西北に廣漠たる田畑を擴め人民耕作を勉め就中多く甘蔗を栽培し收穫年々豊かありと云ふ

水堀頭 戸數五百、人口二千、嘉義縣より道程十二清里

下茄苳仔 戸數一百二十、水堀頭より道程十五清里

大茄苳仔 下茄苳仔より道程五清里

以上三地は就ての記すべきものなし

急水 大茄苳仔より道程十清里

此地は一の河流あり幅凡そ百米突として兩岸の高さ一米突より四米突に至り深さ一米突として此は短小なる渡舟を備ふ

鳳港尾 戸數二百、人口一千、急水より道程十八清里

此地は平坦の地位に在る一大村落ありとも土地稍貧あり

瑞仔來 鳳港尾より道程十三清里

此地は一の河流あり幅凡そ百米突深さ一米突として此は筏橋を架す此河を以て嘉義縣と臺南府との境界とす

看西 戸數六十、瑞仔來より道程十清里

此地は一小市街ありとも稍富裕の趣あり

船仔頭 看西より道程八清里

此城は看西との中間は一の河流あり石橋を架す

臺南府 戸數一万二千、人口十三萬、船仔頭より道程八清里

本府を城の海岸より東の方凡そ八清里を隔つる平坦の地位に之を設け城壁の石を以て造り頂上は煉瓦を用ひ射眼を穿ち周圍は四個の砲臺を置く城門の之を八ヶ所設け其八門の上は皆櫓を附す此等の城門は總じて二重と爲す雖も唯り大東、小西の二門の之を單門と爲し其傍らに壁を築き之は通用門を設く北部の地方より本府を通過する者ハ大小北門より入り小南門を出て南して鳳山縣に向ふを本街道とす又西大門を出て行くこと八清里にして海岸より出で

安平港に至るの路あり他の門外より各村落に達するの路あり而して城の内外に通ずる道幅は凡そ三米突より六七米突の廣さを有す城内より府廳道臺衙門鎮臺通商局電信局及び米倉等あり就中電信局の大北門内より在りて此より電線二條を架し小南門外より於て之を分線し其の安平港に通ぜしめ一は打狗港に通ぜしむ大北門外より練兵場あり長さ二百米突として此は演武亭射的場等の設けあり兵營の城の内外より在りて日清交戦前本府の守城兵の五營たりしも其中安平港打狗港より分遣せしを以て實際本城に駐まるの兵の概ね千名より過ぎざりき城内より大なる客舎二戸あり殊より大西門外の人家稠密にして頗る雜沓を極むと雖も北邊より空地少からず又城外の一面より田畑を以て廣漠たり此地の物産は茶葉赤糖果實等あり

二層行 戸數五十、臺南府より道程十二清里

此地の路傍に沿へる一村あり此より一の河流あり幅百米突として兩岸の高さ三米突より五米突に至り深さ一米突ありて此より小なる渡舟を備ふ

大湖街 戸數二千二層行より道程十清里

此地は大村落として人家數里の間は散點す

半路竹 戸數五百、大湖街より道程四清里

此地記すべきものあり

阿公店 戸數三百、半路竹より道程十三清里

此地は小市街として人家錯雜せり

橋仔頭 阿公店より道程十清里

此地記すべきものあり

南仔坑 戸數三千、人口一万、橋仔頭より道程十清里

此地は市街稍繁昌の趣ありて日需品も欠かず

加禮頭 南仔坑より道程八清里

此地より路を西南に取り打狗に向ふ一道路あり此邊の道路は粘土沙質にして幅凡そ一米突あり歩行も困難ならず田畑は米穀少くして甘蔗多し

鳳山縣 戸數一千、人口五千、加禮頭より道程十二清里

此地縣城は平坦の地位を設け城壁は泥土を以て之を築き高さ二米突より三米突に至り厚さ一米突にして五個の城門を設く是れを東門西門南門北門及び小東門と稱す北部の各地より此地を通過する者は北門入り小東門西門等を通過して打狗に向ふを本街道とす城内は縣廳學院通商衙門あり又西門外は練兵場ありて日清交戦前には常備兵凡そ二百許此地に駐屯せりと云ふ

連嘉頭 戸數四百、鳳山縣より道程十清里

此地は海岸に在る一村、落として此より打狗へ便船あり

打狗港 戸數四十、人口一百、連嘉頭より水路十四清里

本港は一名旗後と稱し臺南府の南鳳山縣の西に在り土地凹凸にして灣入し一の開港場を爲せり灣内は小形の漁船帆船自由繁泊し得ると雖も大船巨舶は水深くして之に入るを得ず本港は二三の洋行あり又電信局海關英佛領事館等ありて西洋人多く之に居住し土人の却て稀少あり灣口の左右に連なる岸上の岡頂は二個の砲臺あり築造頗る堅固にして此は砲兵凡そ五百名を屯すと云へり本港輸出品は砂糖茶菓實等を以て重なるものとす  
本港より安平港へ往復する小漁船あり隔日を以て一回の交通を爲せり

安平港 戸數三百、人口一千五百、打狗港より八清里

本港の海岸の平地を之を設け開港場として臺南府の物産を揚卸するの埠頭たり本港より洋行二戸、電信局、海關等ありと雖も良港ならず南北の風烈しきときハ船舶を繫泊すること難し

此地砲臺兵營の設けありて日清交戦前の駐兵二營之を屯せり又二個の丘岡ありて往昔和蘭人此を築城せし跡ありと雖も現今唯丘岡のみを存せり其傍ら又税關長の居宅あり電信の常々艦船の出入を臺南府城内の諸衙門に通ずるが爲め之を設くと云ふ

◎沿革及び現時の事態

臺灣の沿革を繙ぬる又義第十七世紀の始め西洋人一時東洋を跋扈せしむ當り西班牙人の非律賓群島を占領し葡萄牙人の清國澳門を殖民地を開き共々東洋の貿易を壟斷せんとするや和蘭人大之を刺激

せられ自から亦奮て競争場裏を立たんと欲し之れが目的を達せんが爲め先づ澎湖島を占領し更に進で臺灣本島に移り此は三十有五年の間貿易を營み勢威頗る盛なりしに千六百六十二年我が國人として當時雄名を支那南部を轟したる彼の鄭成功の爲め驅逐せられ本島中復た和蘭人の跡を留めざるに至る後康熙年間を迨び本島終に清國の版圖に属せり

是より後本島の制度文物は皆支那より輸入し支那人亦多く之に移住して農商諸般の業を營み復た争奪の事ありし明治七年(千八百七十四年)我が征番の役あり次で明治十七年(千八百八十四年)より同十八年(千八百九十一年)清佛交戦の事ありて同島一時佛國艦隊の爲め封鎖せられ其一部砲撃を受けたり爾來清國政府は同島の漸く多事を見大に悟る所あり明治十八年(光緒十一年)を以て從來同島の福建省に隸属したる

を改め之を獨立の一省と爲し劉銘傳を巡撫と任じ之が建策を納れ以て府縣を廢置し鐵道を新設し其他電信郵便等社會百般の必要事業を起せり是又於て劉銘傳以爲らく同島は内地と隔絶し一朝事あるも臨み緩急相應すること甚だ難し若かず豫め地方の財政を整理し金穀を平常に貯へ以て機又臨み變又應するの策又出でんはと乃ち明治十年(光緒十二年)秋を以て臺灣全島の檢地又着手し同二十二年(光緒十五年)十二月に至て全く其功を竣れり其結果として地租の総額六十七万四千四百六十八兩の多きと達し之を従前の收入総額十八萬三千三百六十六兩と此すれば實又四十九万二千二百兩の増加を見るに至れり然るも臺灣現時の事情を察するも人民甚だ其治績を喜はず所在講々として不平の聲を斷たざるものゝ如とし今或る一紳士が去る明治廿四年を以て同島を巡歴し各處を視察せる一篇の手記を得之を閱する

又頗る同島現時の民情を詳かよするも足るものあり因て左に其要部を摘載すべし

(前略)現今臺南の事情は人心頗る不平を抱けり福建廣東兩省より會て移住せし者は勿論後山(臺灣島を分ちて前山後山と云す前山は現又支那政治の及ぶ處後山は生番諸族の割據する處あり)の生番に至るまで頗る物議多し殆んど清國官吏の處置又甘ぜず動もすれば一舉して叛謀を企つるの内心を抱くこと實又掩ふべからざるの事實と云れり近來又至て此の如き民情を惹起したるは全く臺灣島政府の苛税より生じたるものあり劉銘傳が渡臺せし以來専ら西洋文明の事物を輸入するの一事に傾き該島民情の向背を察せず急激果斷土地の改良を施行し隨て政費の金額も頗る巨多にして其結果たる素より之を地租雜税又取らざるを得ざることゝ云れり此等の原因

よりして近來殊に一般人民の感情を害ふに至りしこと旅行中實際探知せし所あり元來臺灣島の地租の往昔より戸部の制定に係るの徴収法ありて従前福建省の所轄に属せし時の甚だ僅少の収額にて殆んで其名あり其實あきの形ありしが已之を獨立の一省と爲せしより意外の重税を課し且つ各地到る處厘金局の設けあらざるはあく隨て其徴収法も亦甚だ苛酷とあり其局前を通行するもの仮令綿布一疋と雖も皆課税を免れざるに至る既先般臺南南部鳳山縣の内地に於て或る農家より收税吏來り地租の徴収をせしむ其時銀兩の貯へ無きを以て一時米納に代へられんことを請願せしも收税吏の之を肯せず是非銀納をあらざれぬと言ひ張れり然れども農家のこと故即時に銀兩の調達の出來ざるを以て暫時猶豫のこゝを哀願せしむ收税吏の益苛酷に迫り強壓暴制を逞うし終

其農民の婦女を掠奪し去りたるより近隣の農民一同の犬は此事を憤り地方官の不法を責め殆んど叛謀の企を爲さんとせしことありしと云ふ現今臺南の各地に於ては人民舉て地方官吏の命令に抗拒する勢ひあり故に恒春縣地方(即ち臺灣極南の地方)にては近來租税徴収の爲め特は兵勇を使用し強て督促せしむるも人民の却て益之を激昂し惡口雜言至らざるあしと此等の謀叛心を一般人民も惹起さしめたる原動力とも謂へるもの元と生活征討として募集せられたる湖南湖北等の兵勇一朝解隊に遇ひ殆んど糊口の途に究迫したるもの臺灣地方幾千と云へる員數あるも此等の徒彼の客家(一は哈喀)と唱ふる廣東及び汕頭地方より數十年前移住したる一種族の人民と結合し勉めて各部の生番を誘導し専ら行政官吏に抗抵せしむるもの其重なる原因ありと云ふ

現今の事情は據て之を見れば臺灣島の人民(就中臺南各地)は殆んど清國官吏の苛政を怨惡し却て他國人を慕ふの心情あるは明白あり曩き臺灣在留の西班牙宣教師(西班牙宣教師は都て支那の服裝を用ひ土語を通じ専ら福建等の移民を教化するに任ず)は南部の生番界に接近する地方を旅行せしむ恰も土民等地方官に向て暴擧及ばんとするの際ありしかば土民等同教師を以て支那人と誤想し之を拘留して何等の用事を以て此地を通行するやと嚴酷の詰問を爲したる後始めて外國の教師たることを知り彼等一同は外國人あらば決して暴害を加ふべからず勉めて厚情を通ぜよと大聲に叫びたることありしと其宣教師の同僚より直話に聞けり

打狗の東南二十英里の處に萬金山と云ふ地方あり此地は生番地と支那政治の及ぶ地方と交界の地にして即ち客家種族の群居する處

あり最も慄悍無賴の徒多く曾て鳳山縣令此處に至り納税の説諭を爲したるも同縣令の乗りたる轎子を破り石塊を抛ち非常の乱暴を行ひ縣令は却て一錢の税金をも徴收すること能はざりしと云へり此の如き情實あるを以て旅行中到る處の地方人民は接すれば商賈農民の別なく清國官吏の苛税を鳴らし劉巡撫が渡臺以前即ち福建管轄の時は却て我等の爲め繁榮の時ありしと言ひ其心情殆んど同一轍に出づるものゝ如し

打狗在留の英國醫師マイエルス氏は既ち臺灣に在ること殆んど二十年の久きと追ひ隨て該地の事情は能く通曉せる人あるが同氏の説話に據るに曰く近來の如く内部土民の心情外國人を慕ひ暗に外國の保護干渉を冀望するの形状あるを實見したることあり思ふに今若し一の外國あり臺灣の番地を占有し細かき土人の意向を察し



之を施すは寛大の政治を以てし支那政府の苛政を免れしめんと試みんは彼等は忽ち双手を開きて歡情を通ずへし夫れ如何にして現今支那官吏が此の如く一般人民の甘心を失ひたるかど云ふ元來臺灣の南部は勿論北部に於るも米穀を始め雜貨品に至るまで別は厘税を徴收せらるゝこと亦く地租の制度こそはありたれ其實は甚だ僅少のものにして或は地方に於ては殆んど皆無とも謂ふべかりし一旦劉銘傳が渡臺してより以來内地の開拓を圖るが爲め頗る苛酷の税を課し米穀は勿論臺灣人民の脊骨とも謂ふべき砂糖を始め其他實は瑣末の品に至るまで一々厘税を課し加之各地の清國官吏は彼の候補員と稱へ諸方より劉の衙門に伺候し就官を乞ふ者の成果として此等の者其數實は幾百の多きを知らざるも一朝幸ひ其職任を得れば内地の貧富如何は之を度外に擱き只専ら自己の

囊裏を充さんこと汲々として到る處は人民の膏血を絞るは其常套として實は是れ清國官吏の特性とする所あれば追々臺灣全部も官吏の員數を増すも隨ひ益々人民は不平の聲を増し客家種族の如きは日々生番界も出沒して此等の番民と心情を一にして痛く地方官吏も抗敵すること今後一層の度を進むるからん左すれば若し此勢ひに乗じて他國より番界を占領し勉めて番民の信用を得て漸次は徳政を布かば臺灣全島を畧取するは蓋し容易の事あらんと此事固より同氏が一時の閑話も過ぎざれども此の如き話頭は臺南各地の外人と接する毎も斷えず耳朶も觸るゝを以て之を見れば亦以て該地方民心の如何を推察するも足るべし

外國宣教師は臺南府より該島の中央ある彰化縣地方までの各部には英國「プレスビテリアン」宗の者多く又彰化縣より臺北府宜蘭縣の

東岸に至るまでは「カナデアンミッション」宗の所轄として二宗を合せ現今凡そ七十ヶ所の教堂を設置す此英國「プレスビトアン」宗宣教師の一人たるカムヘル氏は現臺南府城内に居住し臺南地方に在ること十九ヶ年として臺灣各地の遊歴に富む人あるが同氏の説く所を據れば近來和蘭國政府は再び臺灣地方に宣教師の派出を誘導する計畫ありて上海に在留同國領事は近日臺灣に來り此地の事情を視察すとの説あり其事固より同國の政界上を關するもの非ざるも同國の再び臺灣に着目するは近來の一珍事ありと云へり

(中略)樟腦は重く該島の中央部に於る彰化縣に接する生番界より出づるもの多きことあるが劉巡撫は目下百斤に就き洋銀十八弗の厘金を課し此收入金を以て樟腦の收集に役する兵丁の給料に充つと云ふ明治二十三年一月日耳曼公使は臺灣安平港に領事館を置くの

計畫を爲し家屋を借入れ同年五月副領事を派遣したり

劉銘傳は近頃同島に家屋税を課し原價百圓に就き一ヶ年六圓宛を徵收するの法を設けたれども人民の不服甚しきが爲め未だ實施する能はずと云ふ

臺南英國領事の説は曰く劉銘傳の嘗て北京政府に向て若し臺灣全島の政治をして一身に委任せらるゝあらば凡そ十年を期し十分は此地の開拓を爲し生番民を歸化せしめ以て真正に開明ある土地と爲すべしと保証したることありしや又聞き及びたり然るも劉が就任以來の政治上に於る今日南部一体の現状を見て更は全島の情況に觀察を下すとき却て十年前よりも諸事錯雜を來たし内地の生番地の十年前より比し未だ一として開拓の功を擧げしことを聞かずと又曰く劉が澎湖島其他の防禦の爲め買入れたる大砲軍器の類

の殆んど實用に適用するもの尠し又劉の豫ねて南部巡閱の企あるも今日の民情を以て察すれば巡閱を爲すこと甚だ難かるべし實に人民の劉若し來らば槍を揮ひ石を投じ争ひ起つて彼を害すべしとまで公言せり劉銘傳の到底臺灣島を退去するからん而して其後任の貴州巡撫潘霽ありとの實は是れ淡水地方内外人一般の稱道する所あるが該地方英領事の親しく余を告ぐる所は據れば劉の豫ねて病氣の故を以て是より前き數度歸省養病の事を北京に歎願せしも其許可を得ず遷延今日及びしが爾來劉の決心益々動かすべからざるものあり尙は當路者に向て賄賂を納れ種々請願する所ありしと終に養病歸省の事を許可せられたる旨劉の許へ密報ありしと云ふ此度果して養病歸省ある後劉の再び臺灣に來ることあかるべしと又曰く劉の元來故醇親王と頗る親密ありしが同親王の遠逝に劉の

一身を取り甚だ不幸にして此一事の大小劉が歸省の決心をして強からしめたるものありと

劉銘傳の曾て三ヶ年間福建其他の諸税中より臺灣事業の補助金として毎年二百萬兩宛を使用することを政府より許可せられたりしが本年の春季を以て其期満ち補助金の支出終るを以て是より向きの事業上は於ての甚だ困難あるべしと云ふ

(中略)劉銘傳が曾て臺北に於て洋學館を設けたることの豫ねて聞及びし所あるが今實地に就て之を見るに同學館の臺北府城内に之を設け一昨年より英國教師一名を聘し尙ほ其他に外國に留學したる支那人二名と支那學教師三四名を置き現今熱心な生徒の教育に注意せり生徒の數は最初六七十名の積りて學館の構造等も着手せしも近來追々生徒の入學を乞ふ者多く是までの規模にては不完全

あるより目下學堂の構造は着手するの企あり英教師の直話と據る  
 劉の意の同校卒業生を以て是より後該地電信鐵道等の掛員と採  
 用する見込ありとのことあり學科の未だ整頓畫一するに至らず當  
 分の處の先づ普通中學初等科の程度を以て教授すと云へり  
 右洋學館及び鐵道等の目下臺北地方の事業は就き劉銘傳が着手せ  
 る重要な事項として其他軍器局を設け彈丸を製し諸器械を作り又  
 臺北府城の電燈を架し人力車を輸入し人民を勸むるは養蠶の利  
 益を以てし商務局を置き汽船二艘を購求して支那の南北は航行せ  
 しむるを凡そ臺島の進歩を誘導せしむるの餘力を惜まずして  
 其方法を盡せり余が實際を目撃する所を以てするは臺北の今日其  
 外形の進歩驚くべき模様されども各般の事業を一時は成就せしめ  
 んとい到底十分の財本と之を活用し得るは足るべき人物を用ふる

又あらずんば能はず劉の才幹周到あるも劉が採用せる人物にて  
 到底事業の發達を期すること難かるべし彼の基隆石炭山の如きの  
 相當の管理法とは是まで費せし金員とを以てせば該炭山の豊饒ある  
 決して利潤なきものなりあらざるべきも前商務局總辦張鴻卿の如  
 きは李鴻章の親戚たる縁故を以て劉銘傳は取入り該炭坑の専任と  
 ありしものにて徒らに數十万金の財本を費し炭坑の發達の毫も現  
 ないれざるのみならず却て従前よりも採掘額の退歩を來せし等其  
 として其事業一として満足の成績を呈したるものなし然れども劉  
 が渡臺以來既に六七ヶ年間も着手したる事業の許多として其費用  
 を要するの類も亦少からざるべく其財源の一は地方の負擔を歸せ  
 ざるを得ざるを以て乃ち地租を始め諸雜税の徴收とありしも臺灣  
 島民の資力と對しては少しく負擔堪へざるの勢あるを以て自然

人民の怨惡を惹くに至りし亦已むべからざるものと爲すべし尤も余か巡遊中探見せる所は據れり其怨望も重し劉が居城を隔りたる彼の臺南地方は盛なれども臺北地方に至りては劉が威力の直下を支配せらるゝと人民等其事業を眼前に見て親しく其利便を知悉するるとは因り陽に不平を鳴らすの情況に之れあるを果して劉が病を以て臺灣を退き其後任者として世人が指名する彼の貴州巡撫潘爵或は前任福建布政使邵友濂兩名の中より劉の後任を冀ぐものとせば是より該島の將來に如何あるべき乎は是れ最も考究を要すべきこととして今直ち余の明言し能はざる所あり抑も劉が臺灣に任ぜられたるは先年清佛葛藤の際に當り該島に於る功勞に因るものとして即ち其報酬の一として全島を委任せられ他の督撫より一層の自由政治を許されたれば劉も亦自から任して奮起したる次第

あるも一朝他人にて其後を承け世間の毀譽褒貶を關せず直進して能く劉が着手せし偉大の事業を繼續し得るや否やは亦斷言し能はざる所あり思ふも今日清朝の臺灣に注意するは甚だ冷淡なれども是まで巨萬の資を費したる後されば之を其儘中止するも至らざるべし然れども一体清政府が是まで許多の補助金を出したるは全く劉が熱心あるの故に因るものなれば若し劉が同島を退くことあらんも必ずや是より自然と該島に注意するの念慮も薄弱であるに從前の關係より推察せらるゝこととして果して然るときは今後該島の事業上より或は外國より資財を注入し以て事業の繼續を爲さんとすること難きも非ざるべしと推察せらるゝものあり東洋の政界上よりして之を見るも該島の將來に於ては我が國人の今より最も注意すべきことあり余此回該島の内部を巡遊して物産の淵

源其他の事を視察せしむ實は其富饒あるに驚くべき程にて金銀銅鐵の類を始め其他人民生活上必要の物品の一として具はらざるのあく眞は天與の寶藏とも稱すべき土地あり今十分の注意を以て内地の開拓に力を盡さば東洋の天地を此島上に造ること難き非ず然れども此島として支那姑息の政下は支配せらるゝの間は此天與の寶物は永く地中埋没し決して世の公益とあらざるべし實は愛惜するに餘あり余今日臺灣府城安平等の各處を巡視し會て和蘭人の築造せし砲臺の古跡を一見するに今を距る二百五十餘年前我が國人が此島を割據し大に威力を南支那に振ひ該島の土民等其名聲を慕ひし往事を追憶し願みて今日我が通商貿易の東洋に振はざるを思へば轉た慨嘆は勝へざるものあり大息之を久うせり

◎風俗及び言語

本島土人の風俗を觀察するに往者支那本部より移住したる者は概ね農業を營み男子は栽培耕種を精み女子は刺繡裁縫を巧みして其風俗古を尙び今に至るも往々尙は朱明の餘風を存せり輓近の移住者は重は福建省の南部又は廣東省汕頭等より來る者多きが故に其風俗亦稍鄙野にして男子は辮髮し女子は縮足し其他衣服飲食居住等概ね其本土と異なるものあり唯下等の人民は大抵徒跣として奔走し其頭は剃髮したる部分に黒き木綿を纏ひ以て天日の炎威を防ぐもの、如く婦女は老年に至るも尙は其白髮を紅ある牡丹大の花釵を挿せり此等の下等人民は大抵或る佛を信仰し頸邊に觀世音菩薩の五字と自己の姓名とを記したる小牌を懸くこと猶ほ耶穌信徒が耶穌の畫像を描きたる小牌又は十字形の小架を頸邊に纏ふに異ならず家屋内は家具食器の外他は玩具等を陳列せるを見ず一般に鴉片を喫し菸を嗜

むは支那内地の人民は異ならず  
 家屋の構造は太約支那内地は均しと雖も臺北地方は於ては何れの市  
 街に到り見るも家屋は概ね庇を一行し凡そ一間餘前を張り出し以て  
 其下を通行し得るが如くせり蓋し是れ酷暑の際其庇下を通行して天  
 日の炎威を避くるの便に供するものあらん歟家屋の材料は支那内地  
 と均しく石又は煉瓦を用ふるもあれども此地の土は頗る粘質に富め  
 るを以て之を長さ一尺幅七寸厚さ三四寸を打固め火を焼くことを須  
 ひず直ち天日露して之を乾かし以て煉瓦に代用するを常とす而  
 して之を疊むの後は其外部を瓦を張り以て外面を蔽ひ更に粘土を以  
 て其縫目を塗ること猶ほ我が東京舊大名屋敷の長屋に於るがごとく  
 す更に丁寧あるものは其上を白堊を以て塗るあり又外部の直ち人  
 目觸れ易き處は煉瓦を疊み用ふるもあり屋根は支那内地と均し

幅凡そ二寸許の長板を四寸許宛の間隔を措きて並行し釘着し其上  
 瓦を二重に敷並べ別れ我邦の如き天井を用ひず故に臥して屋瓦を  
 見るべし然れども又丁寧あるものは更な屋根裏を粘土を以て塗りた  
 るあり要するも此等の家屋は俗に所謂土細工に成るを以て一朝降雨  
 あるときは濕氣壁間を充ち人身の健康に頗る害あり  
 臺南地方の婦人は海邊に接する地に在ては概ね魚網を編み麻糸を紡  
 くを以て常職とす然れども稍内地に入り山隈に近づくの地方に在て  
 は男女共に農業に従事すること猶ほ福建地方に於るがごとし臺南各  
 地の支那人は男女共に大抵檳榔子を食するの風習を存し市井間は勿  
 論何様僻隅の地に至るも路傍の茶店等苟も雇役人等の休息すべき場  
 處は常に檳榔子を置きて之を賣り其店主たる土民等人は告げて言  
 ふ檳榔子を咬めば齒を強め口中の悪臭を去ると斯くの如くにして南

部人民の口中は恰も日本婦人の鐵漿を着けたると同一の觀を呈せり  
 本島の各部に於る下等人民の食物は重く茹條と魚類とに在り故に到  
 る處に養魚池を設け以て魚類の繁殖を圖れり  
 臺北内地の土人は常に生芋を土鍋に入れ我が田舎の地を於て往々見  
 るが如く之を水煮しして食し又は芋粥を炊ぎ以て食するあり菜は  
 常に鹽漬の野菜を用ふ飲料は中等以上の者は紹興酒等の如く米にて  
 醸したる普通の支那酒を用ふれども内地に入るときは中等以下の人  
 民は重く芋焼酎を用ふ其製法は概ね我邦と同一にして田舎の地より  
 之れなき處あり  
 臺南臺北の言語は共に首として厦門漳州泉州等の如き福建省南部の  
 土音に廣東省汕頭等の土音を混和したるものなる故に厦門の土語  
 と通ずれば開港場附近の地方に在ては毫も不自由を感ずることあり

嘗て厦門に在る英國宣教師ドクトルマガオニ氏の言ふ所を聞くに厦  
 門の土語は廣く福建省南部の各地と臺灣南北の兩部に通じ今日厦門  
 語を用ふるの人口實は七百萬の多きに至ると云へり左れば我が國人  
 として臺灣新領地に至り貿易を營み事業を起さんと欲するもの最  
 先は厦門の土語に通ずること最も必要なるべし  
 今此等の人士の爲め最も淺近なる臺灣の土語無慮一千餘言を撰み左  
 り掲記し以て土語の速成入門の一助と供せんとす若し或は土語を學  
 ぶの暇あらずして匆忙彼の地に至るの人士に土人と接するに際し此  
 記を就て必要の言語を拾ひ蓋し決して燕喃蛙鳴の類に非ざるべし

日用臺灣土語

一	チ	二	ヤ	三	ン	三	サン	十	ツ	ア	百	ベ	千	チ	エ	ン	ヌ
四	シ	一	五	グ	オ	六	ラ	萬	ワン	億	ギ	一	半	ポ	ア	ン	
七	チ	ヤ	ハ	ボ	イ	九	カウ	零	リ	ヤ	一	ン					



第一デーナ 第二デーシー  
 第三デーサン 二十五 ヲツアゴ  
 七ヶ月 チヤコウゴエ  
 五年 シオニン 四人 シーラン  
 四個人 シーコーラン  
 一文 ナモーン 一錢 ツアモーン  
 十錢 ナカグーン 一圓 ナコー  
 子 ツー 丑 デウ 寅 イーン  
 卯 マウ 辰 シーン 巳 チー  
 午 ゴト 未 ミー 申 シン  
 酉 チウ 戌 スー 亥 ハイ  
 甲 カー 乙 イツ 丙 ビヤン  
 丁 チイン 戊 モー 巳 キー  
 庚 ケエン 辛 シン 壬 シン  
 癸 クーノ  
 天 デエンヌ 地 ドーイ

日 シッターウ 月 ゴツホー  
 星 ショーン 空氣 アキー  
 熱 グア 雲 ワウーレツアーイ  
 霧 ハー 雨 ウー  
 露 ローツイ 霜 シン  
 雷 ルイ 火 ホエイ  
 水 ツイ 風土 ホント  
 山 サン 河 ホー  
 海 ハーイ 海岸 ハイキンチ  
 流 リユツイ 浪 ポーロン  
 潮 ハイラヤウ 泉 ツオアヌ  
 池 デーツ 林 リム  
 花園 ホイヒース 畑 ツナヨンカーデー  
 田 ツイデヤン 牧場 モーシヨ  
 東 タン 西 サイ 南 ナンヌ  
 北 バイ 春 チユン 夏 ハー

秋 チユウ 冬 トン  
 一週間 チコリーパーイ  
 一時間 チデームヂヨ  
 一分 ナン 朝 ツアオ  
 正午 ゴーワー 晩 ミー  
 今日 キナンチツ 明日 マンチツ  
 昨日 ツアフーン 今晩 キンミー  
 前日 チヤンヂツ 人情 ランチヨ  
 風俗 ホーントツ 屬地 チーヨドーイ  
 境界 ガーイ 道 ロー  
 都府 トーフィー 城内 シーヤンリー  
 州 チューウ 縣 コワヌ  
 市街 チーコイ 村落 ツオング  
 橋 キーヨ 舟 ツーン  
 官衙 ゲーモン  
 電報局 デヤヌポーラキイク

郵便局 シンキーク 監獄 ローギヤツク  
 學校 ツーペーン 醫院 イーイワヌ  
 會社 ゴーシ 店 ポーナ  
 銀行 グンホーウ 倉庫 ツウンコツ  
 社 寺 ミヨウ 民家 ミンバーン  
 飲食店 ミチヤデーム 小屋 シウバーン  
 住宅 デーシヤ。チウガ  
 部屋 デーラー 庖厨 ツーウバーン  
 門 モーシ 二階 ラウ  
 屋根 パアンデーム 天井 デームワウヌ  
 窓 ターシ 棧敷 ラウ  
 衣服 イーホーウ 上衣 シナイ  
 下衣 パウチ 袴 コー  
 長衣 トーシヤン 足袋 フポーツ  
 手袋 チーウツ 帽 ポーウ  
 靴 オーイ 手拭 チーウタン

汗拭アームクン 視衣アームニヤヌ  
 紐 ニワパン 隠シカカ  
 袖 チユン 領 アムクンニヤン  
 雨衣ウイ 簾 ウホー  
 毛布チヨガ 金巾イユンホー  
 綿布ホー 麻布マホー  
 錦 キーム 線(糸)スーワン  
 絹布チイウドワヌ 羅紗チー  
 縞子ドワシヌ  
 天鵝絨ホーイチヂヨン  
 縮 チヤウ  
 家具ガホー 棹 ドチー  
 椅子イー 櫛 スオイ  
 鏡 キヤーン 刷毛オイメン  
 皮箱バグーシオンム  
 手ぶらしイモーチコーン

煙草入フリンアバ 巾着パアアバ  
 針 ツアム 提灯デーイン  
 蠟燭メラツ 石油ホーランユ  
 薪 パーツアイ  
 摺附木フワンナホエイ  
 炭 ホニイトアン 洋燈イヨムデーム  
 時計チヨーン  
 磁石チーナンヌツアム  
 秤 ビーン  
 寒暑計ハンスドウビヤウ  
 尺度チーヨ  
 眼鏡チエングキヤーン  
 傘 ウスワン 杖 エヘンヌ  
 鍵 ツワン 火箸ホードー  
 杓子ツイチーム 茶碗デーワース  
 布巾ホーリン 皿 ビヤーツ

盆 ホアーン 井 デーツ  
 茶瓶デーコワーヌ 壺 コワーヌ  
 甕 ツアウ 刀 トラ  
 壺 シワヌ 釜 ホアードヤン  
 鍋 デーデヤン 蓋 デヤンシワ  
 箸 ツーン 桶 ツアードヤン  
 籠 パーライン 面盆ミーンダーン  
 火爐ホエイロー 箱 シーム  
 鎌 ウウターウ 斧 プーア  
 釘 ターヌ 槌 ポーア  
 錐 ツウーン 鋸 シウワ  
 棒 テツクーン  
 竿 ヤヤーツクワン  
 板 ツアパーン  
 心もくどりボンターン  
 材木ツーパー 蓆 ナーヨツ

梯子ツイイ 橋 キーヨ  
 車 ナーヤ 煤 モーイ  
 硯 ヒーン 筆 ビツ  
 墨 マツ 紙 ツー  
 石鹼サモーン 書物ツウウ  
 帳簿シヤポ 肖像ワーカー  
 手本リヤンシチ 彫刻テウキヨ  
 旗 キー 寫真アンシヨ  
 太鼓コー 夜着シヨガ  
 蚊屋モンチヨ 枕 チムクウ  
 耳輪ヒーカーウ 指輪チエーチー  
 狀袋ホーウスーター  
 鉄 カータヤン 砥石トーチヨ  
 雑巾チウポ 箒 サウドー  
 烏籠シウラン 網 コンスリース  
 朝食ツアーボン 晝食シータルボン

晚食ミールボン  
 間食チヤードイームシヌ  
 酒 チーユウ 菓子ツヤイ  
 鶏肉パイパー 魚肉パイパー  
 豚肉パイパー 牛肉パイパー  
 羊肉ニムバー 煮肉コロンバー  
 焙肉シヨーパー 汁 トーン  
 肉汁パイパー 鶏汁パイパー  
 飯ペミールボン 粥 ヒーボン  
 卵 オイルン  
 昆布ハイトイツアーイ  
 乾魚キワシヌヒフー鹽 ヤム  
 海參ハインシユーン 干鰯チヤンヒフー  
 干鮑チヤンパウヒフー  
 甘薯。馬鈴薯 フアンチユー  
 葱 ツアース 菌 コー

筍 カンスーン 牛乳グーチー  
 大根ローブリア 甜瓜タアンクイ  
 西瓜セークイ 豆 ダウ  
 茄子ガーチ 豌豆ワンスダウ  
 蕨 スチー 慈姑ヅーコー  
 韭 クーツァイ 素麵ミーン  
 米 ズー 麥 マツ  
 粟 チヤカ 稗 グーヤ  
 漬物イムツァーイ 砂糠ペードン  
 茶 デーヤツア 湯 ガイツイ  
 唐辛チンシヨーツ 姜 キーヨン  
 銀杏ペイクー 蜜柑キヤカツチ  
 葡萄ボードー 落花生トダウ  
 醬油ダウユ 袖チチユンチ  
 ばしよをのみチヨーツ  
 藤 ターロン 飴 ベーコー

身軀シンテー 腦 ナウー  
 頭蓋ナウトー 頸 プーツ  
 肩 カンターウ 掌 チユーチヤン  
 拳 コンターウ 臂 ビー  
 腕 ヘンケー 腿 トーイ  
 髻 カーツン 爪 チンカー  
 皮 ポー 額 ナウモン  
 舌 チー 頷 アムクン  
 喉 ナーウ 聲 シヤ  
 死骸シーシユー 胸 シムコーワー  
 涙 マクサーイ 身 シーイヌ  
 目 モクチユー 口 ツチユイ  
 鼻 ビーン 耳 コー  
 唇 チー 齒 ツユイキー  
 舌 ツイカウ 頭 タウリン  
 毛 モー 眉毛 マグバーイ

脛 アムクーン 手 ジャーユ  
 手指チユーチンクウ背 ヒーヨンク  
 臍 パクサーイ 肚 パーット  
 腰 イヨー 脚 カークン  
 男の前の物ナンチヤオ  
 女の前の物チーパイ  
 大便カーツチン 小便ナチヤ  
 病 ビーイン 寒胃カンサーウ  
 熱 ショーグウ 下痢スサーイ  
 これら病ラウサーイ頭痛タウチヤ  
 僂背ウンクー 血 フーイ  
 創傷シーヨン 腫物リヤツア  
 氣絶トウウ 痛 テーイヤン  
 痿 スーオン 盲 チーミー  
 唾 エーカウ 聾 ツアヘラン  
 發汗エツクワー 藥 イヨン

水薬イヨソツイ	丸薬ホーヨソ
膏 コー	肥 チーヨソ
瘦 スサーソ	
虎 ローホー	豹 パー
熊 ヒユーン	狼 ローソ
獅子スーイ	象 チーイユ
水牛ツイグー	鹿 ロツ
羊 イユソ	兔 ドー
狐 ホー	狸 リー
猫 ニヤウ	狗 ガーウ
鼠 ハヤウチユー	穴 コーン
猿 ガーウ	蝙蝠ヒーンホー
雀 チョチャー。ウアー	
雁 シーイ	鳩 フレチャウ
鶯 ホーソニス	魚 フー
鶏 クイ	鯉 リーヒフー

鯨 リウアーヒフー	牡蠣オー
鹽魚キヤムヒフー	
木 モク	紫檀チータアヌ
花 ホトイ	黒檀ウベクトアヌ
松 シヨース	柳 リーユ
杉 スアース	芭蕉パーツアーウ
蓮 リヤース	牡丹ポーダヌ
枯草キヤレツアーウ	
蛇 ラウセー	虫 ヤヨソソ
百足ヤーカン	蝶 デーウ
蠅 ホーシン	水蛙ツイゴイ
蜘蛛チーワー	蚊 マン
虱 サホー	蚤 カーツアウ
床虫メツサーイ	
金 キーム	銀 グリン
銅 ターソ	鐵 デツ

錫 ヤーソ	鉛 チーム
鋼 ガーソ	黄銅ウンターソ
水銀ツイグース	銀箔グーソソ
銅線ダーソソソ	鐵板デーッパアソソ
金塊キムクイー	石 ナーヨタウ
玉 ギユーク	水晶ツイチーソソ
珊瑚ツウソソ	
親戚 チーソチャー	祖父ツオーコーソ
子孫キヤソソ	父 ペー
母 ブチー	祖父ツオーペー
祖母ツオーブワー	養父ゴイペー
養母ゴイブワー	養子ヨソイキヤソ
養女ヨソイヌーキヤソ	
伯父ペーフー	叔父チエーフー
伯母ペーブワー	叔母チエーブワー
舅 リーコソ	

嫁 ツオーシンニヨソ	長男ドアカヤソ
夫妻アモー	兄弟ヒヤソデー
次男ソチキヤソ	妹ホーイ
姉 チーホーイ	
兒童キヤソ	
從兄弟チヨソヒヤソデー	
從姊妹チヨソチーパー	
獨身チシニス	中人チヨソソ
友人ペーニヤソソ	
知己チーキ	學友シユーユーツ
老人ローソソ	小兒シヨソソ
乳母子ニイマー	
皇帝ホソター	皇后ホソホー
王 オンヤー	
女王ワアホーホソター	
皇族ツオーツー	王族オンツー

華族 ウーコワンヌツオーイ  
 平民 チョンホー 官吏 ツライコウーイ  
 商民 ツチイセンリラン  
 百姓 ペーシン 武官 プウーコワンヌ  
 文官 モエンコワンヌ 醫者 イーシンサン  
 兵士 ビンヨラン 水夫 ツイチエー  
 僧 ホーシユン 宣教師 カーウー  
 儒者 タクスーラン 内國人 ボンドイラン  
 外國人 ゴワコラン 富人 フホーキヤ  
 貧民 サイヌヒヨン 詩人 ツーデー  
 書工 ウイタンチエン 番頭 チヤンクイ  
 僕 ローツアーイ 婢 ツアチカーン  
 旅客 ツンワーケー 代理人 ドーイパン  
 盜賊 ケーデヤム 賈人 モーイラン  
 買人 モイラン 持主 タンケー  
 漁師 グヒーフー 獵師 パーラー

人足 シクリー 角力 ショーヤン  
 俳優 ヒーツー 厨人 チーラー  
 教師 センシー 學生 ハーセン  
 ト者 ヨアーヤ 梁劔家 プーケーシー  
 彫刻師 ケチチヨン 裁縫師 ツアイホオン  
 織工 パーデー 染屋 チーポー  
 玉屋 ボーイギエー 製本師 デンツエウー  
 鋸屋 シエーシキラウ  
 製帽師 ツオイポーサイフー  
 刀劔師 ツオイドーサイフー  
 鍛冶匠 パーチーサイフー  
 馬具匠 ツオーメイオアサイフー  
 靴匠 ツオーオイスアーイ  
 左官 トーツオオ  
 大工 ツライバサイフー  
 瓦工 トーツイサイフー

桶工 ゴータン 石工 パーヂョー  
 理髮人 デーラーン 屠人 タイグトラン  
 塗漆匠 ニーツヤーツ 寫眞師 ヒーフシヨ  
 仲買人 キンキーセンリースン  
 職人 ツオツコンフー 行商 ケーシヨ  
 兩替店 チーレンデヤム  
 西洋物店 イエーンポーデヤム  
 書肆 ツウーデヤム 藥店 イョーデヤム  
 布商 モイプー  
 雜貨店 ツアーポーデヤム  
 菓子店 デヤムシムポー  
 煙草店 フーシテヤム 菓物店 コーチ  
 茶店 デーデヤム 材木店 ツアーチユン  
 吳服店 デュートアンデヤム  
 綿屋 メンホーイデヤム  
 料理屋 チューコワン 旅店 ケーツザン

遊女店 ツアオケーヤン  
 湯屋 スーイサーン 案内者 ツオアロー  
 通事 ドンズー  
 佛教民 プウツカウミン  
 耶蘇教民 ヤーツカウミン  
 稅關 ハイコワース 貿易 モイモイ  
 運賃 ツーシケ 換ウツ  
 分 フーシ 寸 ツーチン  
 尺 チーヨツ 丈 ドーシ  
 分 フーシ 錢 チーヌ  
 兩 リヨーン 斤 シーシ  
 一文 チモーン 十錢 チカグン  
 一圓 チコー  
 遊戲 ラートー 玉突 パーキエー  
 競走 サアイバポーウ 骨牌 キエーパ  
 基 キー 人形 シヨランジ

紙鷲ホフンツオイ 假面メンカ  
 國事コンプスー 家事ケースー  
 訴訟コワソメシ 承諾クーイン  
 讓與ホールー 和解スーウハツ  
 爭論シヨイシ 盡力ヂンヌラツ  
 事故ダイチー 證據ピンク  
 義務フソフソ 權利コワース  
 申込ヂヤオウオイ 要領ツエウイー  
 確實チヌ 豫期シエンデンクイ  
 命令ミヤー 規則クイク  
 原因イヤソコ 結果リヤチキヨ  
 變換キンカール 通知チーウオイ  
 返答ホイオイ 禮儀レーマチ  
 出產ヨーンピヤソ 婚姻シエンク  
 死亡クーイセー 駭るツアウキーヨ  
 注意シユーシム 罪人ホワソソラソ

歩行ボーキヤソソ 立 キヤータ  
 坐 ツエー 臥 クソソ  
 泣 カーウ 笑 チョーウ  
 長大息トクイ 口笛ボンビヤ  
 眠 トカーツイ 夢 マソソ  
 迷 メー 諺 ショソソ  
 想像シユソソ 悔悟アウホイ  
 思慮シムガンシ 信用シヌ  
 疑惑ギーヒーツ 志望チーバソソ  
 斷念シーラソヌ 喜樂ヒーロツ  
 悲哀ビイアイ 憤怒フソソ  
 大胆ダータン 豪氣ホーキ  
 臆病キヤソソ 恐怖キヤ  
 正直ラウシソツ 貞節チンチヤツ  
 憐憫コソソソ 友愛ユーアイ  
 嫌疑トーヤム 怨恨ヘエン

嫉妬ワソト 敵對テ  
 勤勉キンソソ 懶惰アソソ  
 貪食ツイソソ 暴飲コイソ  
 美味ホーチャ 香 パソソ  
 臭 ツアウ 清潔カンチソ  
 柔 ロアソソ 剛 ギソソ  
 高 コソソ 低 キソソ  
 愚鈍チユソソ 狡猾ツアソソ  
 才 ツアイ 智 リソソ  
 妄想モンソソ 立腹ウーキ  
 一生懸命パソソ 瀛船ボソソ  
 人力車タンイユソソ 瀛車ボソソ  
 馬車ソソ 鐵道チーロ  
 海岸ハイキン 港 ハイカーウ

渡場ドソソ 陸 ロソソ  
 山中スオアライ 山路スオアロ  
 藪 チソソ 村落ヒユソソ  
 城門シヤソソ 城壕ホーカソ  
 廻道ソソ 分れ道シヤソソ  
 土橋ドソソ 石道チユソソ  
 水橋ツアソソ 石橋チヨソソ  
 鐵橋チーキヨ 居留地ツオソ  
 市地チーソ 中食ターチヤヌ  
 出發キソソ 宿すヒユソソ  
 露宿するターヤソ 船を漕ぐユソソ  
 道を聞くタンチヤロ

浮しけ舟サンパン 支那帆船ミンツーン  
 漁 舟コーウ 渡 舟ドーツーン  
 一里「我五丁餘」チツリ  
 一里十分の一をチツポー  
 一斤チークーン 十匁チーリユン  
 一匁チーデー  
 脚絆カーキヨ  
 水飴メーゲー 葛 リヤンフン  
 海苔チーツアーイ 糊 チユーン  
 松やねシヨソカー 大根漬ツアーイポー  
 松茸チヨソコー ぎびカウヘト  
 椎茸ヒヨソコー  
 冬瓜の如き菜ポーアー  
 生刺ダンチーサーアーイ  
 葱の根ツアンターウヘちまツアーイコーイ  
 西瓜シーコーイ 唐辛フアンキユーン

茄子キユー 甜瓜ターソコーイ  
 波連菜ポーレンツアーイ  
 芥菜コワツアーイ 唐菜パーツアーイ  
 南瓜キンコーイ  
 鯛 カラー たこマーブー  
 いかデウフー ばらオウヒフー  
 あいの如き魚 オボタン  
 鮫の如き乾魚 スワヒフー  
 しらすツアワヒフーわ ぢバラン  
 ぎちピンヒフー かますツワヒフー  
 したひらピンヒフーめがるチコーア  
 いわしビコーヒフー乾いわしオンヒフー  
 こまめパーラン かまきツヤアツ  
 麥 酒コーチユー 葡萄酒アンチユー  
 ラムチ ポーランツイ  
 忘れたモイキー 押すスアー

かへるヤー 引くトワー  
 取 るギヤーミン乾すビ  
 穴を掘るツオクテ 何時ぞやビデー  
 換 ウワー  
 石炭ドートワヌ 石油ホーランユ  
 繩 ヲアウツアー かまぎツアウパーウ  
 鉢 ルイコワー 漆器ユーキ  
 磁器ツウーキ 象牙器チユンヂ  
 槍具セリリヤウ 團扇ドワンミ  
 書籍ツウーシユン 鳥籠チヤウラン  
 混成枝隊 フォーンセンチードーイ  
 司令部 ジーリンポー  
 軍醫部 イーセンヨウ  
 監督部 カンドツンコウ  
 檢疫部 ケンエツポー  
 軍吏部 グンチエンツ

病院 ヨンピーンバーン  
 軍紀隊 グンキードーイ  
 野戦郵便局 シンキヨツ  
 炊事場 ツドーバーン  
 酒 保 チューポー  
 事務室 チエンアバーン  
 書記室 ジョーバーン  
 民政廳 ミンチンヂヤーン  
 憲兵部 チンピエンポー  
 警察官 シンコウ  
 巡卒 スンロービエン  
 通譯官 トンニキコウ  
 市長 テーポー  
 村長 オーカー  
 組長 ヒヨソロー  
 公園 ホーイフン

警察署 スンポーチャム  
 會議所 ホイコワーム 陸軍リヨクシン  
 海軍 ハイクシン 軍艦 ビエンツイン  
 水雷 ツイルーイ 砲臺 パウダーイ  
 銃 チョーリン 洋刀 イョムト  
 守備兵 ツーウシヨン ビエン  
 間諜 カンツイー 哨兵 タンメー  
 大將 ドアスーイ 中將 デートーグ  
 少將 ツチンピエン 大佐 フォーチョン  
 中佐 サンチン 少佐 ニーキョ  
 大尉 ドーゾー 中尉 シュービー  
 少尉 チヤンツラン 特務曹長 パーツオン  
 曹長 グワウイ パーツオン  
 司令官 トントワコーワン  
 將校 チョンリン 隊長 トーイデーイン  
 傳令官 リンコーワン

是れ チーコ あれ ヒュー  
 高い カツクイ 安い カツシヨ  
 持て来れ トイラーイ 持て行け トイキユイ  
 揃い来れ ダンラーイ 揃て行け ダンキユイ  
 押す スアー かゆる ヤー  
 行く キヤーン 背負ふ イヤーン  
 取る テーツ 立つ キヤ  
 笑 ふ チョーウ 握掌打つ ドーイ  
 縛る パーグン おぐる コー  
 か く カーン 忘れた モイキー  
 病 氣 ビーン ちんば チーウ  
 土語 ボンペンウオイ  
 日本語 シボンウオイ  
 外國語 グイクオウオイ  
 北京 パキヤン 天津 テンチン  
 太沽 ダイコー 牛莊 ギニーツアン

芝罘 チーファー 上海 スワンハイイ  
 漢口 ハンカウ 九江 キウカーン  
 東朝陽門 デヤウヨンモン  
 西即叙門 チキスーモン  
 南迎薰門 チンフンモン

北拱辰門 キヨンシンモン  
 大西門 ドアサイイモン  
 順承門 スンシエンモン 水門 ツイモン

◎ 物産

本島の北部は山嶽嶽々として南西の地と比すれば甚だ平原と乏しと雖も此等の山地は又本島物産の重要部を占むる茶樹の栽培は頗る適するものあり是を以て本島の茶園は此北部の諸山と多くして南部の地と少し南部は之を反して平原廣く開け沃野漠々として數十里の間は擴り地味専ら甘蔗の生殖は適す之を要する茶甘蔗は各相分れて地區を本島の南北と占め二大物産を爲すものと謂ふべし今本島物産の重なるものを擧ぐれば左の如し



○米穀 米は其種類を分つて三四種とす即ち白壳双冬早冬紅米等として一ヶ年間三回の收穫を得第一回は先づ十二月を以て土地を耕鋤し翌年三月に至て植附を爲し六七月の候に追て收納す第二回は八月より年末に至る外又烏米と稱するものあり其色深黒として極南方の山腹等水あき處に産す重粥粥炊ぎて病者の食に供し又は茶の如く焙じて飲料に用ふ其他雜穀にては大豆綠豆燕豆等あり

○落花生落花生油及び落花生餅 落花生は到る處に種殖す落花生油は南部の重要なる物産として料理用又は燈火用に供す而して毎百斤の種を以て五斤より二十四斤の油を搾出し八個より九個の餅を得是れ即ち落花生餅として肥料の爲め厦門に輸出す

○姜黃 姜黃は臺南府の東北に在る諸山に於て之を培養し刻煙草の香氣を附するが爲め天津地方に輸出す

○白蔴及び烏蔴 白蔴烏蔴の兩種は菓子を製し又は油を取るが爲め北支那地方に輸出す

○白蔴油烏蔴油(黒胡蔴油)及び草蔴油 此等の油は毎百斤の種を以て油四十斤を搾出し餅六塊を得と云ふ

○蔴粒 蔴粒は胡蔴油の餅を以て肥料の爲め厦門に輸出す

○靛及び菁子 靛とは即ち藍として南部にても淡水地方にても唯地方の需要に充つるのみして他は輸出するに至らず又菁子とは即ち藍種として厦門に之を輸出す

○帽仔卷 帽仔卷とは臺南の東北に方る番地の諸山に於る自然生山の茶として多くは番人の日用に供し又支那人に販賣す他は又沙連及び六右里と云へる山茶あり

○加冬柴 加冬柴は南部の中央に産する一種の木材にして家具を製

する爲め廣東福州等も輸出す

○石柳柴 石柳柴は印材又は額縁等を製する材にして寧波等も輸出す

○關心柴 關心柴は多く北部も産する木材にして器械類を製し又榨糖器の車齒を製するも用ふ

○楠 楠は本島の中央も産し廣東福州等も輸出す此等の輸入地も在ては多く船材又は家具等を製するも用ふ

○杉山 杉山も亦本島の中央も産する一種の杉木にして支那各地も輸出す

○繡榔木 繡榔木はマンコ番界のトコハン人の棲住する地も産し高さ五十尺より七十尺直徑八尺より十尺に至る一種の硬木にして木質美麗あるを以て家具等も用ふること多し

○樟木板 樟木は多く番族地方も産し番界移住の支那人等之を伐採す頗る巨大ある材にして板と爲して支那本部も輸出す

○樟腦 樟腦は彰化縣の近傍オーラントコハン等の内地も産するもの多し

○木棉及び木綿花 木棉は臺南各地も多く生殖す其木幹は數丈の高さ及び葉は鶏爪蘭即ち交讓木の葉も類し蕾は無花果の形も似たり凡そ二月頃も至れば莢の如き赤色の花を開く是れ即ち木棉花にして重く布團の綿も用ふ

○鳳梨糸 鳳梨糸は鳳梨樹の纖維にして番人の製して糸と爲すもの係る猶ほ蘇布のごとく織りて夏衣も用ふ

○生番布 生番布は番地の所産にして一種の蘇を以て之を製し其質甚だ強堅あり臺南地方の外國人等は往々之を以て獵衣を製すと云ふ

○蘇及び蘇布 蘇及び蘇布は多く北部に於て之を産す

○蒲草片 是れ造花の原料あり

○藤 藤は生番地に之を産す

○鹿皮水牛皮牛骨牛皮膠 此等は南北兩部共に之を産出す

○石花菜 石花菜は重し基隆の近海に之を産し日本産よりは稍短くして畧朝鮮産と同じ近來寧波地方に輸出し消費極めて多く毎百斤に就き價凡そ二弗内外あり

○蠣灰 蠣灰は基隆地方に多し

打狗魚鱈 魚鱈は烏魚即ち鰻魚の卵子にして此等の鱈魚は安平の沿海より打狗の近海に多く十二月頃より二月初旬に亘て之を漁獲す其大さ凡そ三四尺に及ぶものありて先づ腹を割り魚鱈を取出し魚は鹽漬又は干魚として輸出し其魚鱈は之を取出したる後直ちに薄鹽とし

以て多く支那本部に之を輸出す其價毎百斤に就き十五弗より十八弗ありと云ふ

○石炭 石炭は基隆暖々錫口等の地方を始め其他臺北府一帯の地に産し縦横炭脈に富めり

○硫黄 硫黄は臺北府の紗帽山北投油坑等の地方に産す

右の外魚翅龍眼密柑椰子竹筴番薯油菜大根等皆本島産物の重なるものとして就中密柑は凡そ五六種あり

○茶葉 茶葉は臺北地方の一大物産にして其茶園は臺北府を中央とし北は二十英里に至り東は三十英里より五十英里に至り南は四十英里に達す茶樹は山の半腹に於る軟質の土地に栽培し毫も肥料を施すことなし然るも其嫩葉の蒸々として發し來るを見れば地味の最も茶樹に適當なるを推知すべし第一期の摘採は五六七の三ヶ月にして是

れ最も良好の茶葉を得るの時期とす第二期第三期は七月の末より八  
九兩月を経て十月に至て止む

○砂糖 砂糖は臺南地方の一大物産として輸出品総額十分の八を占  
め實は本島の一大富源を爲せり其生産の地は臺南府を中央とし南の  
恒春縣の琅瑤は達し北の嘉義縣の北港に至る沿岸一帯の地を重なる  
ものとす赤糖は又臺北地方に在ても淡水縣の竹塹艋舺等の地は之を  
産すと雖も其量臺南地方の如く多からずして單に其地の需要を充つ  
るに過ぎず抑も此臺糖は我邦輸入品中最も重大なるものにして其日  
本は輸入するの數量一ヶ年大凡そ三四十萬担の多きに至り其價海關  
銀實は六七十萬兩の巨額に達せり左れば今該地に於る糖業并之に  
關する貿易上の事を述ぶるに極めて必要の事と爲すべし請ふ左之  
を述べん

臺灣の甘蔗は二種あり一は赤蔗と稱して其色赤く一は竹蔗と名けて  
其色白し其白きもの即ち普通の甘蔗にして二種共成熟の時の高  
さ八尺より一丈餘に達す甘蔗園に於ては初め甘蔗の切節凡そ七八寸  
許のものを地中に挿み草を燒き其灰少許を之に散布するの外別な培  
養の爲め肥料を施すこととなく唯天然の雨澤を仰ぐのみとて殆んど野  
生に均しく之を放任し置ても該島氣候の温暖あると地味の甘蔗は適  
するの故を以て發育極めて宜しく糖汁も亦十分は充實す若し之を今  
日汕頭地方に於てする如く北支那より輸送する豆餅等の肥料少許を  
施さんといは其莖一層肥滿して純粹の糖汁を充實し以て世界に著名さ  
る良好の砂糖を出すに至るべし

臺灣の砂糖は貿易上之を分つて臺灣府(即ち今日の臺南府)糖と打狗糖  
の二種とす從來我邦は臺灣の砂糖と稱し輸入する所のものは皆打狗

糖として一も臺灣府糖あるを彼の臺南府即ち其埠頭たる安平港より積出せる臺灣府糖即ち俗に所謂臺灣糖は重く上海寧波其他北支那地方より輸出して未だ日本より輸送する者あり蓋し臺灣糖は質細やかにして打狗糖は稍粗ざれば自から其向きあるが爲めあるべし今此等の事は姑らく之を措き左に打狗赤糖の製法并に糖業に關する二三の事實を畧記すべし

前條の如く栽培したる甘蔗は凡そ十一月の中頃に至れば全く成熟し糖汁其莖より充實して已に收穫の好期節に際するを以て乃ち之を刈取り水牛四頭を役して蔗園より之を製糖所へ運搬し此に其葉を切り拂ひ石車に付して之を碎搾す然るときは糖汁其石車の下邊に在る板面の底下に附け出したる樋管を傳へ煮釜舎に在る桶の内へ注入するを以て乃ち其汁を掬ひ上げ第一の煮釜へ移し温火を以て之を温め然る

後第二の釜へ移し少しく火力を強め表面より浮びたる泡沫を杓子にて掬ひ去り更に又第三の釜へ移し此釜にては汚物の表面に見はるゝも隨ひ悉く掬ひ去りて十分糖汁を純清ならしめ然る後更に第四の釜へ移し一層火力を強く煮立て沸騰點に達せしめ其沸騰するに及で落花生油と蠟灰とを混和したるもの若干を投入すれり暫時にして其汁濃厚に凝結するを以て此時之を第五の冷やし釜へ移し砂糖の成分をして均一ならしむる爲め能く之を攪拌し既にして全く凝り固まるに至れば長さ六尺幅四五尺深さ六寸許りの木箱に移し之を粉碎して豫めて内部に竹皮或は竹葉を敷きたる竹筐製の蓋を装入し港口より運搬して之を秤量し附し然る後其蓋の上下を彰化縣より出づる茄蒔包と云へる「アンペラ」を以て蓋ひ細く縛り其上より全体を麻袋を以て包み二重細く縛り了りて始めて輸出の手續に付す其製造高の通

例一個の製糖所にて一日も赤糖七八担ありと云ふ  
 砂糖を本船に積込むに其通船は竹排と稱する竹筏を用ふ其筏は大  
 竹三十八九本を列ね作りたるものにして長さ凡そ十二三間あり帆の  
 仕掛もありて何様の大風激浪も會ふも決して覆没するの患なし  
 製糖所の構造及び人員等の其場處も因り自から大小の別あるを以て  
 固より一定し難しと雖も其中稍大あるものも就て之を云へば機車を  
 挽き回さしむるも水牛三頭を用ひ人員の糖師二名火夫(糖汁を煮る者)  
 二名車手(石車も甘蔗を扱む)者二名牛丁(機車を挽き回す所の水牛を  
 指揮し兼ねて甘蔗の皮を剥く者)二名を要し又蔗園一ヶ所も就き甘蔗  
 を刈取るも要する者六七名とし其他水牛の機車を挽き回すの外別  
 も運搬等の所用を合し製糖所一ヶ所も就き総じて十頭を要すと云ふ  
 但し製糖の際煮釜の燃料も一も有價の薪を要せず總て甘蔗の締売

を以て足れりとす  
 然るも右現在の機械を以てするとき甘蔗百斤より得る所の糖汁最  
 も多くも五十斤乃至五十五斤を超ゆるを得ずと雖も若し西洋の新機  
 械を用ふるときは同じ百斤の甘蔗にして七十五斤の糖汁を得べく殊  
 も時間手数の如きも大よ之を省くを得るを以て曩も西洋人等二三座  
 の新機械を据付け之が實用の利益を示し以て大に獎勵する所ありし  
 り支那人等其利益の争ふべからざるを知るも徒らに慣用も泥み姑息  
 の舊機を棄つるを欲せず言を左右も構へて新機の進入を防ぐの現狀  
 されば到底改良は得て望むべからずと云へり豈惜まざるべけんや  
 元來臺灣島も於る甘蔗の栽培は総て福建省漳州泉州等より移住せる  
 人民の従事する所にして就中小農の徒少からず此等の徒は概ね生計  
 の裕かからざるが爲め其植附けたる甘蔗の成熟するも追び已むを得

す自家の製造を廢して之を外國の買辦を賣渡し又の買入するに至ることあり殊に該地方に於る糖業の實際を聞くに外國商人と内地の農家との彼の茶業の取引上は於るが如く互に言語通ぜず且つ互に萬般の事情を異にするが爲め常々直接取引すること能はず是を以て買辦其中間を立入り凡そ内地の買入方より輸出に至るまで諸事之を辨するを以て幾んど其の利益は獨り買辦の占むる所と爲るを免かれず加之臺灣の砂糖は毎年少くも二十五萬担多き五十萬担の巨額を我が横濱神戸に輸送するも此等の荷主は唯り彼の順和號順記號等の如き一二の糖商を除くの外多くは皆海濱の清商輩にして各自一二百包より四五千担に至る糖貨を香港上海銀行の荷爲替を取組みて其發送方を該地の西洋商人に委託し此等の西洋商人は斯る糖貨の各方より輻輳するを俟て之を瀛船に搭載し日本に輸送することにて荷主は横

濱及び神戸に在る五六の清國商館を委託販賣するを常とす斯の如くにして近來西洋人は自から日本行の赤砂糖を直接販賣する者極めて稀れあるが故に此機に乗じ若し我が商人たる者直接内地の人民と約束を結び内地買入の事より輸出に至るまで總て我の一手に引受け我が瀛船を利用して本邦に輸送するの計畫を爲さば實に一大利源を永久に開くものと爲すべし然れども進んで此事業を経営せんと欲するは宜しく先づ該地の事情を熟察し一方に於ては我が横濱神戸等に於る砂糖商人間を確乎たる規約を結び從來此商業に従事したる清國巨商等をして寸毫も隙の乗すべきもの無からしめんことを勉めざるべからず徒らに一時の輕進を出て却て損失を將來に招くが如きは著者の極めて取らざる所あり

◎商況及び物價

現今本島に於て特<sup>ニ</sup>外國商人の從事する貿易事業を觀るに臺灣南部に在ては砂糖を以て輸出品の重なるものとし阿片を以て輸入品の重なるものとし又臺北部に在ては茶を以て輸出品の重なるものとし亦阿片を以て輸入品の重なるものとし其餘の雜貨諸品に至ては現今全く支那貿易商の手中に掌握すと謂ふも不可あかるべし蓋し從來外國金巾及び羅紗類の如き重要品は特<sup>ニ</sup>外國商人の手中に之を占め専ら其經理する所ありしと雖も近時に至ては支那商人等自<sup>ラ</sup>から代理を香港又は上海厦門等<sup>ニ</sup>置き直接に取引を爲し且つ傍ら需要地方の景況如何を察し専ら之に依て貨物の選擇に注意するを以て需要者は従前より却て適意の品を更<sup>ニ</sup>廉價を以て得るに至り加之其代金取立の期限の如きも頗る長期を與ふるに至りしを以て今日の現狀需要者も供給者も共<sup>ニ</sup>兩方から利益を有し普通の貨物は概ね清商の獨占に歸する

よ及び

爰に我邦より本島に輸入する貨物の景況を記せん日本綿布の臺灣に輸入を始めたるは明治十八九年の頃にして其後年々幾分の増減ありきよ非ざるも之を概するに先づ年を逐ひ益好景況に赴けりと謂ふを憚<sup>ラ</sup>からざるべし打狗税關長の言ふ所を聞くに曰く日本綿布は近來大に内地人民の嗜好に投じ其西洋天竺布に比して價の廉あると着用して輕快あるを以て評判愈<sup>々</sup>高く賣口愈<sup>々</sup>擴まり今日の勢ひを以て進行するときは遠からずして天竺布は日本綿布の爲め臺灣内地の市場より驅逐せらるべしと此好評は唯<sup>ニ</sup>臺南のみならず臺北に於ても亦然るに似たり現に淡水税關長の說話を聞くに日本綿布は開港場附近の地方より牽<sup>レ</sup>ろ内地に運送するもの多く毎年輸入の七八分は同港海關に於て更<sup>ニ</sup>内地分輸單を發給すと云へり以上二税關長の言



よ據るときは今日我が日本綿布は漸く内地人民の嗜好も適ひ愈々其の販路を擴めんとするものゝ如し果して此有様よて推し行き愈々深く内地よ擴まり全島三百餘萬の島民中々等以下の人民悉く其利便を知るよ至らば必ずや打狗税關長の言よ違はず天笠布は日本綿布の爲めよ驅逐せられ臺灣島中復た隻影を留めざるよ至らんも亦決して知るべからず今試よ明治二十三年中該島よ輸入したる日本綿布と之が競争の地位よ立てる天笠布との比較數量を掲ぐるよ左の如し

淡水港輸入高  
日本綿布壹萬六千七百十九疋  
天笠布四千五百九十五疋

打狗港輸入高  
日本綿布壹萬六千七百二十二疋  
天笠布八千五百五十六疋

上よ掲げたる日本綿布は重よ我が上州縮よして東洋千鳥縹布と稱へ

白地よて一疋の價洋銀四拾五仙より七拾仙位の小賣相場あり其商標を見れば山形よ黒の三つ星(△)を標し「荒菊製」と記し又丸の中よ源の字(◎)を標し「下野佐野製」と記せしもの及び丸の中よ三の字(③)を標し其下「別撰」と記したるもの其外綿地等數種ありて臺南臺北共に吳服商の重あるものは一として其店頭よ我が綿布を陳列せざるものあし是れ宜しく當業者の注目すべき所あり

臺南各地よ於て農民及び下等の人民は冬季よ際し多く紋羽を衣服の中よ用ふるの風あり左れば日本製の白色綿「フランチル」の類を輸入せば零時好よ適するあらん歟現よ淡水地方よ於ては近頃我が鼠色棒編の紀州「フランチル」を多少輸入し夏冬共よ肌衣等よ用ふるものありと云ふ其價十五「ヤード」物一反よ就き貳弗四十錢位よて廉價ありと評する位あれば斷えず輸出して利益あるべし

右の外手拭地、剛波縮葉大小類も亦近頃漸く輸入を増加するの有様あり現臺南府の内部鳳山舊城内の市場にては日本手拭の白地と藍色にて竹と雀を染出したるものを多く店頭と列ねたるあり二筋を一聯とし小賣の價洋銀十錢ありしと云ひ又臺南府城内にては白地と梅の花を染出したるもの賣口好きが如くありしと云ふ

綿布類も次で臺灣と輸入する本邦物産の重なるものは海産物とす現臺北府の艋舺市場に於ては凡そ水産店中我が日本の鰯イヌラ貝小蝦等を陳列せざるものなく此等の海産物は概ね次等品として上等品は却つて不向ありと云へり然れども該地は臺北部の首位に在るを以て隨て官員等の居住も亦少からざれば日本海産物は勿論雜貨等に至るまで大望を將來と期すべきものあり

臺南府城内に在ても我が物産に係るもの綿布の外尙ほ海産物にては

「イヌラ」貝鰯等の類雜貨にては陶器に於て小皿小鉢漆器に於て菓子器、蓋物卵形の盆等賣行好く又日本の花燈籠を賣るの店二戸ありと云ふ然れども此臺南府に於ては我が日本雜貨類の賣行未だ北部の淡水地方に於るが如く盛ならず蓋し此地は既屢記載したる如く福建廣東等の各開港場より集りたる人民の居住する處あれば隨て常々西洋品を使用するの慣習を存し現臺東汕頭等の人もして西洋雜貨店を開くもの五六戸もあり其賣行も亦頗る宜しと稱すれば我が日本も西洋模造品を製し此と輸出せば蓋し大に利益あるべしと云ふ

爰臺北の景況を観察するに現臺淡水港を溯り外國製茶所のある處即ち大稻埕に到れば近來臺北鐵道工事の起れると人民移住の盛あるとよ由り之と隨伴して此と巨大の家屋を新築するもの多し今日の現況より之を推すときは淡水港の商業は數年を出でずして此大稻埕と

移るべきを見る

大稻埕街を経て二英里許を行けば艋舺即ち淡水縣の市街に到る此地は臺南地方と相反し日本雜貨店の多きこと稍驚くべきものあり現に唯日本品のみを以て商店を開くもの五六戸及び其品物を擧ぐれば「ランブ」百の莫大小肌衣、莫大小靴、足袋、手袋、手袋は指さきもの賣口好し、石礮、提燈、懐爐、野風呂、眞鍮鍋、玻璃鏡、山水畫の玻璃額、「ハンカチーン」但し木綿製にして縁を取りたるもの賣口好し、齒磨粉、齒磨「ブラシ」摺附水洋鐵細工、玩弄物、子供靴、足袋、毛糸細工、小兒頭巾、襟巻等にして孰れも廉價の品多し今艋舺に於る日本雜貨店主人の説ありと云ふを聞くに該地の日本雜貨は今日皆上海香港の間屋に就き之を仕入るゝものあれば若し該地日本人來り自から一の間屋を開けば相互の利益少からざるべしと云へりと是れ實に然り我が國人該地に店を開かんとせば

小賣店よりは寧ろ卸店を開くも若かざるべし之を開くは上文に所謂彼の滬尾と艋舺の中間に在て將來繁華市場を爲さんとする大稻埕の地を以て屈竟と爲すべし今日同地に於て間口二間、奥行五間の二階附家屋にして一ヶ年八十圓位の借家料を拂へば之を借るゝことを得べしと云ふ艋舺にては常々支那人の舶載し來る罐詰及び烟草を用ふるもの多く右雜貨店主人の話に日本の巻煙草は香氣悪しきが爲め賣口少しと云へりと聞く

日本摺附木は近來該島輸入品中に在て漸く重要部を占め現に淡水海關の如きは去る明治二十年より其稅關表中特々日本「マツ」の一項を設くるに至り臺灣北部の需要は全く我が安全製に歸したりと斷言し得べき盛況を呈せり就中同地方に於て消費の最も多きは商標五個の蝙蝠を畫き「五福洋行」と記せしもの及び上部と「和合火柴」の六字を記し

其下は二人の唐子行立したる圖の商標あるもの等として品位も亦上等あり然れども臺南に在ては府城内は重く外國黃燐製の摺附木需要多く我が安全製は却て同地方の内部も多く輸入するの有様あり今明治廿三年中淡水及び打狗の三港に輸入せし摺附木の數量を見るに左の如し

淡水港輸入高 日本安全製

拾萬〇百五十「クロス」

打狗港輸入高

外國黃燐製 日本安全製

取交ぜ 三千九百四十五「クロス」

上表より由て之を観るときは打狗輸入の外國黃燐製は我が日本安全製を取交ぜながら尙ほ其總額淡水輸入の我が安全製二十五分の一も當らず其數量の小ある實に知るべきあり

臺北の茶時は支那曆の二月より始り島内の他處及び支那本部より艦

舩より來り集まるもの男女無慮四萬人を超え隨て各商業地までも茶焙女とし各地より來る婦女子は幾んど三千人の多きよ及ぶと云ふ然るは臺灣婦人の常として白粉を用ふることを支那本部の婦人よりも甚しく如何ある下等の婦人と雖も皆多く之を用ひ宛も満面を雪を積らしたるが如き觀を呈せり左れば此期節に當り他の貨物と共に香氣ある白粉を輸送するも可あるべく又近來島内の人にて少しく形容を裝ふものは廉價ある懷中時計を望むこと頻りあれば日本より雜貨と共に此類の品を送るも亦可あるべしと云ふ

臺南府よりは以前より多少我が日本の小麥を輸入し來りしが之を聞く同府城内には麥粉を製する家十二三戸あり一個の製粉所にて毎月製出する所凡そ一萬五千斤ありと云へば十二ヶ所にては凡そ十八萬斤を製出する割合にして其原料は過半日本の小麥ありと云ふ而して

此等の製粉所にては一斗百二十斤の割合を以て相場を立て日本小麦の相場は通例一斗は就き洋銀二弗二三仙位にして皆厦門より輸送すと云へり此外同地にては米國粉をも多額消費するものゝ如し明治廿三年中打狗港に輸入したる麥粉の數量は四十三万斤にして税關表は單に外國麵粉と記載しおれども是れ概ね米國粉にして品柄は最上等に非ず大抵百斤に就き二弗七八仙のものありと云ふ此等の麥粉は麵包、饅頭、點心等を用ふること各地に相同じ

又「ポルランドセメント」は臺灣の砲臺建築及び鐵道橋梁架設の爲め重要なる輸入物を爲し専ら旗昌洋行より之を買込み明治廿二年に於ては凡そ四百萬斤の取引を爲せりと云ふ

又本島物價の一斑を示さん左の如し

安平港は風浪暴くして往々甚だ上陸に危険あるを以て上陸解舟賃常

は一定せず天氣靜穩あるときは乗合解舟にて西洋人五十仙支那人二十仙又借切あれば壹弗五十仙より二弗に至るを通常とし風波暴きときは之より二倍或は三倍したる賃錢を拂はざるを得ず

安平港は税關及び英領事館、商社等ありて總て十五六名の外國人此に在住せり此港は物價甚だ高くして在留西洋人は二週間に一回の船便に依り牛肉、野菜類及び諸般の食品を厦門より取寄するを以て未だ西洋人の爲め屠牛場の如きものなく諸食品皆通常の價より五六割も高きが故に西洋人等は生計甚だ困難あり然れども我が國人は在ては支那人と雜居するの覺悟あらば別な困難を感ぜざるべし第一米は高價ならずして鳳山縣上等米百斤に就き二弗七十仙より三弗に至り鶏肉は一斤に就き清錢百十文、鶏卵は一個に就き清錢十文、猪肉は一斤に就き清錢百五十文等にして其他鱈、鱈、鰻、魚、鱈等の類多く野菜類

も亦他港と異なることあり然れども唯、不自由あるは薪として本部支那人と雖も糞物と薪を用ふるものなく総て木炭を用ふることもあるが是れども近隣に於て産出するは非ず皆北部の嘉義彰化地方より支那船を以て運搬し來るものあれば大風の時は入荷なきが爲め非常の高價と爲り平常は百斤五六十仙あるも激昂して一弗五十仙より二弗に至ること珍らしとせず石油も亦入荷の多少に因り價と差異あれども大抵一罐と就き洋銀一弗五十仙位ありと云ふ

此地外國人は關する事物は總て高價あるが現今此地の西洋人は雇はれ居る者の給金の「ホーイ」八弗より十弗「コック」七弗より十弗「クリー」厨夫六七弗として其他洗濯賃は一品と就き二仙五厘、理髮賃は五十仙、髻剃代は二十仙又諸職工の賃銀は一日と就き大工三十五仙、左官三十五仙、鐵工四十仙、銅工四十仙、人足二十五仙、牛車人足二十五仙等あり

臺南府通用の洋銀は所謂「チナドル」あるが福州厦門邊も通用するものも比すれば一層惡質として其一弗を清錢九百七十文と交換す然れども一文宛獨立しては通用せざる細小の惡錢を取交たるものを以てすれば一千百文と交換す此惡小錢は通常百文差一本の中二十四五文づゝ取交せて差しあり又小銀貨は價最も賤くして十仙銀貨は清錢僅かよ七十文位と交換すと云ふ

淡水地方は臺南と比し米價稍高きを以て支那人等蕃薯を之と交ぜ粥と爲して食すること一般あり泥尾より大稻埕に至る貨物の運送賃は「アーゴボット」として一箱大小と拘はらず十五仙又河岸より大稻埕の市街中何れまでも店ある處まで運送人足賃五六仙とす

又臺北地方に於る諸職工の賃銀は大工は三日と就き一弗又下等は一日二十五仙、左官は三日と就き一弗又下等は一日二十五仙、鐵工は一日

三十五仙銅工の一日四十五仙とす

◎ 番地貿易

本島は實藏と云へる地方あり此地は多數の支那人各方より蟬集し番族と貿易を行ふ場處として此等の支那人は専ら平常の貿易商と諸雜貨の仲買とを以て營業とす此邊一帶の地は地質豊饒にして農産物も富み就中蜀黍、蕎麥、大麥、甘蔗、蔗類を多く産し其村落の人家も接する處には又檳榔樹、烟草、密柑、桃樹の類多く繁殖せり

此地よりコーワサンと云へる地方を通過して平埔番人種の居住する處に至れば鹿、豹、熊、野猪等を始め種々の鳥獸類多く之も居り尙ほ此より進て凡そ十五英里の内地に入れば深林鬱蒼として松柏の類極めて多く繁茂し殊に此地の山林の之も沿ひ頗る廣潤ある水流あるを以て他日之を開拓して此も西洋式の鋸木所を設け盛に伐木の業を起さ

ば其利實は鮮少に非ざるべし

實藏地方は俗に民船と稱する支那蓬船を往來して貿易を營む者多く此等の民船は積載する貨物は支那製の木綿織物を主とし之も次では茶壺、鍋釜、除草器、斧等の如き鐵器類にして近來に至ては又陶器類をも大に輸入するに至れりと云ふ而して此等の蓬船は以上の貨物を蓄族に賣込み歸路は大麥、蔗仁、水牛皮、籐鹿皮、豹皮、熊皮、其他薯榔と稱する一種の染料を引取り之を本國に積み歸るを通常とす抑も此薯榔は多くカンアローンと云へる地方の山中に生殖し地中凡そ一尺許の處に在りて長さ蔓を生ず支那人は之を薯榔と云ひ平埔番人の方言にては「タツマ」と云へり其形宛も大薯に似て之を舂き砕くときは深紅色の液を出す重し魚網、索繩、帆布、其他綿布類の染用も供す其染色の耐久に至ては通常の檳皮或は栲皮の遠く及ばざるものあるを以て年々此等

蓬船<sup>そうせん</sup>も依り支那<sup>しな</sup>漁業<sup>りしやう</sup>地方<sup>ちほう</sup>も輸送<sup>くうそう</sup>するの數量<sup>すうりやう</sup>實<sup>じつ</sup>も夥<sup>おほ</sup>しと云ふ  
 斯<sup>か</sup>の如<sup>ごと</sup>くもして寶藏<sup>ほうざう</sup>地方<sup>ちほう</sup>の貿易<sup>ぼうぎ</sup>は年<sup>ねん</sup>を逐<sup>お</sup>ひ益<sup>えき</sup>繁盛<sup>はんせい</sup>も赴<sup>しゆ</sup>き隨<sup>したが</sup>て商店<sup>しょうてん</sup>の  
 數<sup>かず</sup>も亦<sup>また</sup>大<sup>おほ</sup>く増加<sup>ぞうか</sup>せるを以<sup>もつ</sup>て該地<sup>がいち</sup>年間<sup>ねんかん</sup>の貿易<sup>ぼうぎ</sup>高<sup>たか</sup>は必<sup>かなら</sup>ず多額<sup>たがく</sup>も上<sup>あ</sup>るもの  
 あるべし今<sup>いま</sup>土地<sup>ちど</sup>水利<sup>すいり</sup>の便<sup>べん</sup>より之<sup>これ</sup>を云<sup>い</sup>ふとき此<sup>こゝ</sup>寶藏<sup>ほうざう</sup>のチリエーラー  
 とい<sup>い</sup>ふ云<sup>い</sup>へる地方<sup>ちほう</sup>も比<sup>ひ</sup>し稍<sup>せう</sup>及<sup>およ</sup>びざるものおきも非<sup>た</sup>ずと雖<sup>な</sup>も元來<sup>げんらい</sup>此地<sup>ちち</sup>の  
 臺灣<sup>たいわん</sup>番族<sup>ばんしゆ</sup>の最<sup>も</sup>も稠密<sup>ちゆうみつ</sup>も棲住<sup>せいじゆ</sup>する地方<sup>ちほう</sup>も接近<sup>せつじん</sup>せるを以<sup>もつ</sup>て貿易<sup>ぼうぎ</sup>常<sup>じょう</sup>も旺盛<sup>わんせい</sup>  
 を極<sup>ごく</sup>め畢竟<sup>ひつじやう</sup>臺灣<sup>たいわん</sup>東南<sup>とうなん</sup>岸<sup>がん</sup>も於<sup>お</sup>る各地<sup>ちち</sup>の通商<sup>つうしやう</sup>倉庫<sup>そうこ</sup>と爲<sup>な</sup>るの益<sup>えき</sup>も多<sup>おほ</sup>く  
 多<sup>おほ</sup>くあらざるべし  
 此<sup>こゝ</sup>地方<sup>ちほう</sup>も於<sup>お</sup>て最<sup>も</sup>も需<sup>じつ</sup>要多<sup>た</sup>き支那<sup>しな</sup>製<sup>せい</sup>の強<sup>きやう</sup>靱<sup>じん</sup>ある木綿<sup>もくめん</sup>布<sup>ふ</sup>長さ<sup>ながさ</sup>二十六<sup>じゅうろく</sup>英<sup>えい</sup>  
 尺<sup>せき</sup>幅<sup>はく</sup>一<sup>いつ</sup>英<sup>えい</sup>尺<sup>せき</sup>六<sup>ろく</sup>寸<sup>すん</sup>位<sup>ゐ</sup>のものもして其<sup>その</sup>地<sup>ち</sup>合<sup>あ</sup>の強<sup>きやう</sup>きこと米<sup>まい</sup>國<sup>こく</sup>製<sup>せい</sup>の雲<sup>うん</sup>齋<sup>さい</sup>木<sup>もく</sup>綿<sup>めん</sup>  
 よりも遙<sup>はる</sup>か優<sup>まさ</sup>れりと云<sup>い</sup>ふ此<sup>こゝ</sup>綿<sup>めん</sup>布<sup>ふ</sup>の常<sup>じょう</sup>も支那<sup>しな</sup>地方<sup>ちほう</sup>もて買<sup>か</sup>入れ之<sup>これ</sup>を臺<sup>たい</sup>  
 南<sup>なん</sup>府<sup>ふ</sup>も送<sup>おく</sup>り同<sup>どう</sup>地<sup>ち</sup>も於<sup>お</sup>て土<sup>ど</sup>番<sup>ばん</sup>の需<sup>じつ</sup>要<sup>よう</sup>も適<sup>てき</sup>する色<sup>いろ</sup>合<sup>あ</sup>も染<sup>そ</sup>め上<sup>あ</sup>げ以<sup>もつ</sup>て内<sup>ない</sup>地<sup>ち</sup>

も輸送<sup>くうそう</sup>するを通例<sup>つうれい</sup>とす而<sup>しか</sup>して此<sup>こゝ</sup>等<sup>とう</sup>臺灣<sup>たいわん</sup>東岸<sup>とうがん</sup>地方<sup>ちほう</sup>の需<sup>じつ</sup>要<sup>よう</sup>も適<sup>てき</sup>するの大  
 抵<sup>たい</sup>一<sup>いつ</sup>疋<sup>ふつ</sup>の價<sup>あたい</sup>洋銀<sup>やうぎん</sup>壹<sup>いつ</sup>弗<sup>ふ</sup>位<sup>ゐ</sup>のものも在<sup>あ</sup>りと云<sup>い</sup>ふ  
 右<sup>みぎ</sup>も云<sup>い</sup>ふ如<sup>ごと</sup>く該<sup>がい</sup>地方<sup>ちほう</sup>も於<sup>お</sup>て需<sup>じつ</sup>要<sup>よう</sup>の最<sup>も</sup>も多<sup>おほ</sup>き木綿<sup>もくめん</sup>布<sup>ふ</sup>もして近<sup>きん</sup>來<sup>らい</sup>支那<sup>しな</sup>  
 船<sup>せん</sup>を以<sup>もつ</sup>て此<sup>こゝ</sup>も輸送<sup>くうそう</sup>する綿<sup>めん</sup>布<sup>ふ</sup>の其<sup>その</sup>數<sup>すう</sup>量<sup>りやう</sup>必<sup>かなら</sup>ず多額<sup>たがく</sup>あるべし此<sup>こゝ</sup>等<sup>とう</sup>綿<sup>めん</sup>布<sup>ふ</sup>の色<sup>いろ</sup>  
 合<sup>あ</sup>ひ黒<sup>くろ</sup>色<sup>いろ</sup>五<sup>ご</sup>分<sup>ぶん</sup>あれば青<sup>あお</sup>色<sup>いろ</sup>二<sup>に</sup>分<sup>ぶん</sup>の割合<sup>わりあひ</sup>もして其<sup>その</sup>價<sup>あたい</sup>の大<sup>おほ</sup>抵<sup>たい</sup>黒<sup>くろ</sup>染<sup>ぞう</sup>一<sup>いつ</sup>疋<sup>ふつ</sup>も就<sup>す</sup>  
 き洋銀<sup>やうぎん</sup>七十二<sup>しちじふに</sup>仙<sup>せん</sup>青<sup>あお</sup>染<sup>ぞう</sup>六<sup>ろく</sup>十二<sup>じふに</sup>仙<sup>せん</sup>位<sup>ゐ</sup>を以<sup>もつ</sup>て取<sup>と</sup>引<sup>ひ</sup>す西<sup>せい</sup>洋<sup>やう</sup>製<sup>せい</sup>造<sup>ぞう</sup>品<sup>ひん</sup>もて該<sup>がい</sup>地方<sup>ちほう</sup>  
 も輸<sup>く</sup>入<sup>にゅう</sup>販<sup>はん</sup>賣<sup>ばい</sup>するもの僅<sup>ちひ</sup>かも輕<sup>けい</sup>弱<sup>じやく</sup>ある紅<sup>こう</sup>色<sup>いろ</sup>の綿<sup>めん</sup>糸<sup>いと</sup>と紅<sup>こう</sup>色<sup>いろ</sup>綠<sup>りく</sup>色<sup>いろ</sup>及び黃<sup>わう</sup>  
 色<sup>いろ</sup>の毛<sup>け</sup>織<sup>お</sup>物<sup>ぶつ</sup>等<sup>とう</sup>の數<sup>すう</sup>品<sup>ひん</sup>も在<sup>あ</sup>り  
 此<sup>こゝ</sup>綿<sup>めん</sup>糸<sup>いと</sup>の之<sup>これ</sup>を以<sup>もつ</sup>て番<sup>ばん</sup>民<sup>みん</sup>自<sup>みづか</sup>ら綿<sup>めん</sup>糸<sup>いと</sup>を製<sup>せい</sup>し縫<sup>ぬい</sup>箔<sup>ぱく</sup>の用<sup>もち</sup>も供<sup>き</sup>じ又<sup>また</sup>の毛<sup>け</sup>髮<sup>はつ</sup>を  
 束<sup>たば</sup>ぬるも用<sup>もち</sup>ふ其<sup>その</sup>毛<sup>け</sup>織<sup>お</sup>物<sup>ぶつ</sup>の幅<sup>はく</sup>凡<sup>たゞ</sup>そ四<sup>し</sup>寸<sup>すん</sup>位<sup>ゐ</sup>の條<sup>じょう</sup>片<sup>ぺん</sup>も裁<sup>た</sup>ち切<sup>き</sup>り其<sup>その</sup>各<sup>かく</sup>色<sup>いろ</sup>を繼<sup>つ</sup>  
 合<sup>あ</sup>せて上<sup>う</sup>衣<sup>い</sup>の類<sup>るい</sup>を製<sup>せい</sup>すと云<sup>い</sup>ふ漫<sup>まん</sup>遊<sup>ゆう</sup>者<sup>しや</sup>某<sup>か</sup>嘗<sup>かつ</sup>て土<sup>ど</sup>番<sup>ばん</sup>も向<sup>むか</sup>ひ西<sup>せい</sup>洋<sup>やう</sup>の木<sup>もく</sup>綿<sup>めん</sup>織<sup>お</sup>  
 物<sup>ぶつ</sup>の價<sup>あたい</sup>極<sup>ごく</sup>て廉<sup>れん</sup>あるも何<sup>なに</sup>故<sup>ゆゑ</sup>此<sup>こゝ</sup>市<sup>し</sup>場<sup>じやう</sup>の需<sup>じつ</sup>要<sup>よう</sup>も適<sup>てき</sup>せざる乎<sup>や</sup>と問<sup>と</sup>ひし土<sup>ど</sup>番<sup>ばん</sup>



之に答へて其之を好まざるの他、あらず西洋製の綿布の支那製は比して甚だ薄弱あるのみならず、殊に彼の西洋金巾類の如き、其寸尺衣服の裁製に適せず、強ひて之を衣服に裁製するときは、數多無用の剩片を生ずるを免れず、故に衣服の裏又、富裕家の下衣等、に適せざるに非ざるも、我々の如く、日、山野を跋渉し、強き勞動に従ふ者、に到底其用を爲さずと云へり、と此問答の末、土番の米國麥粉五斗、ポンド入の木綿袋一個を持出し、何故に此の如き織物を輸入せざる乎、此綿布の我々を取り最も適當の品として、彼の福建地方にて製造するもの、は比すれば遙か、品質も好く、必ず此地方の需要に適すべき、と語れり、と云ふに、以上の各地貿易の景況一斑を叙するもの、あるが、右綿布の事、因みて爰に一言せんと欲する、今や臺灣の我が新版圖に入ると、當り此期を機とし、本邦木綿織物の輸入を彼の地及び南支那各地に擴張するの極

めて重要あるに在り、近來我が日本綿布の臺灣及び南支那各地に輸入するもの、年を逐ふて其多きを加へ、臺南淡水打狗の諸港より、廣東海南の諸島に至るまで、漸く之が販路を擴め、頗る土人の嗜好に適して到る處、名聲噴々たるの有様あるに、前既述べたる如く、されば此機に乗じ、益、其品位に改良を加へ、臺灣本島の勿論、南支那各地に販路を擴張せ、其需用の度の實に無限あるべし、而して其需要に適する寸尺及び價直を知るに、當業者は取り最も必要の事たるべきを以て、今左に臺灣地方に於て一般に使用する支那綿布の種類中、就き其重なるもの五種を擧げ、以て其参考の一端と資せんとす

第一の最も粗製品は、係り一疋の長さ二十四尺、幅一尺七寸、總て英尺を以て記す、以下之は、倣へ（の物）として二十五疋を以て一包と爲し、同種の綿布を以て包装せり、一包の賣價、太約洋銀十二弗五十仙、として一疋の

小賣價五十仙あり

第二の崇明布と稱へ稍上品に屬す一疋の長さ凡そ六十尺幅一尺七寸の物にして十疋を以て一包と爲し同種の綿布を以て包装せり臺南府に於る一包の賣價太約十九弗五十仙にて一疋の小賣價一弗九十五仙あり

第三の薄手の粗布にして一般の人民多く喪服に用ふ一疋の長さ二十五尺幅一尺八寸の物にして二十五疋を以て一包と爲せり其一包の賣價太約十弗一包の小賣價五十仙とす

第四の稍細糸を以て織りたる品にして一般に常服に用ふ一疋の長さ二十五尺幅一尺七寸五分の物にして二十五疋を以て一包と爲し同種の綿布を以て包装せり一包の賣價太約十六弗五十仙一疋の小賣價七十六仙とす

第五の俗に美國府と稱へ支那製中の最上等品あり一疋の長さ六十尺幅二尺二寸位にして一百疋を鉛葉にて裏張りしたる木箱に裝入せり臺南府に於る賣價一疋に就き洋銀一弗七十五仙あり聞く所は據れば美國と云へる字號の臺灣綿布商の觀て以て美を稱表するの意あるが此綿布は支那人が米國製の P.M.C.D. の記號ある金巾を模造せしものあらんと云ふ

從來臺灣各地に於て需要する諸種の支那製綿布は大抵支那運船を以て輸入し常に西洋形船に搭載せしことあらざりしが近時に至り該地方の販路日を逐ふて廣大に赴きしより今日では特に西洋形船にて輸入するもののみを以てするも其元價太約海關銀三四萬兩より五六萬兩の多額に登るに至れり此等の綿布は上海及び揚子江下流の各地方よりも多少輸入せざるに非ざるも此等は唯僅々たるものにして全

輸入額の七八分は皆福建省の南部即ち漳州府の石尾東橋港口及び泉州府の同安地方に於て製造し厦門港より輸入するものより係り同港等  
 に於ては俗に之を土布と稱せり從來此等綿布の製造は供する綿糸は  
 經緯共支那人の手紡に係るものを使用せしが近時又至ては極めて  
 粗糸の綿布を除くの外大概西洋器械糸と支那手紡糸と混用するも多  
 く而して西洋糸は之を經線に用ひ支那糸之を緯線に供せり  
 抑も臺灣は前巡撫劉銘傳の熱心ある經營より諸般の事業日々就り  
 月々將むと同時支那地方より移住する者陸續として踵を接し今日  
 人口著しく増加の勢ひを呈せるは争ふべからざる所にして臺灣は昔  
 より清國福建省の外府と稱へ米穀産出の地方ありしも今は却て米穀  
 雜豆の供給を他地方より仰ぐに至り内外諸雜貨も亦隨て其輸入上著  
 大の進歩を來したり苟も我邦東洋貿易を志す者は之を等閑視するこ

と亦く宜しく心目を臺灣の現情に注ぎ此は雜貨の好市場を得て他日  
 東洋貿易界に雄飛するの大根據地を爲すを遺忘する勿かるべし

◎ 生番事情

臺灣の生番は往昔より十八社ありとは世人の唱道する所ありしが是  
 れ畢竟本島の極南部に在る恒春縣琅璠附近の地を指して云へるもの  
 にして決して全島に就て云ひしもの非ざるを知る元來琅璠地方  
 は上十八社下十八社と稱し各十八個の番社ありしも曩は臺灣府地方  
 官の明治十二年即ち光緒五年を以て行へる調査に據れば當時番社の  
 數は五十八社にして外に又卑南番社と稱するもの四十六社ありて卑  
 南地方を割據せりと云ふ  
 其れ然り番社と稱するもの多きこと斯の如し然れども今臺灣全島に  
 居る生番の種族を大別すれば僅かに四種族より成るを知る曰くバイ

ワン曰くデボン曰くアミヤス曰く平埔是あり而して今其四種族の事を畧記せん左の如し

第一パイワン種族 此種族は臺灣の生番中最も古昔より此島に居住するものにして軀幹頗る偉大にして顔面銅色を帯び其性活潑にして其質最も犇猛あり常々貪殘にして怒り易く一たび怒るときは其身を忘れ性命を顧みざるに至る此種族は総て千尺を超ゆる高山の頂上へ棲居し衣服は平常膝掛の如きものを胸と背と掛け又其上へ鹿皮を以て製したる「ジャケット」の如きものを用ふ彼の牡丹社と稱するに即ち此種族に係ると云ふ毎年秋季收納の節に當れば其部落中へ人頭祭と云へるにあり各處より數多の頭骨を齎らし之を一場と陳列して其多きを競ひ其多少に因りて甲乙を立て賞與を爲し恰も頭骨の共進會とも稱すべきものを演ず蠻俗の殘慘亦驚く堪へたり此種族は最も酒を嗜み凡そ生番は其常として何れも酒を好まざるものなしと雖も特々此種族に於て甚しきものあり其心情最も欲望する所は酒の酔をして常々醒めざらしむるに在りと云ふ

第二デボン種族 此種族はパイワン族に次で臺灣に來りしものにて其初め何れの處より渡來せし乎は之を知るを得ざれども其徒の口牌に傳ふる所を以てすれば北部の諸島より幾組も分れ此に移住せしものありと云へり此種族は軀幹パイワン族より短小にして性質も亦稍順良に屬すれども一般風俗に至ては別々大に異なるものあるを見ず蓋し其居住の相接近するに因るものあらん歟唯酋長の一族に限り手甲手指及び手腕に刺文を爲し他の通常人よりは之を許さざるの特俗あり此種族中よりは又近來間々支那人と結婚するものありと云ふ

衣服はパイワン族の如く前後に膝掛の如きものを掛くこと亦常

又脛衣と胸當を用ひ寒冷の時は其上に牛皮の外套を纏ふ又酋長は禮式の日も當り美麗なる花毛氈様の物を以て作りたる長衣を着す此種族の生計は専ら農業にして兼ぬるは獵獸捕魚の事を以てす別又鐵工銀工の類ありて初め此種族の臺灣に來りし時は或は半開の人類にてはあらざりし歟と疑ものあり傳ふる所の一説又據れば此種族は往昔南部の卑南地方に割據し卑南全部の一の王位を保ちしことありと云へり

第三アミヤス種族 此種族は重番地の中央部に居住し支那人及び外國人は他の生番を見ると均しく之を「サウエーソス」又は生番と稱すれども他の二番族よりは却て又此種族を異人と稱すとかや初め此種族は卑南に接するコワーサンと云へる地方の一の殖民地を開き此より漸く中央部を蠶食せしものあるを以て今日に至ても尙ほ其徒はコ

ワサンを以て故郷と爲すと云へり又一説又據れば此種族は昔時一艘の大船に乗りたる儘臺灣島の東岸に漂着し乗組人等此に上陸して土人の救助を乞ひしと土人等此遭難者を恤み之を救ひて終に同族の婦女子と結婚をも許すに至りしに當時之に條件を附して其漂着者及び子孫は後年末世に至るまで一の異國人として此等番人の爲め忠實を盡し如何なる事をも服従して決して背くべからずと爲せしより此種族は今日に至ても尙ほ他種族に於る酋長等の命令に抗すること能はず一般の社交上も於ても他の番族と對等の交際を爲すこと能はずして例へば各番族の大集會ある時の如き先づ他族の悉く坐を定め酒杯を把るに至るまでは必ず其席末に控へ居らざるべからざる等の事ありと云ふ

此種族は身体骨節他の種族と稍異なり全身多毛にして筋骨皮肉の類

頗る發達し風俗習慣も亦種々異なるもの多し例へば他の番族中又在  
 ては新年即ち正月と云へるが如きものあらざるも獨り此アミヤス種  
 族中又在ては毎秋收穫の期を以て新年と爲し種々の祭を爲す等の事  
 あり又往昔は文字もありしと云へり  
 抑も此アミヤスと云へる語は何國の語ある乎其出處根源未だ之を知  
 るよ由さしと雖も決して臺灣の土語よあらす又支那語よもあらざる  
 よ似たり蓋し外國語よはあらざるあき乎前既陳ふるが如く臺灣本  
 島の東南二十六海里の海中に紅頭嶼即ち西洋人の所謂ポナル、ドバゴ  
 ーと云へる一小島あり其島民は風俗其他本島の中部落住するアミ  
 ヤス種族よ頗る類似すと云ひ又其島内よ飼養する一種美麗なる山羊  
 を「カクリ」と名け其「カクリ」と云へるは葡萄牙の語ありと云ひ又曩  
 よ恒春縣令は官命よ由り船政局の學生を從ひ明治十年即ち光緒三年

を以て此島を巡察せしことありしよ其復命書中此島よ番族穴居し  
 て農事を知らず唯少許の雜糧を作り魚を捕へ或は鶏羊豕を養ひ以て  
 生計を營み其番族の容貌の臺灣本島の生番と異なることあきよ其性  
 質順良よして言語の大西洋人よ似たりとあり其大西洋人とは支那人  
 常よ葡萄牙人を指すの稱されば蓋し此等或は他日の一考証と爲す  
 よ足るものあらん歟

第四平埔種族 此種族の支那人の俗よ熟番と稱する所のものよして  
 父の支那人母の生番よして即ち兩者の雜種よ出づと云ふ然れども外  
 國宣教師等よ之を然らずとし此族も亦一種特別の種族よして外より  
 來りしものとせり然るよ此種族の最も農業よ適當し他の三種族と全  
 く異なる所あるを以て外國人等は又之を以て或は琉球地方の移住民  
 よはあらざるなき乎と疑ひ察するものあるよ至る其性質たりや甚だ

順良<sup>じゆんりやう</sup>として専ら農事を勉め近來<sup>きんらい</sup>に至ては漸く支那人と混合し日を逐<sup>お</sup>ふて其舊習<sup>きうしゆ</sup>を脱するの有様<sup>ありさま</sup>は居れり支那人等常<sup>つね</sup>之を謂て曰く平埔<sup>へいぽ</sup>を穿<sup>う</sup>れば我が爲め耕地<sup>けいち</sup>ありしと蓋し平埔の性を穿ち得たるの言<sup>ことば</sup>と謂ふべし而して此族は常<sup>つね</sup>決して人を殺さず又決して他族の領分<sup>りやうぶん</sup>を襲ふことありし

現今淡水を距る凡そ五十英里の東海岸<sup>とうかいがん</sup>はサオーベイと云へる一灣ありて其入口は二個の村落あり此地の元と平埔番の割據せし處ありと云ひ又基隆の前面<sup>ぜんめん</sup>は當る海中<sup>かいちゆう</sup>はパーム、アイランドと云へる一小島あり近時<sup>きんじ</sup>に至るまで此番多く此<sup>こゝ</sup>に居住せしも曩<sup>なご</sup>は佛國軍艦基隆を攻撃せし<sup>せ</sup>に當り概ね逃れて内地<sup>うちち</sup>に移れりと云ふ然るは昔時<sup>むかし</sup>基隆より淡水<sup>たんすい</sup>に至るの間<sup>ま</sup>は日本人和蘭人西班牙人等多く居住せしこと疑ふべからざる所<sup>ところ</sup>あり恐らくは此等の人種も亦多少之を混合せしあらん歟

と云ふものあり

此平埔番<sup>へいぽばん</sup>の元と文字ありしや否や甚だ詳かあらず尤も今日の一もこれあらずして多年臺灣<sup>たいわん</sup>に在りし西洋人の説を聞くも別<sup>べつ</sup>に文字ありざりしあらんと云へるのみ嘗て一の外國商人あり基隆<sup>きんろん</sup>に於て一大土地を買入れし其土地の元と同地の平埔番より支那人<sup>しやなじん</sup>に譲渡したるものよし其當時<sup>たうじ</sup>双方の間<sup>ま</sup>は交換したる契券<sup>けいけん</sup>あり其契面<sup>けいめん</sup>は支那人の豚と山羊とを平埔番<sup>へいぽばん</sup>と與へ平埔番の土地を支那人<sup>しやなじん</sup>と與へ以て交換したりと記載<sup>きざい</sup>しありて契面の日附は西曆千七百九十年<sup>せいれきせんしちひやくきゅうじゅうねん</sup>に相當し當時<sup>たうじ</sup>に於る平埔の頭分たる者之<sup>その</sup>に押印<sup>おしいん</sup>を押し居れりと云ふ

平埔の婦人の体格強壯<sup>たいかくかうさう</sup>として道を行くも体を直立し其他應對進退<sup>おたひたいしんたい</sup>の活潑<sup>かつぱく</sup>なる彼の支那婦人の柔弱<sup>じゆわく</sup>因循<sup>いんじゆん</sup>なるが如くあらず左れば現今此等の平埔婦人の漸く北部の海岸<sup>かいがん</sup>に居住する支那の漁夫<sup>りしふ</sup>等と結婚し支

那の服装を用ふと雖も其坐作進退上より一見して容易に支那婦人との識別を得べし之を要するは平埔婦人の一般に沈着謹慎にして彼の支那婦人の外國人を見て忽ち恐怖心を起し或は之を惡口し或は面を蔽ふて逃ぐるが如き輕舉莽味の事を爲さず何人とも雖も彼等と通するものあれば喜んで之を迎へ之を答ふるは脚躡する所ありと云ふ

以上四種族の外又別々客家(一は哈略と作る)と稱する一の種族あり此等の徒は一見支那人と異ならずと雖も支那人等との之を別個の種族とし即ち其名字の如く他より來りし客人として待遇せり然れども其源は溯り其起る所を尋ねれば此種族の時代を詳かよせざれども其先南廣東邊より移住せしものたるに似たり一説は元末の人として初め山東地方より漸次南支那地方に移りしものありとも云へり蓋し

此類の人種の古より支那内地にも往々少からずして即ち廣東の客家の如き四川貴州雲南の苗子の如き海南島の李家の如き福建北部の狗頭番の如き浙江温州地方の蛋家の如き皆支那人より視て之を一種化外の民と倣せり

此客家と稱する種族は臺灣の各地方に頗る多くして純粹の支那人との常々相和せず争門斷ゆるの日おし其住處に恰も生番地方と支那人の居住する地方との中間に在りて専ら農業に従事し支那人等俗と稱して之を内山の客人と云ふ

臺灣番族の種類の以上五種に止りて總て此他に出づるものなし今此等の番族殊に生番と支那人との交際關係如何と云ふは殆んど著者等の意想外に出づるものあり世人に必ず之を想はん生番と支那人との從來永く此土に棲住し僅か一條の山脈を隔て、咫尺に相接するも



のかれハ彼此文野の別こそあれ互ひハ幾分の相識ありて自から情の親しきものあらん之を海外萬里の異境ニ生れ殊ニ全く人種を異したる西洋白哲人ニ比すれば親疎固より霄壤の別あるべしと著者の如きも實ニ之を思へり然るニ之を探検者ニ聞及で豈圖らん余輩の想像したる所の主客全く顛倒して支那人と生番との關係疎隔あるに遠く西洋人と生番との交際親密あるニ若かざるものあらんとい今探検者の説く所を聞くニ支那人と生番との既ニ數百年來同一の島内ニ居住し時ニ相見相識るも拘りらず生番の支那人ニ對するニ其西洋人ニ對するの意外ニ親密あるが如くならずして常ニ接するニ不親不和を以てし目するニ仇敵を以てし其狀實ニ秦楚も管亦らずと云ふ今其所以を尋ぬるニ西洋人の古より常ニ信實と友誼とを重んじて之ニ交り現ニ和蘭人の如きハ往昔番地ニ學校を建て土番ニ羅馬字を教へ

たることさへありて大ニ番人の徳望を得たるニ支那人の初め臺灣ニ移住せしより今日ニ至るまで常ニ狡智を以て生番を瞞着し唯己れを利するニ汲々として其間毫も友愛心と稱すべきものを存せざるより自然ニ生番の嫌忌を來し何れの支那人を見るも皆斯の如きものとして常ニ仇敵視し到底兩者の間ニ和親を見る能はざるニ至りしものぞ知らる

今之を聞くニ四五年前臺灣ニ在る支那稅關の西洋人該島南部の内地を巡視し或る生番地ニ到り酋長と會見せしニ其時酋長の極めて古き板ニ西洋家屋の圖を畫きたるものを持出し其西洋人ニ示して曰く我れより數代の前紅毛人此地方ニ來り同居し居たりしニ或る日偶々一艘の大船來り急ニ其人々を乗せ歸りしことあり其時彼等は此圖を我が祖先ニ贈り以て再會を期したるものなりと代々言ひ傳へ今ニ秘藏す

る所ありと而して頻り之を珍重するもの、如くありしと云へり夫れ斯の如く既ニ數百年を経過したる今日に至り尙ほ當時の事を言ひ傳へ毫も忘失するなきを以て見るときは昔時和蘭人等此島ニ居住せし常時況在ては此ニ學校の如きものを設けて土番を教育し又宣教師の如きは常ニ土番と同居して信實の交を爲し其優情自から土番の心ヲ銘せしものと知らるゝあり此等の事よりして自然西洋人ニ對しては今日に至るも一点心ニ挾む所なく常ニ親密の意を表するに至るものあり

然るニ支那人を如何と云ふニ該島ニ移住し始めたるは實ニ千六百八十二年の頃即ち支那の康熙二十二年前後の事ニして是より以後福建廣東等より生存競争の最も甚しき人民一時ニ蟻の如く集り來りて生番の住處を蠶食し猾智ニ任せて種々の利益を占奪せしより元ニ該島

の西海岸ニ接し居住したる生番等は之と争ふこと能はず已むを得ずして漸く内部ニ退去し自然怨惡の念を支那人ニ挾むに至りしも支那人等毫も之を意とせず其無智正直ニして文字も亦く唯、目前ニ觸るゝ事物の外毫も前後の思慮なきを奇貨とし爾來力の及ぶ限りを盡して欺瞞を逞うせるより益、其怨恨を深くし竟ニ今日の疎隔と仇敵の情を造るに至りしものあり

爰ニ此質朴ある生番と狡猾ある支那人とニ就き最も穿ち得たる一話あり之を聞くニ或る日二人の生番あり三個の墨西哥弗を携へて互ニ其所有を争ひしが到底果てしなきより終ニ二人の間ニ之を折半することニ決せしニ人は二人ニして弗は三個あれば先づ各、其一個宛を取りしも餘の一個ニ就ては之を平分する方法を得ず暫く道路の中央ニ坐して互ニ思案を凝らせしが之を我れニ取れば彼れニ不滿あり彼

れは收むれば我れは不足にして到底互に満足を得る能はず頻り其處分は苦み居たり時偶一支那人の此を通行するあり此体を見異みて其故を問ひし生番等答ふるは實を以てし幸ひ其問題を解かんことを請ひければ支那人は最も易しとして之を諾し自から微笑しおがら其三枚の弗を取り一枚を甲分ち一枚を乙分ち配し餘の一枚を己れの懷中納れ以て萬歳を連呼し拍手して相分れたり云ふ是れ實は支那人と生番の智愚狡直を一擧に表明するの一話と謂ふべし夫れ然り支那人の爲す所常々斯の如くにして生番等の之を思み之を惡むこと前陳の如くあるが故に生番と界を接するの支那人と雖も男子は容易に其界内に入るを得ず是を以て外國人等用事ありて生番地界に使を遣さんとするときは特に土人の婦女子を雇ひて之を遣すと云ふ

今を距る三四年前我邦の一紳士自から臺灣番地に入り親しく生番の事情を視察せる一篇の手記を得之を一讀するに頗る其情況を詳かよするものあり因て左に生番地紀行と題し之を掲載して讀者の一察を供せんとす

◎生番地紀行

余の到りし處は生番中最も大部分を占むるトコハム地方にして此等の番人は常々支那人と争闘し頗る慍悍の聞えある一民族あり尤も深く此等の地に入らんとするは相當の護衛を帯びざれば危険尠からずと云ふに嘗て外國宣教師等より聞及びたるを以て先づ一應其地界に抵り都合を見て如何とすべしと決心し臺北府艦艀より出發したり

生番界に入るは必ず先づ相當の進物品を携帶すべきこと最も必

要として出發し前ち酒、卷煙草、料鈕、西洋赤染牛毛糸、真鍮の鈕子、白色の煉物鈕子等の如き彼等の最も嗜好する物品を買入れたり。斯くて余は轎子を雇ひ通辨者及び從者各一名を從へ、船舩より東南に向て數里の平原を越え午後一時頃、新居と云へる一村落に著し夫れより數條の川を渡り或は高さ五百尺の山を越へ以て屈尺と云へる地方に達したり此處四五年前までの生番割據の地たりしも近來に至り支那人の所有地と爲り近傍の諸山より茶園ありて茶樹繁茂し現今支那人の家屋此は五六戸ありて番人と支那人の交易場と爲れり此處にて番地の案内者を雇入れんとしたれども當時此地に此等の者なく尙ほ進で番地と接する處に至らざれば得ること難しとのことされば屈尺より又一條の川を渡り、納仔社界に入り稍番語を通じたる一の案内者を雇ひ得たり因て直ち相携へ番人の割

據する處に行きて彼等と會合すべきことを相談したるは案内者曰く貴下身より一兵器を帯びずして番人の巢窟に入るは甚だ危険あり先づ自分一人山中に入り貴下の此に來て面會を望まるとことを彼等と告げて如何と是に於て余の案内者の言ふ所を任せ暫時其處を待つことし且つ案内者を命じて曰く余の欲する所の最も頭目たる酋長の如き人物を會談するは在れば宜しく其意を致せと斯くて案内者の先づ己れの着たる衣服を脱ぎて番衣を着換へ辮子を巻きて番帽を戴き腰より一刀を帯び一身悉く番風を装ひければ今までの支那人の忽ち番人と化し直ち進で山中に入りしが待つこと暫時として六名の番人案内者と共に馳せ來り余が休息したる茅屋に入れり余の一々之を挨拶を爲し几を與へて坐し就かしむ此六名の中一名の酋長として名をワソノユーと呼び一名の其妻